

安倍館遺跡

—厨川城跡の調査—



寛文8年(1668)書上 栗谷川古城図(盛岡市中央公民館蔵)

1999. 3

盛岡市教育委員会

あ べ だて
安 倍 館 遺 跡

—厨川城跡の調査—

1999. 3

盛岡市教育委員会

序 言

盛岡市安倍館町にある安倍館遺跡は、古くから前九年の役の史跡として、また工藤氏の居城跡として、広く知られてきた遺跡です。北上川を眼下にする城跡は、市街地にありながら今でも深い堀の跡を残し、緑豊かな周囲の景観と相俟って、親しみのある環境をつくり出しています。

盛岡市では昭和 61 年度から住宅等の改築にともなう発掘調査を実施してまいりました。その結果、遺跡は戦国時代の工藤氏の城館であることがほぼ明らかとなり、平安時代後期の安倍氏の城柵の可能性はやや薄くなった感があります。しかし南部氏が盛岡城と城下を建設する以前において、厨川城は岩手郡最大の要となる城であり、盛岡のなりたちを知るうえで、欠かすことのできない遺跡です。

盛岡市では、縄文時代の大館町遺跡、古代の志波城跡や近世の盛岡城等とともに、市内の中核史跡として位置づけ、遺跡の保存と活用に向けて、一層邁進する所存であります。

最後になりましたが、調査を進めるにあたり、御指導いただきました文化庁記念物課、岩手県教育委員会文化課、並びに、日頃から深い御理解・御協力をいただきました、地元安倍館自治会の皆様に、厚く御礼申し上げ、報告書刊行のごあいさつといたします。

平成 11 年 3 月 30 日

盛岡市教育委員会

教育長 佐々木 初 朗

目 次

序言

例言

目次

I 遺跡の環境	1
II 調査経過	8
III 調査成果	13
1. 外館の調査	13
2. 北館の調査	29
3. 本丸の調査	29
4. 中館の調査	51
5. 南館の調査	61
6. 帯曲輪の調査	65
7. 郭外の調査	69
IV 調査のまとめ	80

表 目 次

第1表 発掘調査成果一覧(1)	9
第2表 発掘調査成果一覧(2)	10
第3表 発掘調査成果一覧(3)	11
第4表 岩手郡・紫波郡城館一覧	90～93

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位置図	1
第 2 図	安倍館遺跡と周辺の関連遺跡 (1:10000)	4
第 3 図	安倍館遺跡全体図 (1:3000)	7
第 4 図	外館・北館全体図 (1:500)	14・15
第 5 図	第 66 次調査区遺構図 (1)	16
第 6 図	第 66 次調査区遺構図 (2)	17
第 7 図	R D 015~021・024~028・031 土坑	18
第 8 図	R D 022・023・029・030 土坑	19
第 9 図	R D 022 土坑出土遺物	21
第 10 図	R D 030 土坑出土遺物	22
第 11 図	遺物包含層出土土器	24
第 12 図	遺物包含層出土石器 (1)	25
第 13 図	遺物包含層出土石器 (2)	26
第 14 図	北トレンチ遺構図	27
第 15 図	第 51 次調査区 S X 401 道路状遺構	28
第 16 図	本丸全体図 (1:500)	30・31
第 17 図	第 45 次調査区全体図	32
第 18 図	S I 508・509 竪穴建物跡、S K 501・R D 034 土坑	33
第 19 図	第 46 次・第 51 次調査区全体図	35
第 20 図	S I 510 竪穴建物跡	37
第 21 図	第 49 次調査区全体図	39
第 22 図	S I 511 竪穴建物跡、S K 502・503 土坑	40
第 23 図	第 59 次調査区遺構図	41
第 24 図	第 60 次調査区遺構図	43
第 25 図	第 51 次・第 73 次調査区遺構図	45
第 26 図	第 51 次調査区遺構図	46
第 27 図	第 51 次調査区遺構土層断面	47
第 28 図	第 73 次調査区遺構土層断面	48
第 29 図	本丸跡出土遺物(1)	49
第 30 図	本丸跡出土遺物(2)	50
第 31 図	中館全体図(1:500)	52
第 32 図	第 23 次・29 次調査区全体図	53
第 33 図	第 29 次調査区遺構土層断面図	54
第 34 図	第 30 次調査区全体図	55
第 35 図	S I 602 竪穴建物跡、S K 619~621 土坑	57

第 36 図	第 31 次調査区遺構図	58
第 37 図	第 52 次調査区全体図	59
第 38 図	S I 603・604 竪穴建物跡	60
第 39 図	南館全体図(1:500)	62
第 40 図	第 44 次調査区全体図	63
第 41 図	第 70 次調査区全体図	64
第 42 図	第 72 次調査区全体図	64
第 43 図	帯曲輪中央部全体図	66
第 44 図	第 63 次調査区遺構図	67
第 45 図	第 71 次調査区全体図	68
第 46 図	勾当館北東部全体図(1:500)	70
第 47 図	第 26 次調査区全体図	71
第 48 図	S I 101・102 竪穴建物跡、S K 112・113 土坑	73
第 49 図	S K 101~111 土坑、S D 101 溝跡	75
第 50 図	S K 114~120 土坑	77
第 51 図	第 47 次調査区全体図	78
第 52 図	第 26 次・第 47 次調査出土遺物	79
第 53 図	安倍館遺跡縄張図	82
第 54 図	安倍館遺跡地籍図	83
第 55 図	安倍館・里館遺跡出土の陶磁器(1)	85
第 56 図	安倍館・里館遺跡出土の陶磁器(2)	86
第 57 図	寛文八年奥州岩手郡之内栗谷川古城図	87
第 58 図	岩手郡・志和郡の城館跡分布図	88

図 版 目 次

第 1 図版	安倍館遺跡全景
第 2 図版	外館第 66 次調査全景・R D 030 土坑・S D 200 堀跡
第 3 図版	本丸第 45 次調査全景・S I 508 竪穴建物跡、第 46 次調査北半部全景
第 4 図版	本丸第 49 次調査全景・S I 511 竪立建物跡、第 73 次調査全景
第 5 図版	中館第 29 次調査南半部全景、第 30 次調査 S I 602 竪穴建物跡
第 6 図版	中館第 52 次調査全景、S I 604 竪穴建物跡、第 71 次調査全景
第 7 図版	中館第 44 次調査全景、S B 702 掘立柱建物跡、第 70 次調査全景
第 8 図版	郭外第 26 次調査北東部全景・S B 101・102 掘立柱建物跡・S K 112 土坑
第 9 図版	外館第 66 次調査遺物包含層出土遺物
第 10 図版	外館 R D 030 土坑出土遺物・本丸出土遺物

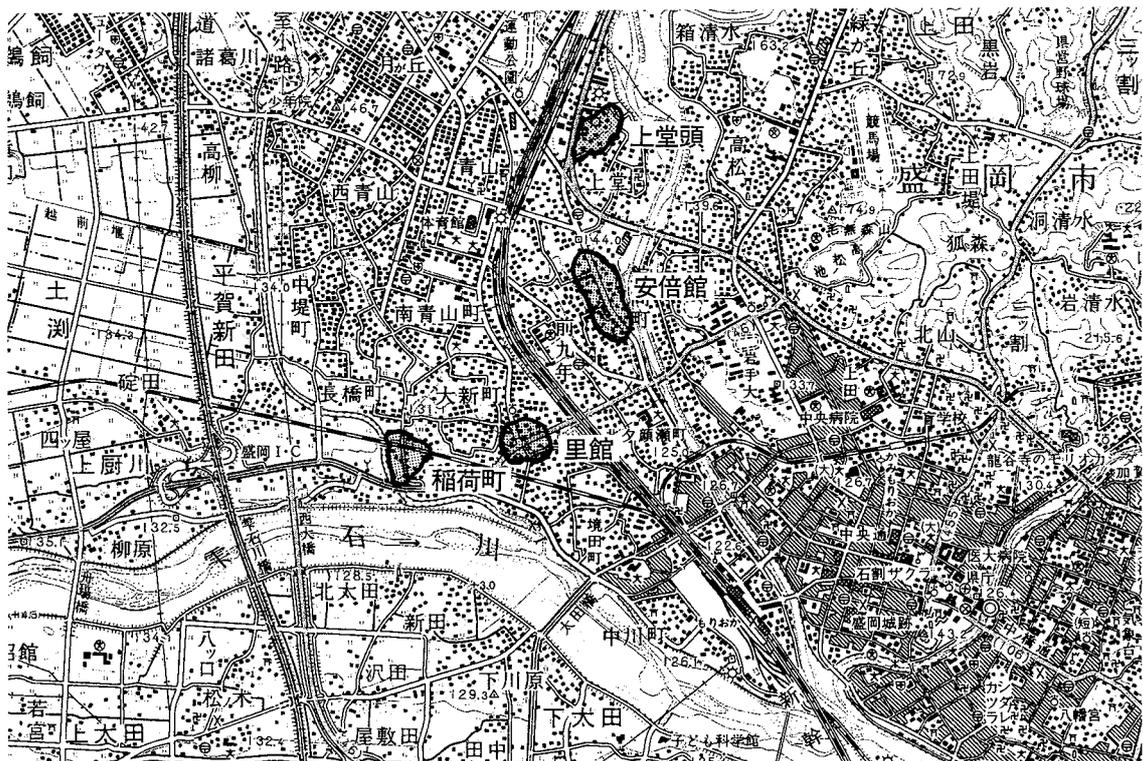
I 遺跡の環境

1. 遺跡の位置と周辺遺跡

盛岡市の厨川地区は、北上川と雫石川合流点北西にひろがる滝沢台地南部から、その南西部雫石川北岸の沖積面にかかる地域である。このうち、現在の厨川一～五丁目から上堂一～四丁目・安倍館町・前九年・大館町・大新町他に至る滝沢台地は、北西約 17 km の岩手山（標高 2038 m）の火砕流堆積物から成っている。北西から南東にむけてゆるやかに傾斜し、日当たりのよい安定した台地となっている。この台地の南半部分の大館町・大新町・前九年・安倍館町付近は、小さな沢によって解析され、南に傾斜するいくつかの舌状台地に分かれている。各台地は縄文時代～古代の集落遺跡が存在している。

安倍館遺跡は滝沢台地東辺部、雫石川合流点より北上川を 3 km ほど遡上した盛岡市安部館町に存在する。標高は 138 m～146 m、北上川との比高は約 20 m、対岸は館向町・西下台の低位段丘を挟んで上田段丘に対峙し、北上川と小さな沢に挟まれた、南北に長い舌状台地である。

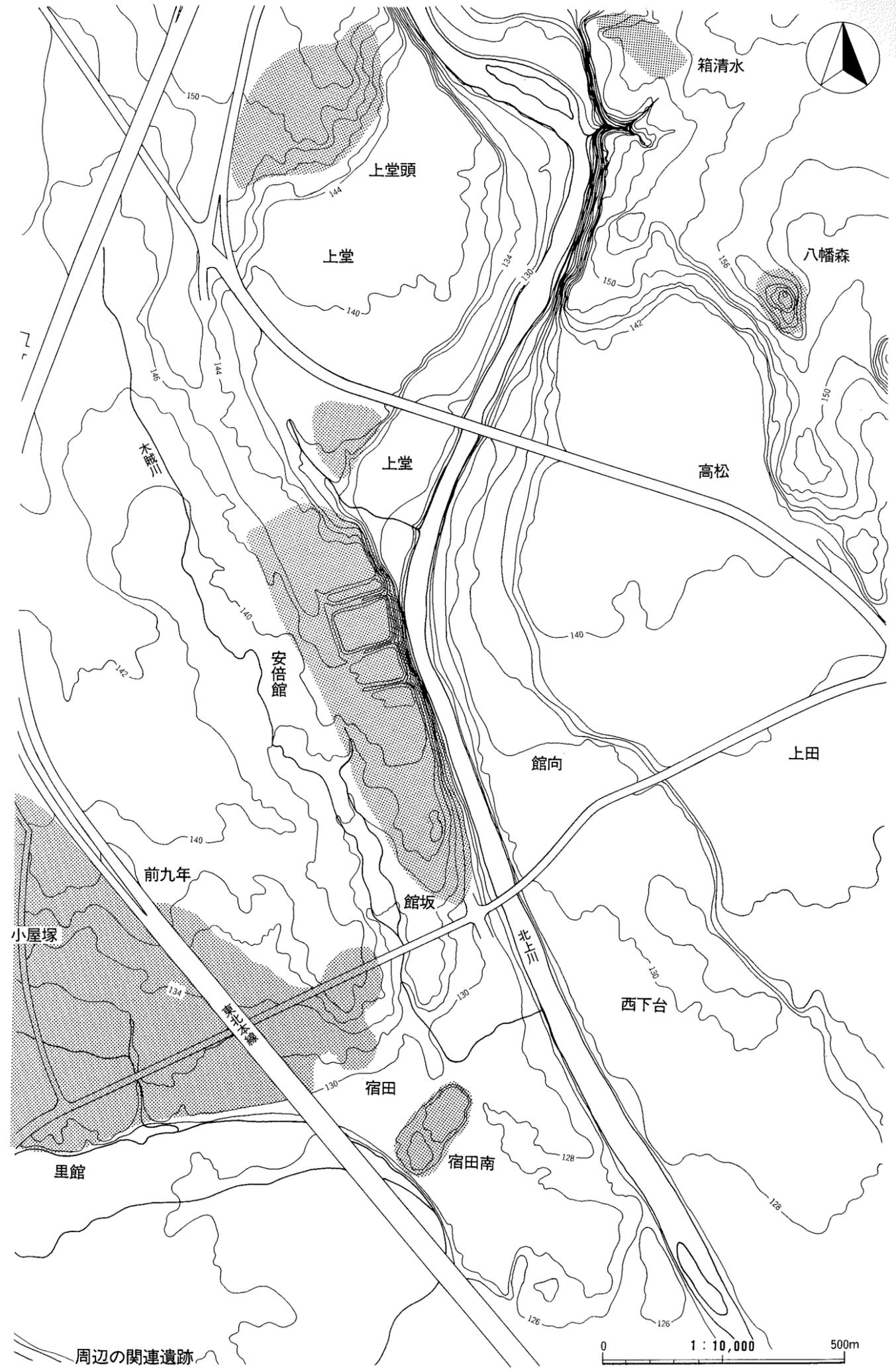
この南西側前九年二丁目・三丁目の台地先端部には、宿田遺跡があり、縄文時代早期の条痕文土器を出土した土坑や、7～8 世紀ごろの周溝群が調査されている。この台地西斜面は東北新幹線用地で厨川棚疑定地として調査されており、縄文時代後期の竪穴住居跡と平安時代以後の溝などが調査されている。また、台地西部の前九年遺跡では、縄文時代早期～前期初頭の遺物 前九年



第1図 遺跡位置図 (1:50,000)



第2図 安倍館遺跡と



周辺の関連遺跡

大新町

包含層が確認された。これよりさらに西にある小屋塚・大新町・大館町・大館堤の各遺跡では、縄文時代草創期から早期、中期を中心とする集落跡が存在する。大新町遺跡では草創期爪形文、早期の無文・押型文・沈線文・条痕文・貝殻文の土器が多量に出土し、早期の竪穴住居跡も5棟確認され、当該期の研究には欠かすことのできない遺跡として注目されている。また大館町遺跡は大木7a～8b式期を中心とする密度の濃い大規模な集落跡で、同じころの竪穴住居跡は周辺の小屋塚・大新町・大館堤の各遺跡でも検出されている。大館町遺跡は厨川地域での拠点集落であり、他の遺跡の小集落は大館町遺跡と関係のある派生集落であろう。またこれらの遺跡からは古代の集落も確認されており、8世紀～10世紀の竪穴住居のほか、大新町遺跡では、柵や掘立柱建物跡・竪穴からなる10世紀後半ごろの集落も確認されている。建物跡は安倍館の北、上堂頭遺跡でも検出されている。

大館町・大新町・小屋塚遺跡の南には、雫石川で運ばれた土砂で形成された低い段丘が、滝沢台地南辺より1～2m低く、平坦に形成される。現在の天昌寺町・北天昌寺町・稲荷町・大館町の南部である。この段丘は滝沢台地の南側台地下から続く厚い腐食土層の上に、河川堆積物のシルト層が堆積している。滝沢台地に接する辺りは後背湿地となっている部分が多いが、段丘縁辺部はシルト層が厚く、比較的乾燥した土地になっている。この段丘の西側は、滝沢台地から流れ出て雫石川に注ぐ諸葛川に限られている。

稲荷町

諸葛川に接して東側、段丘の南西コーナー部分には、稲荷町遺跡が存在する。この遺跡は台地の基部を幅10m内外の河道を利用した堀が区画し、南北300m東西280mの独立した曲輪を形成する。堀には土塁が添い、内部には建物群や竪穴が検出されている。微量ではあるが、中国北宋の白磁碗や手づくねのカワラケなどが出土し、12世紀後半ごろの居館跡の可能性が高い。旧字名では、下厨川字淡島・中道と大館の一部にまたがっており、他に該当する居館跡が確認されていないことから、字名の「大館」は稲荷町遺跡の居館を指している可能性がある。また、ここからは17世紀～19世紀の曲屋を含む屋敷跡も検出されている。

里館

稲荷町遺跡の東方、天昌寺町から北天昌寺町にかけては段丘縁辺を占地する形で里館遺跡が存在する。この辺りは南が比高3m～4mの段丘崖で、東は宿田遺跡に接し、西は稲荷町遺跡に続く段丘面である。安倍館遺跡とともに、厨川柵の推定地として知られた遺跡である。遺跡内の東部に天昌寺が存在するが、このあたりから西方約300m・南北約150mの範囲が城館としての遺構が認められる範囲である。里館と呼ばれていたのは天昌寺の西側付近であり、遺跡の西部付近は勾当館と呼ばれていたらしく、南側段丘下にはかつて勾当下の字名が存在した。これまでの発掘調査で、遺跡の西部では12世紀後半～13世紀の屋敷跡や大溝、遺跡の東部では15世紀～16世紀を中心とする掘立柱建物群・竪穴群・柵・堀などが調査されている。全体としては4郭以上に縄張りされており、瀬戸・美濃窖窯期の遺物があり、15世紀前半段階には城館として機能している。16世紀末葉段階まで存続しており、厨川工藤氏関係の城館であろう。

宿田南

里館・宿田遺跡の南東には、雫石川の旧河道を挟んで宿田南遺跡がある。周囲との比高4mほどの独立した台地であり、柱穴や小規模な溝などが台地上から検出されているが、遺物がなく年代が明らかでない。この南方J R山田線の南にも西側に河道のような低地が入り、半ば独立した台地が存在する。この付近は北上川・雫石川の旧河道が錯綜する地帯であり、河道の間に台地が取り残された地形である。

2. 古代・中世の厨川

厨川地区は古代においても、集落は各台地や微高地に盛んに営まれていた。雫石川対岸の太田にも8世紀には集落が盛んに営まれ、太田蝦夷森古墳群・高館古墳群など、河原石で構築された礫郭を有する集落の首長層の墳墓の築造も行われていた。太田には延暦22年(803)に志波城がおかれ、律令国家における陸奥国北辺地域の支配拠点となっていた。弘仁3～4年(812～813)に徳丹城に移転した後も、小幅遺跡や林崎遺跡などで9世紀後半～10世紀の計画的配置の大形掘立柱建物が存在している点から志波城周辺部に行政機能が存在したことは明らかである。厨川地区において、林崎・小幅遺跡と同時期同質の遺構は発見されていないが、これよりやや遅れて、10世紀の後半ごろに編年される土器群の出土した大新町遺跡は、掘立柱建物・竪穴建物・柵で構成される屋敷的な遺構である。また、約5km西方の大釜館遺跡では、11世紀代の土器を伴う大規模な掘立柱建物が検出されている。これらは10世紀後半から11世紀にかけての、首長層のなかからの有力者の台頭を示す遺構であろう。

11世紀の中頃厨川には、六箇郡の司、安倍氏の厨川柵・姫戸柵がおかれ、奥六郡支配の拠点のひとつであった。康平5年(1062)、源頼義・清原武則らによって、安倍貞任をはじめとする安倍氏はこの二柵において滅ぶ。

安倍氏

近世以降、厨川柵・姫戸柵は、天昌寺町の里館遺跡と安倍館遺跡があてられていた。これまでのところ、どちらの遺跡からも、11世紀の城柵の存在を示す考古学的根拠は認められていない(『安倍館・里館遺跡発掘調査概報』1986・1987)。発掘調査からは、むしろ中世の厨川館・厨川城としての評価がなされている。しかし、両柵の遺跡が他に特定されたわけではなく、その実態については、今後の地道な調査研究の成果を期待する外はない。

前九年の役のもの、この地方の支配は事実上清原氏に委ねられたと推定されているが、奥州後三年記等にも岩手郡や厨川関係の記載はなく、その実態については全く不明である。この後、文献史料に再びこの地区が登場するのは、『吾妻鏡』文治5年(1189)の源頼朝の奥州合戦の記事である。

文治5年7月、鎌倉を発した源頼朝は、厚樫山の合戦で藤原泰衡軍を破り、平泉に入り、9月2日平泉を発し、9月4日志和陣ヶ岡に到着、9月11日陣ヶ岡より岩手郡厨川に向かい、同日夕刻に厨川館に到着、18日までこの地に滞在し、19日再び平泉に向かっている。この間、頼朝は厨川柵付近に宿館を定め、源頼義・義家の戦績厨川柵を視察している。この間9月12日には、伊豆の御家人工藤小次郎行光が、軍功により岩手郡を拝領した。行光はその礼として盃酒・碗飯を献じている(『吾妻鏡』)。工藤氏はその後建久年間長光(行光の男子)の代に下向し、岩手郡地頭として厨川館にあり、郡の統治にあたったとされている(『奥南落穂集』)。

奥州合戦

工藤行光

鎌倉幕府滅亡後、甲斐南部氏波木井師行は、陸奥守北畠親房とともに多賀国府に入り、北奥に派遣された。その後陸奥守北畠頭家の国代として国府に君臨して以来、北奥の実権は次第に根城(八戸)南部氏が掌握するようになる。

南部師行

興国元年(1340)もしくは2年(1341)から正平5(1350)～6年にかけて、岩手郡厨川・上田、斯波郡などで、南朝勢・北朝勢の間で戦闘があった。工藤氏は元弘の乱より北畠頭家の従兵に加わったとつたえられているが、このころから岩手郡における工藤氏の勢力は次第に衰微

していった。岩手郡はその後応永年間のころから南部氏配下の福士氏が不来方に入り、近郷を領知したほか、西根には平館氏、一方井には一方井氏、川東の地域は川村氏、雫石には戸沢氏が入っていた。南の斯波郡には奥州探題大崎氏系の斯波氏があり、岩手・志和ともに国人・土豪の割拠するところとなった。

厨川氏 こうしたなかで岩手郡地頭の工藤氏の領地はしだいに厨川村のみに縮小し、厨川氏を称したと伝えられている（『奥南落穂集』）。

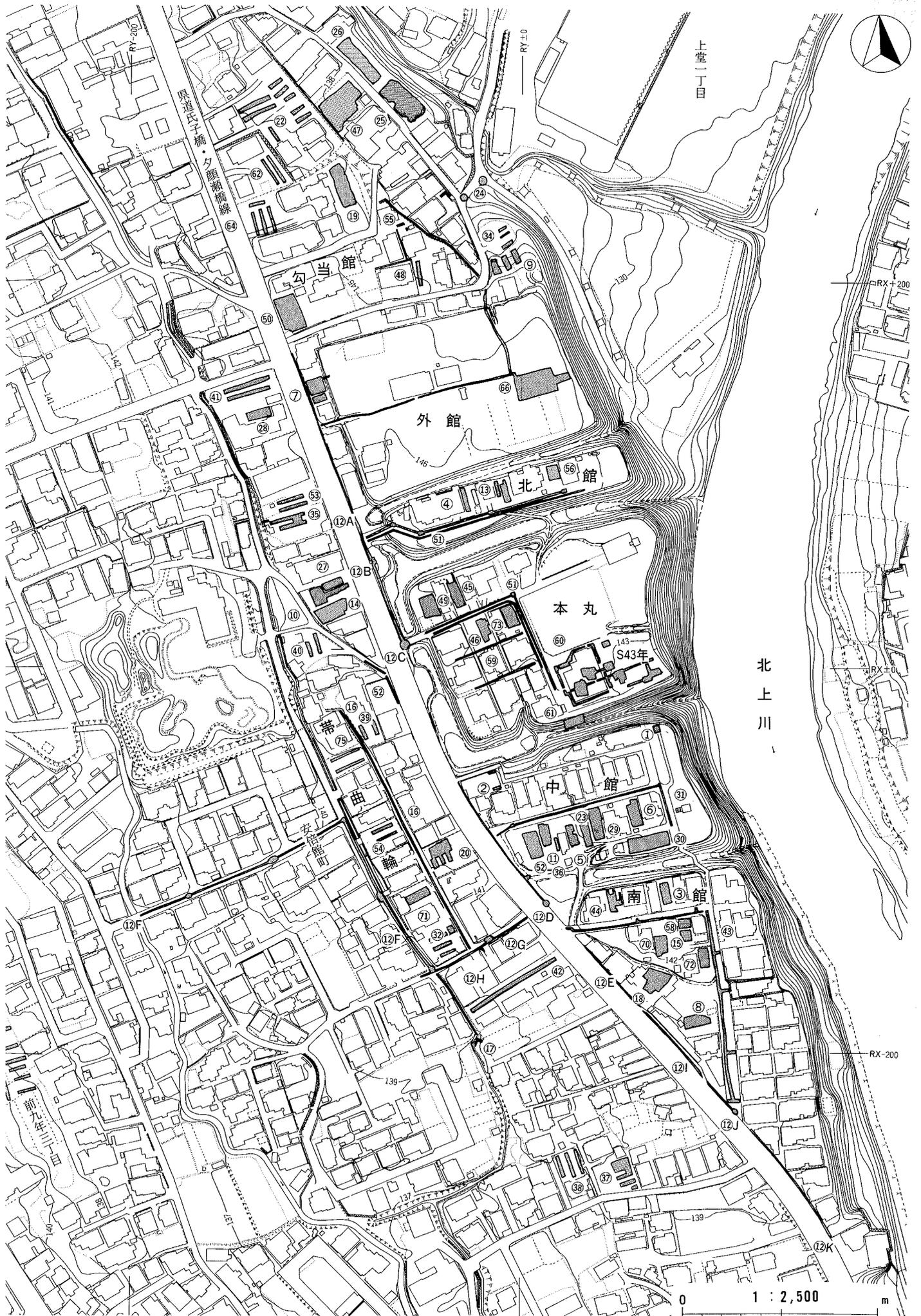
天文九年(1540)、北奥の南部氏勢力の要となっていた三戸晴政は、田子（石川）高信らと共に岩手郡に進攻、雫石より戸沢氏を追った。このとき工藤（厨川）氏・川村氏・福士氏等、岩手郡の国人・土豪はことごとく晴政に帰属したとされているが、ほどなく斯波氏によって岩手郡の雫石川流域はおさえられたようである。斯波氏は本拠の高水寺城のほかに、岩手郡の雫石・猪去に支族を置き、高水寺と併せて志和の三御所と称した。この斯波氏勢力の岩手郡進出の背景には、遠野保の阿曾沼氏と斯波氏の同盟があったとする説がある（註）。後年、阿曾沼一族の綾織越前広信が雫石氏に迎えられている。

南部信直 天正10年(1582)三戸晴政・晴継の跡に、田子信直（高信の男子）が三戸城に入城、三戸南部の当主となった。同じく14年、信直は岩手郡に進攻して雫石城を攻略、16年には斯波氏の本拠高水寺城を陥し、志和郡一円を手中にしている。この間、岩手郡の国人・土豪は、南部・斯波の両勢力のはざまに揺れ動いていたと思われるが、信直の岩手郡・志和郡進攻の結果、大勢は南部信直に従うことになった。ただ、岩手郡・斯波郡の国人や土豪の中には、中野氏や福士氏など、信直と対立・拮抗していた九戸政実の影響下にある者も少なくなかったし、工藤氏のように斯波氏や志和郡の国人築田氏との姻戚関係のあるものもいた。このため三戸南部の手中に入ったとはいえ、岩手・志和郡内から旧斯波氏や九戸氏の影響力を完全に払拭するには、相当の時間を要したと考えられる。

祐清私記には、天正末年に一旦破却された厨川城が、慶長期の盛岡城築城にあたり、「警護之城」として利用されていたことが記されている。同私記によれば、南部利直が工藤氏に対し、城館の破却と退去を命じたが、工藤氏が拒んだため、姻族の大釜氏に討たせたという内容の記述がある。同城は天正20年の破却書上には破却城の中に上げられており、城館としての体裁を維持したまま存続していたかどうかは疑問だが、あるいは規模を相当に縮小して活用されていたものであろうか。また、この城はおそらく安倍館遺跡の厨川城のことと考えられるが、里館遺跡の城館の可能性もない訳ではない。この事件が事実か否か確認する術もないが、近世大名として盛岡に居城を定めた直後の南部信直・利直と、旧体制を引きずりながら盛岡南部氏に従属していく岩手・志和郡の豪族との関係を物語る記述としては、非常に興味深いものがある。

(註)

吉井功兒 1987 「中世南部氏の世界」『地方史研究 205』 第37巻1号 地方史研究協議会



II 調査の経過

1. 遺跡の現状

安倍館遺跡は北上川に臨む比高 20 m の台地にあり、川に面して勾当館・外館・北館・本丸・中館・南館・帯曲輪の 7 郭からなる大規模な城館である。現在その大半は市街地となり、盛岡市安倍館町となっている。また、遺跡の中央部西よりの帯曲輪には、県道氏子橋夕顔瀬線が通じ、中館や本丸の堀も一部埋め立てられている。城館の遺構のうち、外館・北館・本丸・中館・南館の 5 つの曲輪は辛うじて輪郭をたどれるが、このうち周囲の堀が良好に残存するのは本丸と北館のみであり、中館の西側の堀や南館の堀、それに外館の堀はほとんど埋め立てられ、発掘調査を実施しないかぎり堀の規模をうかがうことができない。曲輪内部の平坦地は、外館は果樹園や畑がひろくあいているが、他の曲輪はほとんどが個人の住宅となっている。北館・本丸・中館・南館と、南館南の帯曲輪は市の土地となっているが、住宅・店舗など、建物は個人所有である。北側の勾当館は周囲がすっかり平坦になり、郭外との境が不明瞭となっているが、この西側から、南に続く帯曲輪の西側は、現状で 1 m～3 m の段差になって輪郭をたどることができる。帯曲輪の南側についても、埋め立てによって堀の痕跡は不明瞭である。

2. 調査の経過

安倍館遺跡における発掘調査は、昭和 43 年 12 月本丸南東部の市立保育園建設に先立ち、岩手大学による発掘調査が実施されたのが最初である。このときには、竪穴式建物跡が 7 棟と柱穴群が調査されたが、古代末期の城柵にかかる遺構と報告され、安倍氏の厨川・姫戸柵に係る遺構と考えられた。当時まだ中世城館跡の調査例が乏しく、比較検討材料もなかったことからやむを得ないことであるが、このときの検出遺構は後述するように、中世末期の厨川城の遺構である。その後昭和 56 年から、個人住宅の改築・増築に伴い、盛岡市教育委員会による発掘調査が継続された。昭和 60 年度からは公共下水道建設に伴う調査昭和 56 年度～62 年度の調査結果については、すでに報告済みである。

昭和 63 年度からは店舗や事務所建設、アパート建設、私設上下水道の建設も入り、平成 10 年度にいたるまで毎年調査を実施している。調査は遺跡内の各曲輪にわたり、城館に伴う遺構・遺物はもとより、縄文時代早期の遺物包含層、中期の土坑、後北式の土坑、近世の土坑や溝など、時代も種類も多岐にわたっている。

平成 4 年度以後、本丸の中の住宅の建て替えがあり、本丸内部の状況がしだいに明かとなってきた。他の曲輪と比較して遺構・遺物ともに多く、その名のとおり城郭の主郭であることが立証できたが、遺物の年代から本丸の存続期間がほぼ 16 世紀のなかにおさまることが明らかとなり、工藤氏の厨川城であることが確実となった。なお、伝承の厨川・姫戸柵を例証するような調査成果は得られず、今日では安倍氏の城柵の可能性はきわめて薄くなってきている。

次数	所在地	調査原因	面積	期間	検出遺構	報文
43	安倍館町 (本丸南東)	保育園建設		43.12.11~12.18	柱穴、竪穴建物7棟他	文献1
1	安倍館町 (中館東北部)	神社改築	8m ²	55.3.16~3.24	柱穴13口、近現代貨幣5点	文献3
2	安倍館町13-7 (中館北西部)	住宅増築	9	55.3.19~55.3.24	遺構遺物なし	文献3
3	安倍館町7-28 (南館北東部)	住宅改築	51	56.8.6~8.11	土杭1基、柱穴1口、建物跡1棟	文献3
4	安倍館町129 (北館西部)	住宅改築	49	58.5.20~5.21	遺構・遺物なし	文献3
5	安倍館町148 (中館南側)	住宅改築	49	58.5.23~5.26	掘1条、土杭1基	文献3
6	安倍館町13-4 (中館南側)	住宅改築	70	58.9.5~9.13	縄文時代早期包含層、中近世掘 立柱列1列、柱穴群、土杭11基	文献3
7	安倍館町123-4 (外館西側)	住宅改築	102	59.4.9~4.26	掘1条	文献3
8	安倍館町179-1 (帯曲輪南部)	住宅改築	84	60.3.4~3.14	柱列2条、溝4条、土杭3基	文献3
9	安倍館町118-2 (外館北側)	住宅建築	80	60.4.8~4.11	縄文時代土杭1基	文献3
10	安倍館町3-19 (帯曲輪中央)	住宅改築	105	60.4.18~4.30	縄文時代土杭1基、柱穴4口	文献3
11	安倍館町13-4 (中館南側)	住宅改築	54	60.9.24~9.30	竪穴式住居跡1棟、建物跡1棟、 柱列2条、土杭6基、柱穴62口	文献3
12	安倍館町24-5 (全域)	下水敷設 (本管)	107	60.11.7~60.11.15	柱列1条、掘4条、溝3条、柱穴6 口	文献3
13	安倍館町114 (北館西部)	住宅改築	53	60.11.18~60.11.26	土杭1基、柱穴4口	文献3
14	安倍館町3-18 (帯曲輪中央)	住宅改築	117	61.5.19~61.6.6	柱穴48口	文献3
15	安倍館町114 (南館東側)	住宅改築	31	61.6.6~61.6.11	遺構・遺物なし	文献3
16	安倍館町12 (帯曲輪中央)	下水敷設 (私設)	140	61.6.16~61.6.21	溝3条、土杭2基	文献3
17	安倍館町(青線水路) (帯曲輪西端)	河川改修	350	61.11.27~61.12.4	掘1条、溝1条	文献3
18	安倍館町7-8	住宅改築	112	61.11.27~61.12.6	掘1条、柱穴15口	文献3
19	上堂一丁目92-1 (勾当館)	店舗新築	163	62.4.22~62.4.30	土杭十基、盛土層	文献4
20	安倍館町1-22 (帯曲輪)	住宅新築	150	62.6.22~62.6.25	土杭1基、溝1条	文献4
21	上堂一丁目6-5 (勾当館)	物置改築	42	62.7.8	遺構なし	文献4
22	上堂一丁目 (勾当館)	住宅新築	422	62.9.10~62.9.18	遺構なし	文献4
23	安倍館町114 (中館)	住宅新築	57	62.9.21~62.10.2	柱列4条	文献4
24	安倍館町17 上堂一丁 目6-7(勾当館)	下水道敷設	185	62.10.28~62.11.30	中世掘跡1条	文献4
25	上堂一丁目90-7 (勾当館)	住宅新築	261	62.11.12~62.11.20	建物跡3棟、柱列1条、土杭3基	文献4
26	上堂1-90-1 (勾当館)	住宅新築	215ç	88.4.20~4.27	建物跡2棟、土杭20基、竪穴2棟、 溝1条	本書
27	安倍館町3-19 (帯曲輪)	住宅新築	50	88.5.26~5.27	遺構なし	本書

次数	所在地	調査原因	面積	期間	検出遺構	報文
28	安倍館町13-8他 (帯曲輪)	住宅増築	67	88.6.20~6.24	縄文時代土杭1基	本書
29	安倍館町114 (中館)	住宅改築	104	88.8.1~8.11	建物跡4棟、土杭3基、溝1条	本書
30	安倍館町13-4 (中館)	公民館改築	120	88.8.24~9.1	竪穴1基、土杭3基	本書
31	安倍館町13 (中館)	下水道敷設	128	88.10.4~10.11	溝1条、縄文時代土杭1基、柱穴	本書
32	安倍館町1-9 (帯曲輪)	住宅改築	54	88.10.26~10.27	遺構なし	本書
33	上堂1-85-7 (勾当館北)	私設下水道	108	88.10.26~12.1	遺構なし	本書
34	安倍館町118-3	住宅改築	25	89.4.26	遺構なし	本書
35	安倍館町18-31	住宅新築	78	89.8.18~8.23	縄文時代土杭1基	本書
36	安倍館町114 (中館)	住宅増築	3	89.9.1	遺構なし	本書
37	安倍館町210-6 (帯曲輪)	住宅新築	70	91.4.11~4.12	縄文時代土杭1基	本書
38	安倍館町209-7 (帯曲輪)	共同住宅	78	90.4.11~4.12	遺構なし	本書
39	安倍館町1-26・38 (帯曲輪)	住宅新築	34	90.7.5~7.6	縄文時代土杭1基	本書
40	安倍館町3-2 (帯曲輪)	住宅増築	38	90.7.30	遺構なし	本書
41	安倍館町18-23 (帯曲輪)	マンション建設	120	90.11.7	遺構なし	本書
42	安倍館町206-2 (帯曲輪)	事務所新築	128	91.11.18~11.19	柱穴2口	本書
43	安倍館町114他 (南館・帯曲輪)	下水道工事	200	91.12.16~1.16	溝3条、縄文時代土杭1基	本書
44	安倍館町114 (南館)	住宅増築	51	92.4.17~4.27	建物跡1棟、縄文時代土杭1基	本書
45	安倍館町127 (本丸)	住宅建築	69	92.5.12~5.26	竪穴式住居2棟、建物跡1棟、土杭1基、溝跡1条、土墨跡、縄文時代土杭1基	本書
46	安倍館町127 (本丸)	住宅建築	56	92.7.27~8.7	竪穴式住居1棟、建物跡2棟、溝跡1条、縄文時代土杭2基	本書
47	上堂1-90-4-5 (勾当館北)	借家建築	300	93.4.12~4.22	溝跡2条	本書
48	上堂1-245-1 (勾当館)	建売住宅建設	26	93.4.21	遺構なし	本書
49	安倍館町127 (本丸)	住宅建設	97	93.9.99.21~10.7	土杭2基、竪穴1棟、溝跡1条、土墨跡	本書
50	上堂1-94-2-5 (勾当館)	住宅建築	46	93.10.25	遺構なし	本書
51	安倍館町114、127 (本丸・北館)	公共下水道工事	350	93.11.10~12.1	土杭3基、竪穴3棟、溝跡2条、縄文時代土杭1基、道路状遺構1条	本書
52	安倍館町127 (中館)	住宅新築	86	94.4.25~5.13	竪穴式住居2棟	本書
53	安倍館町3-12 (帯曲輪)	住宅新築	60	94.5.11~5.12	遺構なし	本書
54	安倍館町1-13 (帯曲輪)	住宅建築	48	94.5.16	遺構なし	本書
55	上堂1-6-4 (勾当館)		40	94.5.17	遺構なし	本書

次数	所在地	調査原因	面積	期間	検出遺構	報文
56	安倍館町114 (北館)	住宅増築	36	94.7.7~7.8	遺構なし	本書
57	前九年3-28-2 (帯曲輪外)	共同住宅新築	257	94.4.12	遺構なし	本書
58	安倍館町7-29 (南館)	住宅改築	103.6	95.7.25	遺構なし	本書
59	安倍館町14 (本丸)	下水道工事	87	95.8.29~9.4	竪穴1棟	本書
60	安倍館町14-40 (本丸)	下水道工事	102	95.9.8~9.25	竪穴1棟	本書
61	安倍館町114 (本丸・南館)	土留工事	24	96.1.17	遺構なし	本書
62	上堂1-85-19、88-3 (勾当館北)	住宅新築	55	96.4.10	遺構なし	本書
63	安倍館町地内 (帯曲輪)	上下水道敷設	51	96.8.20~30、 9.17~20、10.1~7	溝跡7条、土杭2基、柱穴	本書
64	上堂1-92-11、93- 2(勾当館)	共同住宅建設	80	96.9.12	遺構なし	本書
65	上堂1-219-1 (勾当館北)	宅地造成	206	96.11.12	遺構なし	本書
66	安倍館町125-5 (外館)	住宅・下水建設	390	97.4.7~5.14	柱列3条、土杭17基、遺構4条、 縄文早期遺物包含層	本書
67	安倍館町125-5 (外館)	上水道敷設	150	97.5.14~5.19	溝跡1条、柱穴	本書
68	安倍館町3-23 (帯曲輪)	住宅建設	37	97.11.25	遺構なし	本書
69	安倍館町157-1 (帯曲輪)	住宅建設	9	97.12.8	遺構なし	本書
70	安倍館町7-29 (南館)	住宅改築	66	98.7.6~7.10	柱穴	本書
71	安倍館町1-28 (帯曲輪)	住宅改築	67	98.7.13~7.21	土杭1基、溝2条	本書
72	安倍館町114 (南館)	住宅改築	53	98.7.21~7.27	柱穴	本書
73	安倍館町14-6 (本丸)	住宅建設	83	98.7.27~8.22	建物跡3基	本書
74	安倍館町2-19 (郭外)	住宅建設	52	98.9.22	遺構なし	本書
75	安倍館町 (帯曲輪)	住宅建設	50	98.11.27	遺構なし	本書

文献1-1969 板橋源・佐々木博康『盛岡市安倍館古代末期城柵遺跡』盛岡市教育委員会

文献2-1985~1998 盛岡市教育委員会『盛岡市埋蔵文化財調査年報-昭和55~58年度・59年度・60~61年度・62年度・平成5~6年度』

文献3-1987 盛岡市教育委員会『安倍館・里館遺跡昭和61年度発掘調査概報』

文献4-1988 盛岡市教育委員会『安倍館・里館遺跡昭和62年度発掘調査概報』

3. 調査体制

盛岡市教育委員会

教育長	佐々木 初朗
教育次長	八重嶋 勲
文化課長	佐藤 勝征 (9年度) 照井 紀典 (10年度)
課長補佐	菊地 誠
文化財係長	亀山 助正
文化財主査	八木 光則
文化財主任	似内 啓邦 室野 秀文
文化財主事	藤岡 光男 菊地 与志和 津嶋 知弘 三浦 陽一 神原 雄一郎 黒須 靖之 藤村 茂克
文化財調査員	平澤 祐子 太田代 由美子

発掘調査及び室内整理作業〈五十音順〉

芦垣直樹 阿部良子 天沼芳子 泉山紀代子 岩泉喜六 岩沼将吉 内山陽子 大宮安子
大森キヌ 岡 聡 小原愛子 門嶋知二 鹿野奈保美 川村昭三 工藤繁子 工藤則子
小松愛子 斎藤静子 斎藤セキ 斎藤 登 佐々木泰子 佐藤和子 白澤和子 駿河チヨ
堰合賢吉 高橋ツヤ 竹花栄子 谷藤貴子 中沢暁子 中島京子 西野作巳 野口律子
野中蕃 平野淑子 福士貴子 藤原政人 藤原美知子 松田昭夫 三上良子 村山伊津子
女鹿麗子 藤田友子 藤田ひろみ 山下摩由美 結城ひろみ 吉田貴美 米山 徹

調査協力

安倍館自治会 (会長 星 君夫)

III 調査成果

1. 外館の調査

外館の調査は、昭和59年度の第7次調査において、西側を画する堀(SD 300)を確認して以来、2度目の調査である。第66・67次調査は郭内東半部の個人住宅の建設と、これに係る上下水道敷設に伴って調査を実施した。検出した遺構は外館の北辺を画する堀(SD 200)と西辺を画する堀(SD 300)・掘立柱列跡・柱穴群のほか、縄文時代早期～中期の遺物包含層、古代の土坑などである。

第66・67次調査 (第5～14図)

(1) 縄文時代～古代の遺構

R D 015 土坑 (第5・7・8図)

調査区南東に位置する。楕円形を呈し、長軸0.92 m、短軸0.78 m、深さ0.16 mをはかり、主軸方向はほぼ東西を示す。表土直下のII a層上面で検出され、埋土は硬くしまり自然堆積で黒褐色土主体である。壁は緩やかに立ち上がり、底はやや起伏がある。出土遺物はない。

R D 016 土坑 (第5・7・8図)

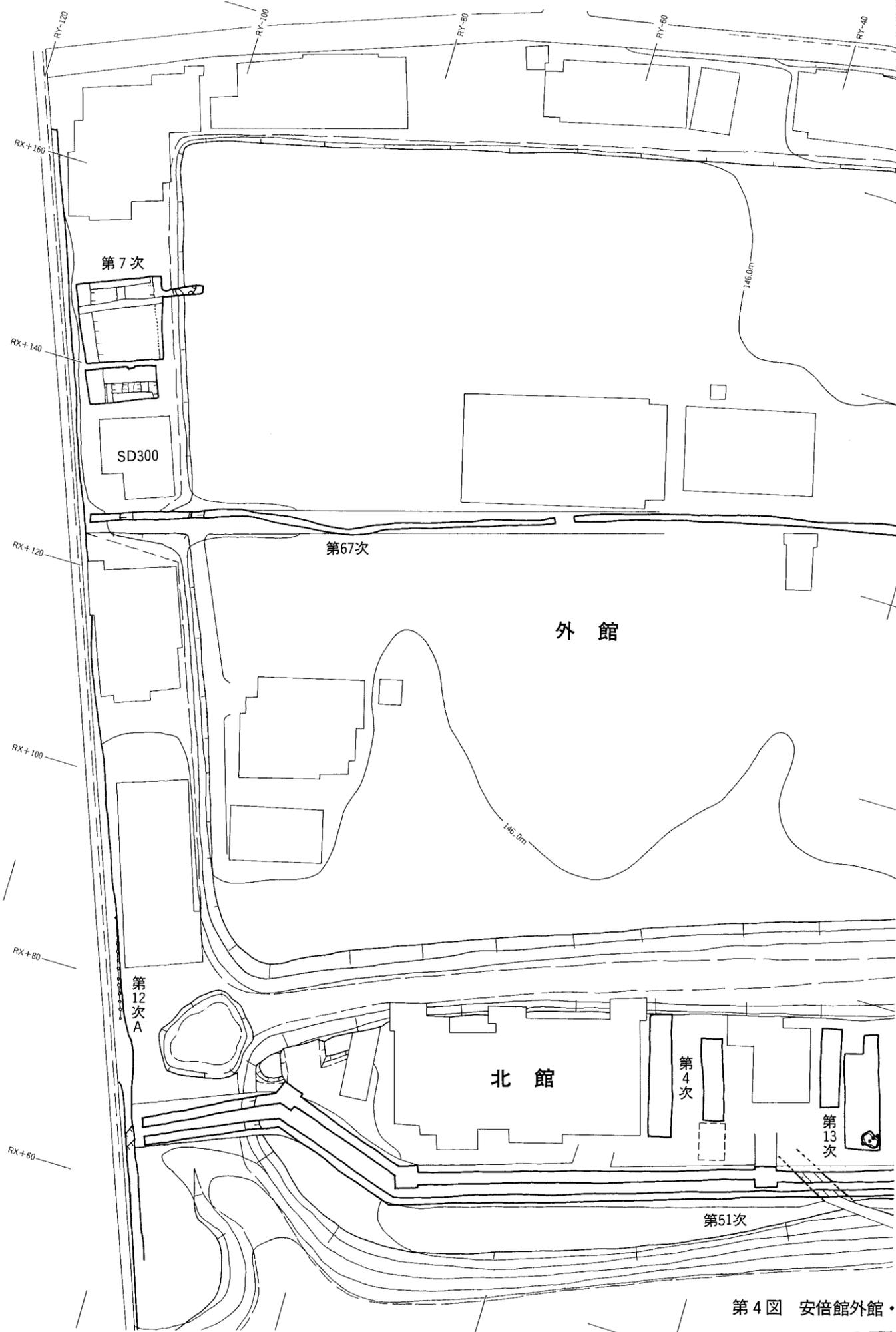
調査区南半部中央に位置し、R D 031 土坑を切る。楕円形を呈し、長軸0.97 m、短軸0.90 m、深さ0.5 mをはかり、主軸方向はN 83°Eを示す。底はほぼ平坦で外傾しながら立ち上がる。表土直下のII a層上面で検出した。埋土はやわらかく、黒褐色土主体であるA層と褐色土を少量含むB層に大別される。縄文早期中葉の貝殻沈線文土器が1点出土している。(第11図19)

R D 017 土坑 (第5・7・8図)

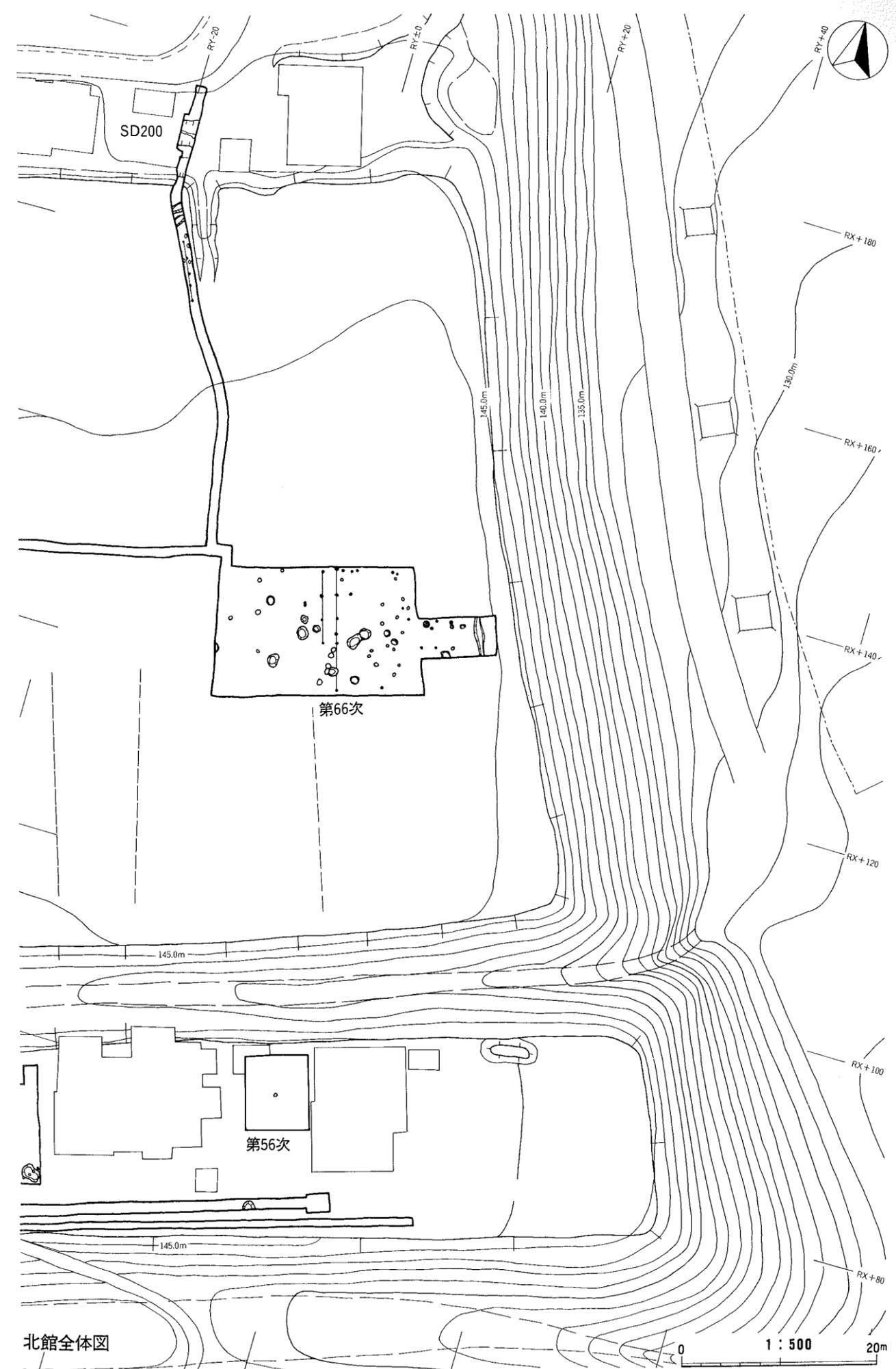
調査区東半部中央に位置し、R D 027 土坑を切る。楕円形を呈し、長軸1.20 m、短軸1.12 m、深さ0.34 mをはかり、主軸方向はN 75°Wを示す。底はやや起伏があり、直壁ぎみに立ち上がる。表土直下のII a層上面で検出した。埋土は塊状褐色土を多量に含む黒褐色土である。

R D 018 土坑 (第5・7・8図)

調査区東半部中央に位置する。長楕円形を呈し長軸1.10 m、短軸0.5 m、最深部0.48 mをはかり、N 12°Eを示す。底は激しい起伏があり、ほぼ直壁に立ち上がる。表土直下のII a層上面で検出した。埋土は硬くしまり、塊状褐色土を多量に含む黒褐色土である。出土遺物はない。

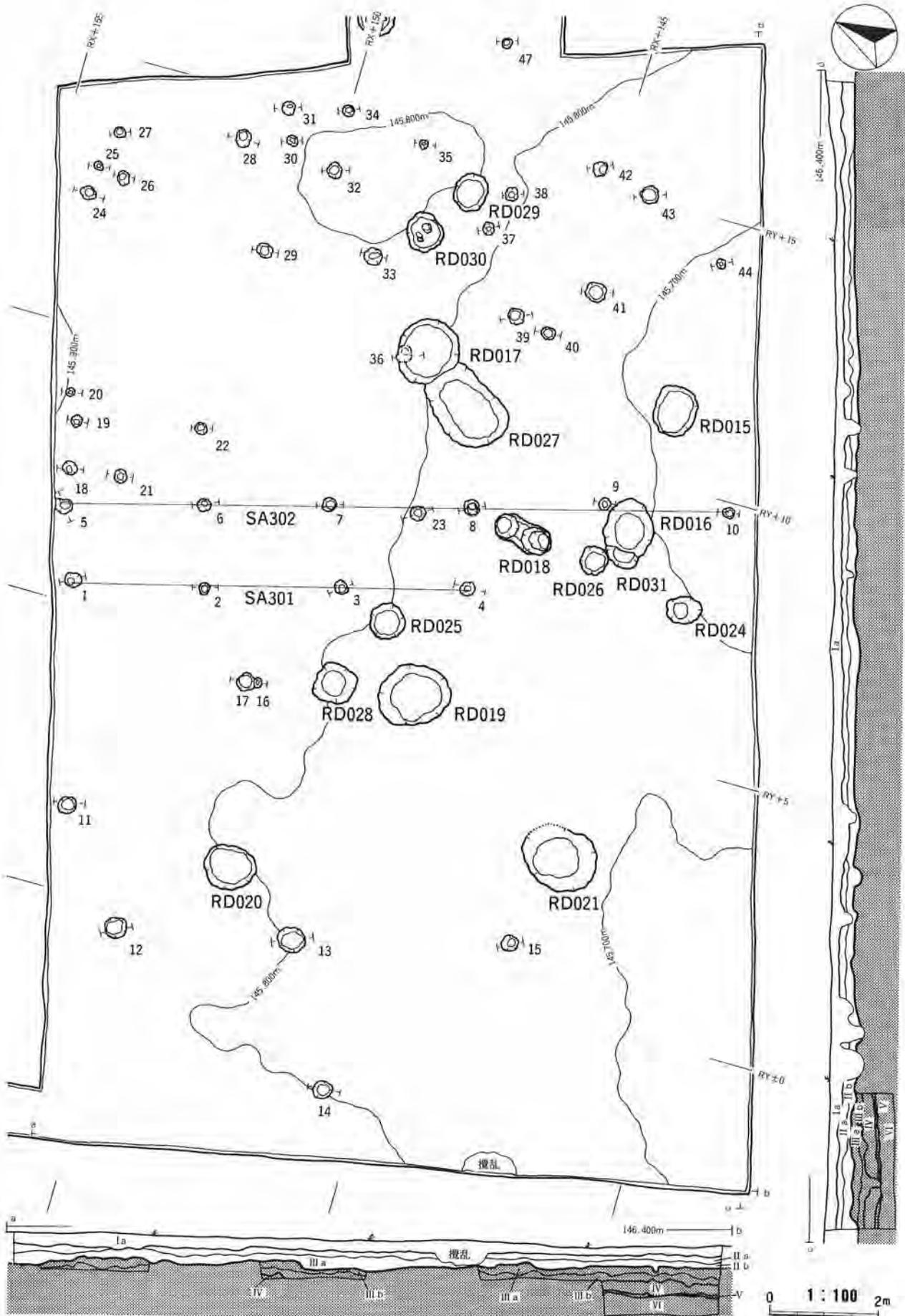


第4図 安倍館外館・



北館全体図

0 1:500 20m



第5図 第66次調査区遺構図(1)

R D 019 土坑 (第5・7・8図)

調査区中央に位置する。長楕円形を呈し長軸1.32 m、短軸1.10 m、深さ0.45 mをはかり、長軸方向はN 33°Wを示す。底はほぼ平坦で緩やかに立ち上がる。表土直下のII a層上面で検出した。埋土は黒褐色土主体でかたくしまる。遺物は出土していない。

R D 020 土坑 (第5・7・8図)

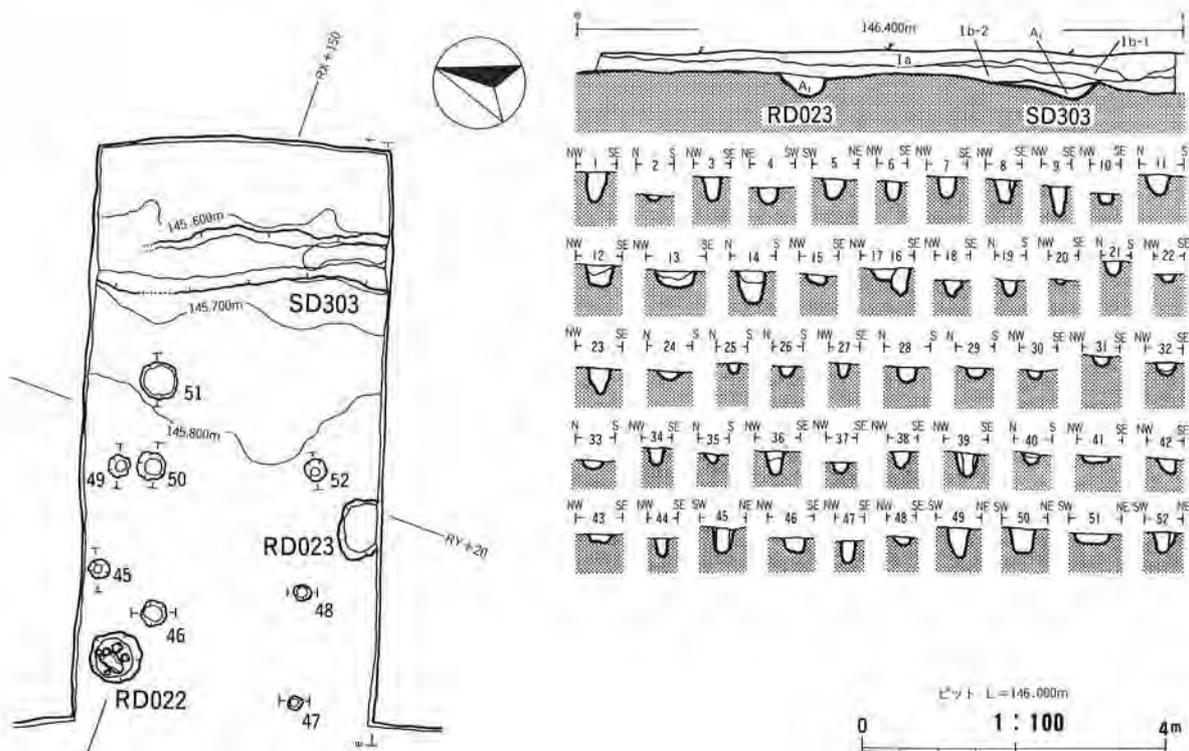
調査区北西に位置する。楕円形を呈し、長軸0.94 m、短軸0.82 m、深さ0.18 mをはかり、長軸方向はN 19°Wを示す。表土直下II a層上面で検出され、埋土は粒状褐色土を少量含む黒褐色土である。底はほぼ平坦で外傾しながら立ち上がる。遺物は出土していない。

R D 021 土坑 (第5・7・8図)

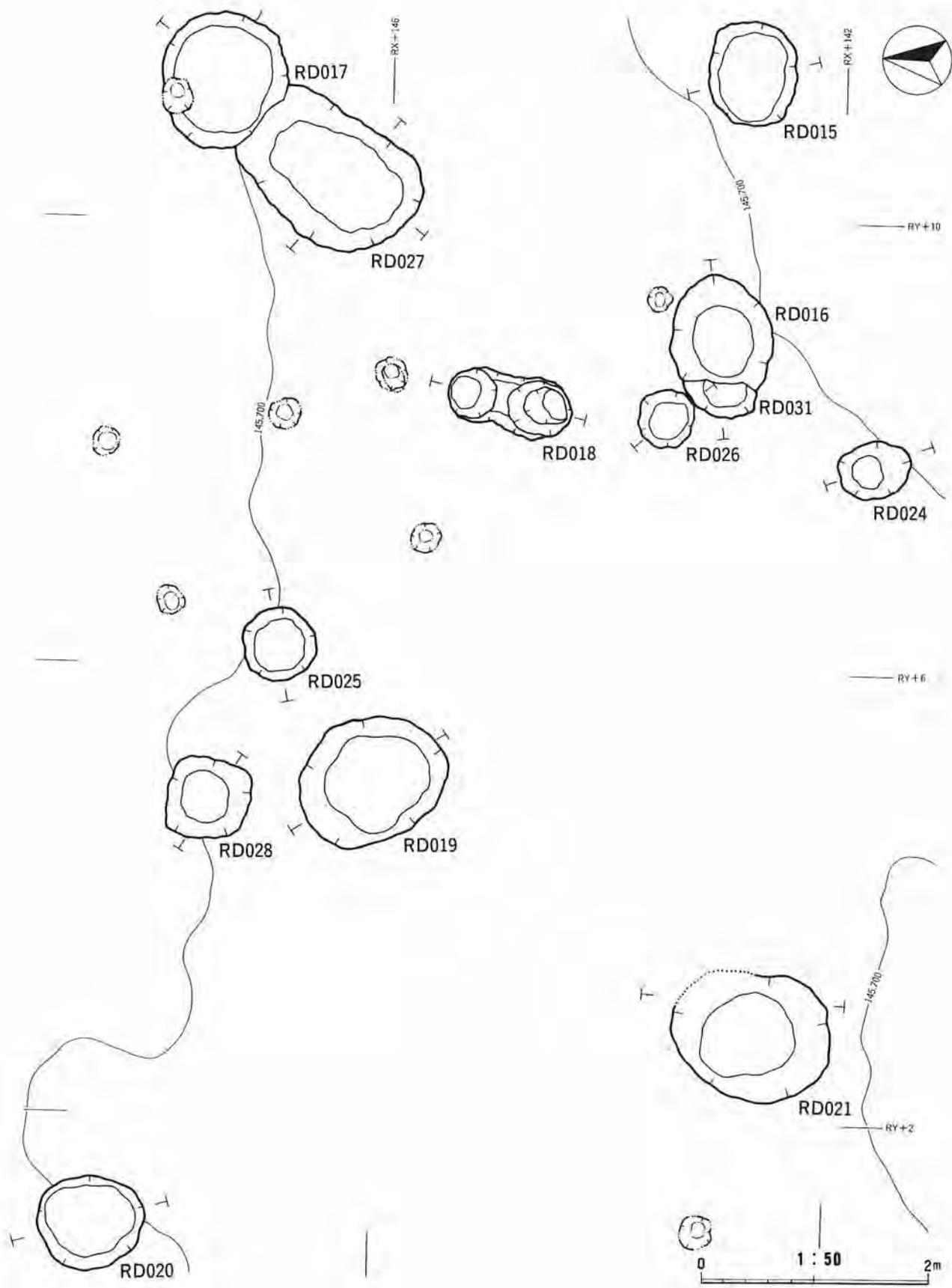
調査区南西に位置する。楕円形を呈し、規模は長軸1.44 m、短軸1.12 m、深さ0.42 mをはかり、N 8°Eを示す。II b層上面で検出し、埋土は塊状褐色土を多量に含む黒褐色土である。底はやや起伏があり、緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。

R D 022 土坑 (第6・8・9図)

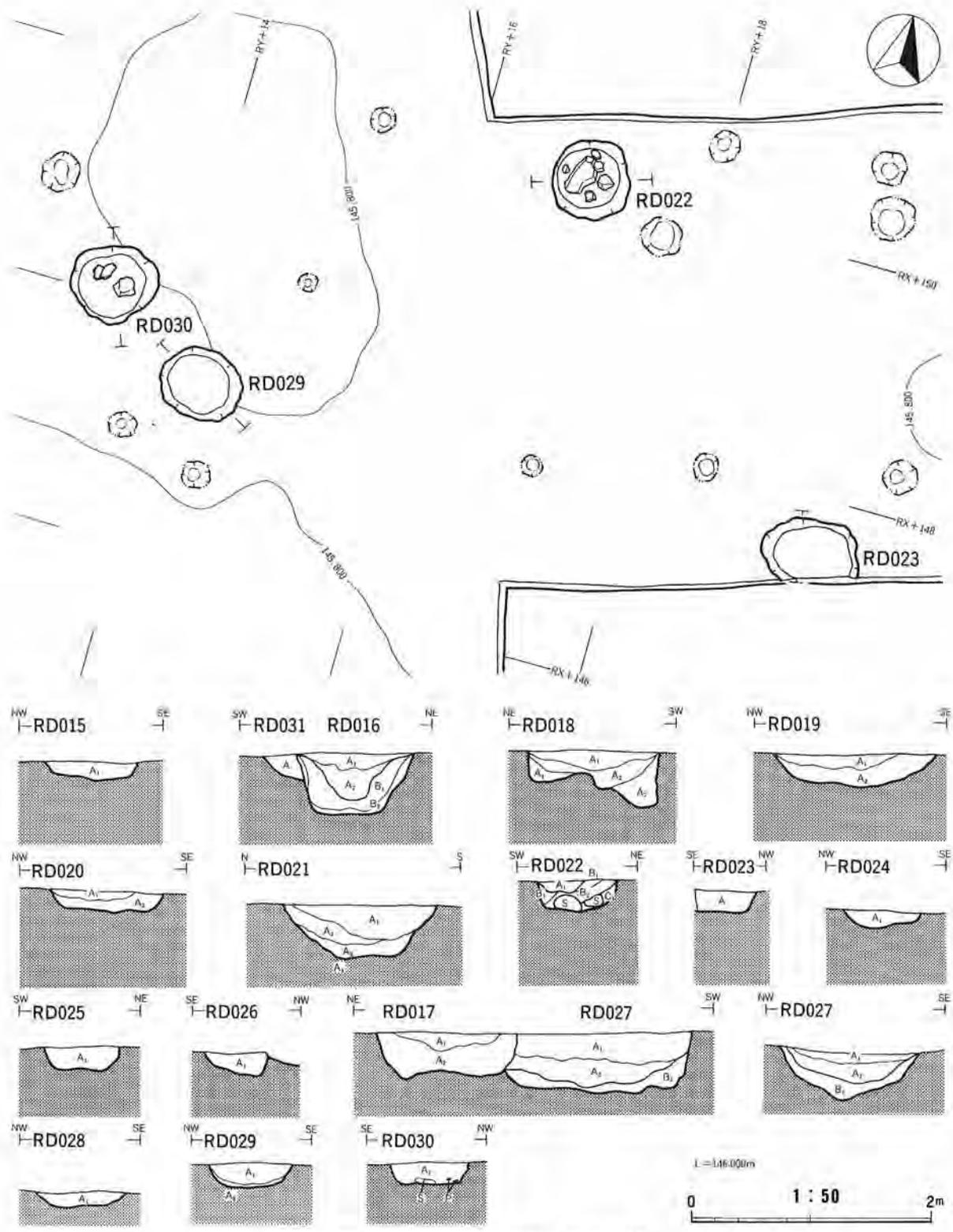
調査区北東に位置する。ほぼ円形を呈し、最大径0.68 m、深さ0.26 mをはかる。底はやや起伏があり、直壁気味に立ち上がる。表土直下II a層上面で検出した。埋土は3層に大別され、A層は自然堆積でB・C層は人為堆積である。A層は黒褐色土主体、B層はやわらかく、塊状



第6図 第66次調査区遺構図(2)



第7图 RD015~021・024~028・031土坑



第 8 图 RD022 · 023 · 029 · 030 土坑

褐色土を多量に含む黒褐色土、C層はやわらかく粒状褐色土を少量含む黒褐色土である。遺物
後北式土器はA・B層から後北C 2-D式土器の体部（第9図1～6）が出土し、微隆起線・帯縄文が施される。胎土は硬質で、断面は黒色、表面は褐色～赤褐色である。底面からは1側面に敲打痕が認められる敲石（第9図7）のほか火熱を受けた大型の自然角礫が3点出土している。

R D 023 土坑（第6・8図）

調査区東部南端に位置する。一部調査区外にのびるため全体規模は不明であるが、楕円形を呈し、長軸0.8m、短軸0.5m、深さ0.4mをはかる。主軸方向はN 72°Eを示す。底はほぼ平坦で外傾しながら立ち上がる。遺物は出土していない。表土直下で検出した。埋土は粒状褐色土を少量含む黒褐色土で自然堆積である。

R D 024 土坑（第5・7・8図）

調査区南半部中央に位置する。楕円形を呈し、規模は長軸0.63m、短軸0.5m、深さ0.16mをはかり、N 21°Wを示す。底はやや起伏があり、緩やかに立ち上がる。II b層上面で検出され、埋土は粒状褐色土を少量含む黒褐色土で自然堆積である。遺物は出土していない。

R D 025 土坑（第5・7・8図）

調査区中央に位置する。円形を呈し、最大径0.64m、深さ0.22mをはかる。底はやや起伏があり、直壁ぎみに立ち上がる。II b層上面で検出され、埋土は黒褐色土主体で微量の褐色土を含み、自然堆積である。土師器の小破片が1点出土している。

R D 026 土坑（第5・7・8図）

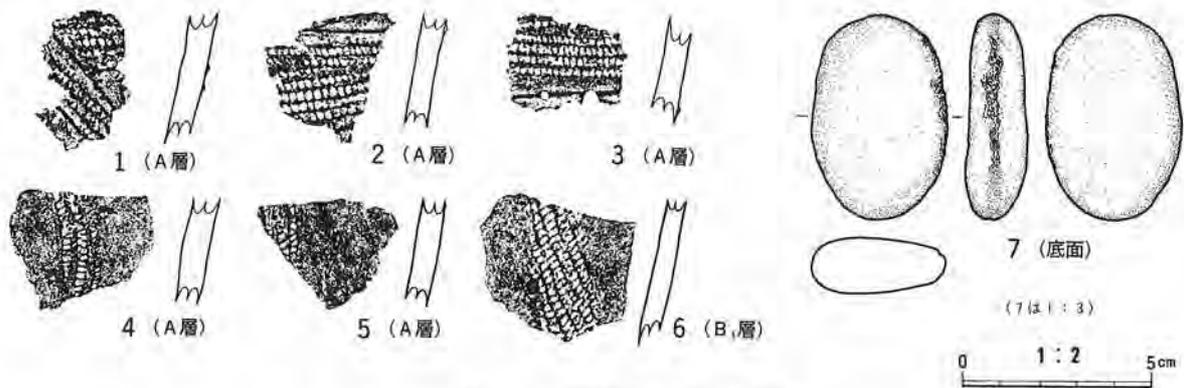
調査区南半部中央に位置する。ほぼ円形を呈し、最大径0.54m、深さ0.18mをはかる。底はやや起伏があり、外傾しながら立ち上がる。II b層上面で検出され、埋土は塊状褐色土を多量に含む黒褐色土で自然堆積である。遺物は出土していない。

R D 027 土坑（第5・7・8図）

調査区東半部中央に位置し、R D 017 土坑に切られる。楕円形を呈し、検出できた規模は長軸1.45m、短軸1.14m、深さ0.5mをはかり、N 33°Eを示す。底はやや起伏があり、直壁ぎみに立ち上がる。表土直下II a層上面で検出され、埋土は自然堆積で2層に大別され、A層は黒褐色土主体。B層は塊状褐色土を多く含む黒色土である。遺物は出土していない。

R D 028 土坑（第5・7・8図）

調査区中央に位置する。隅丸方形を呈し、規模は長軸0.72m、短軸0.7m、深さ0.12mをはかり、主軸方向はN 6°Eを示す。底はやや起伏があり緩やかに立ち上がる。II b層上面で検出され、埋土は黒褐色土主体で硬くしまる。遺物は出土していない。



第9図 RD022土坑出土遺物

R D 029 土坑 (第5・8図)

調査区東半部中央に位置する。やや楕円形を呈し、規模は長軸0.68 m、短軸0.60 m、深さ0.21 mをはかり、主軸方向はN 77°Wを示す。底はほぼ平坦で、緩やかに立ち上がる。表土直下II a層上面で検出され、埋土は粉状褐色土を含む黒褐色土で自然堆積で柔らかい。土師器の破片8点、そのうち1点は土師器の小形甕の体部下半で内面は縦方向のハケメ、外面はヘラミガキが施される。火熱を受けた自然角礫が8点出土している。

土師器

R D 030 土坑 (第6・8・10図)

調査区東半部中央に位置する。円形を呈し、規模は径0.7 mで深さ0.19 mをはかり、主軸方向はN 40°Eを示す。底はほぼ平坦で直壁ぎみに立ち上がる。表土直下II a層上面で検出され、埋土は黒色土主体で自然堆積である。出土遺物は、A層からは後北C 2-D式土器の破片9点、底面から土師器の甕の破片が2点、赤穴式土器の小破片が1点出土している。第10図1~10は後北C 2-D式土器で微隆起線・帯縄文・三角形刺突文が施文される。胎土はすべて硬質で断面黒色、表面は褐色~赤褐色である。1~2は2条の隆帯にキザミを施した波状口縁で、3~9は体部、10は底部である。11は赤穴式の破片で附加条縄文が施される。12は土師器の小形甕で、口縁部は屈曲して外傾し短く立ち上がり口唇部は平滑である。体部は上半に最大径をもち、底部が窄む器形である。器面調整は外面口縁~頸部は横方向にナデを施し、体部以下は縦方向にハケメ調整の後、前段階の調整と同じ方向に体部上半は横方向に、体部下半は縦方向にヘラミガキ調整を施す。頸部には前段階の調整が残っている。内面も同様に口縁部を横方向、体部を縦方向にナデ調整した後ヘラミガキを施す。13は土師器の球胴の甕の体部下半である。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はハケメ調整の後底部付近に粗いミガキを施している。

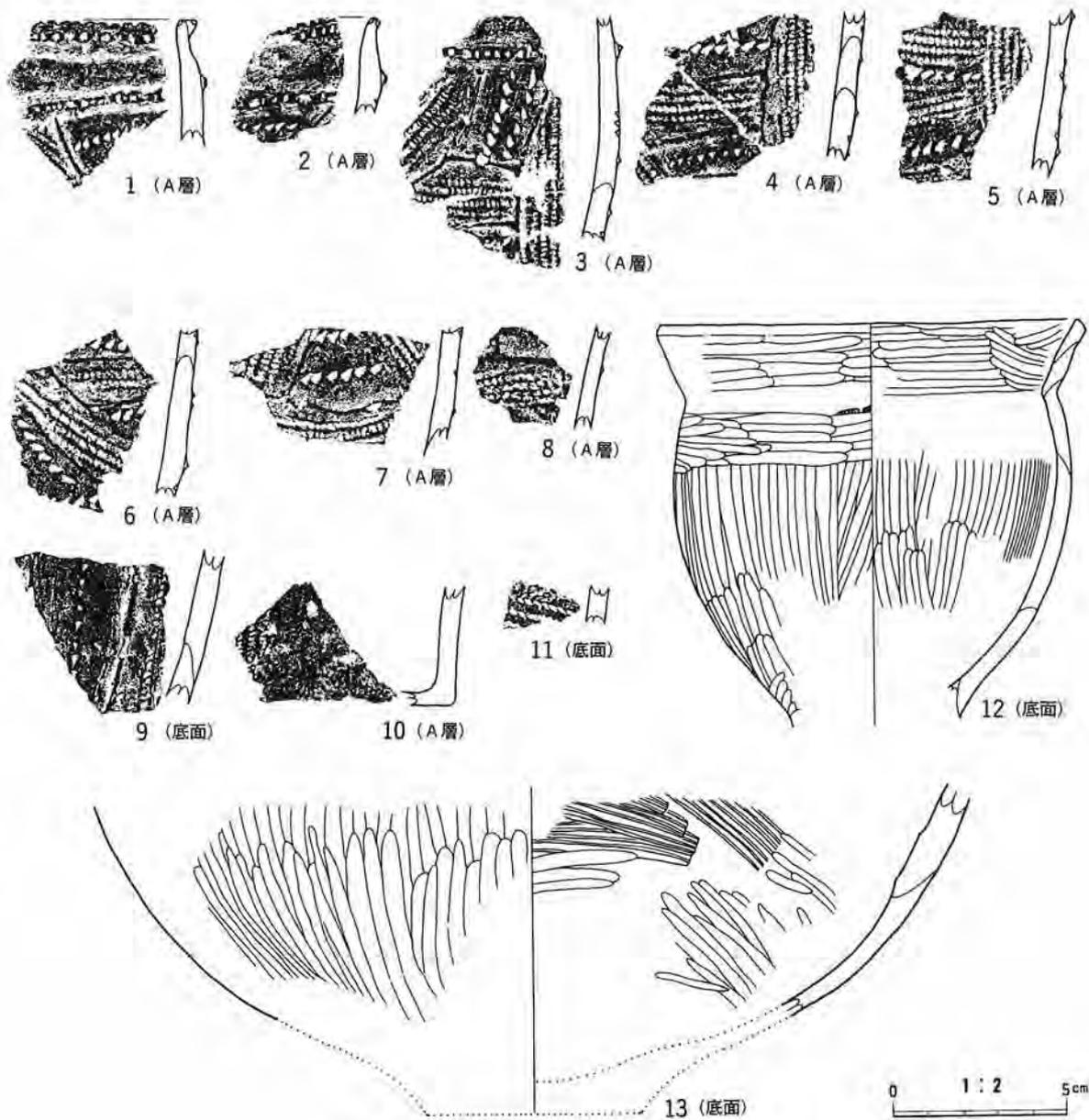
後北式土器

土師器

赤穴式土器

R D 031 土坑 (第5・7・8図)

調査区南半部中央に位置する。R D 016 土坑に切られるため全体規模は不明であるが、検出できた規模は南北0.62 m、深さ0.15 mをはかる。底は東方向に傾斜し、やや外傾しながら立ち上がる。表土直下II a層上面で検出され、埋土は自然堆積で黒褐色土主体である。遺物は出土していない。



第10図 RD030土坑出土遺物

(2) 縄文時代の遺物包含層 (第5・6・11図)

調査区

調査区は北トレンチを除くと傾斜のほとんどない平坦面で、遺物包含層はその平坦面のほぼ全域にわたって検出されている。縄文早期の遺物を主体に前期、中期、弥生終末期、古代の遺物が出土している、それらが集中するブロックなどは認められないが、調査区中心部と東側調査区が稀薄である。自然堆積で、特にII a層が遺物を多量に包含しており層厚10 cmほどである。遺構検出はII a層上面またはII b層上面で行った。

確認できた調査区の層相はI a層からVI層に大別され、そのうち遺物を包含する層はI a・II

a・II b層である。

I a層 耕作土

層相

II層 黒色土主体(10 YR3/2)。II層の層厚は、20～30 cmである。a、bに細分され、II a層は粒～塊状褐色土を少量含み、遺物は多量に含んでいる。特に縄文早期の遺物が卓越し、そのほか縄文前期・中期と弥生終末期の土器が数点出土しているが、これらは出土状況からみて後の混入の可能性が高い。II b層は粒～塊状褐色土を多量に含み、遺物も含まれるがごく少量で、II a層から落ち込んだものと思われる。

III層 褐色土主体(10 YR4/4)。粒状黄褐色土を含みやや硬質である。III層以下は無遺物層。

IV層 褐色土～黄褐色土主体(10 YR4/6～5/8)。やや軟質でスコリアを含む。

V層 黄褐色土主体(10 YR5/6)で、粉～粒状灰白色土を少量含む。

VI層 褐色土主体(10 YR4/6)。硬くしまり、塊状黄褐色土を少量含む。

第66次調査の遺物包含層からは、多量の縄文時代早期の土器のほか若干の前期初頭と中期、弥生時代、古代の土器が出土している。その総数は205点を数える。その内訳は早期土器116点、前期土器5点、中期土器17点、弥生土器3点、後北土器22点、土師器10点で縄文早期の土器が大半を占めている。

遺物の出土
状況

(第11図) 1～24・27～29が縄文早期の土器群である。早期の土器群を系統別にみると、早期前葉の無文土器が1点、早期中葉の貝殻沈線文土器が115点出土している。

土器

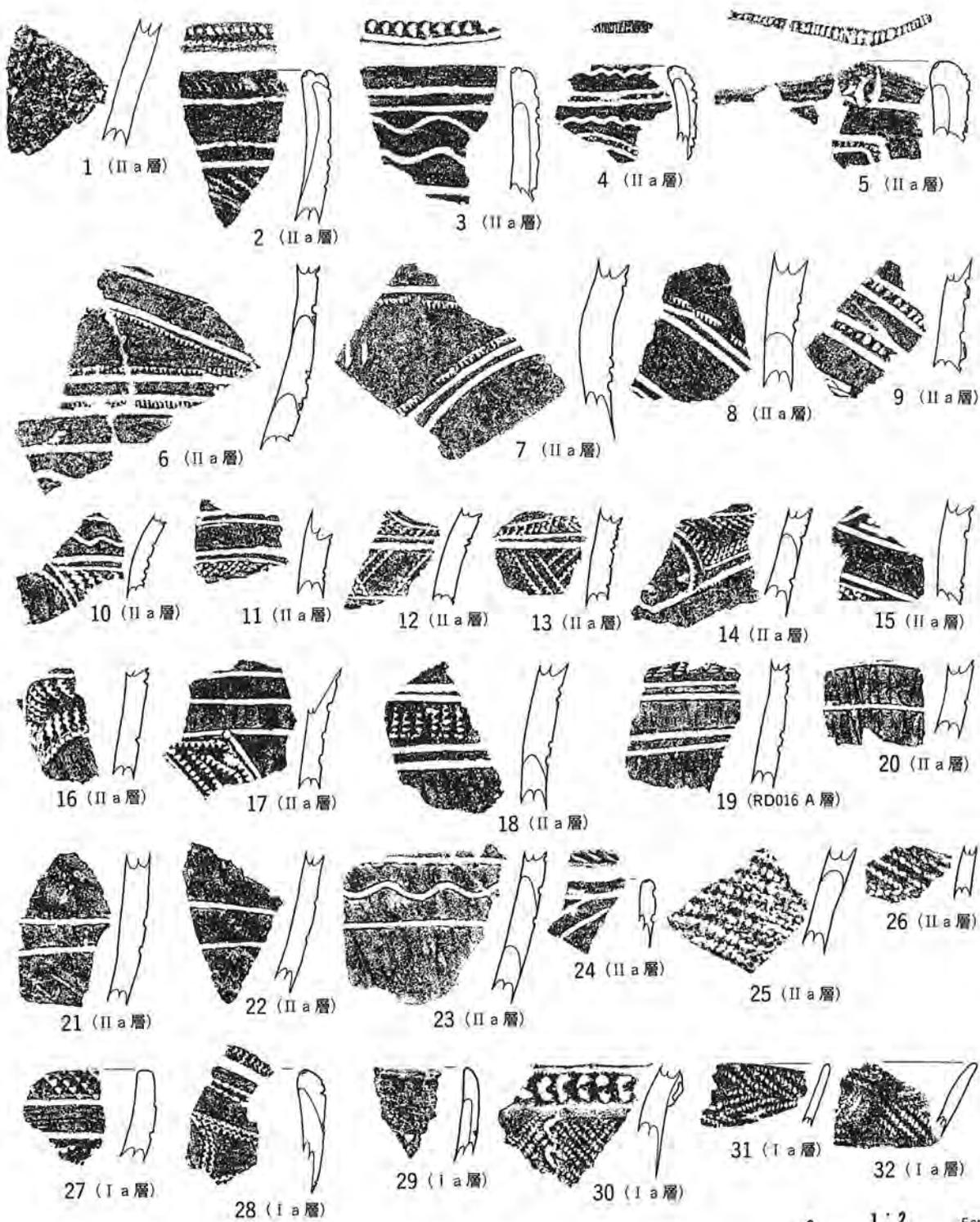
1は無文土器で石英を含み、内外面に指頭圧痕が認められ、外面には化粧土が施される。2～5・24は口縁部で、すべて口唇部から内面にかけて沈線や刻目などが施される。2～4は平縁、5は山形口縁である。2は口唇部に先端が尖った工具による押引文、内面には刻みが施され、外面には口縁に平行に押引文と沈線文で区画し、無文帯を隔てて斜位の貝殻腹縁文を充填する。3は口唇部に沈線とそれに沿うキザミが施され、外面には平行沈線による波状の曲線が施される。4は口唇部にキザミが施され、外面には押しきによる鋸歯状の沈線と、貝殻によるキザミをつけた隆線が施される。5は口唇部内面には貝殻背面の押圧によってキザミを施し、外面には幾何学文様を表す。6～19は口縁部付近から体部上半の部分である。6～8は同個体で沈線に沿って横位の貝殻腹縁文を施し、胎土には金雲母が大量に含まれる。9は金雲母を多く含み、隆沈線には刻目を施す。10～19は沈線による区画帯を貝殻腹縁文で充填したもので、12と13は同個体である。12～14・16の沈線は押しきによるものである。20～23は体部下半で平行沈線が施される。内外面ともに縦方向によく磨かれている。27～29はI a層から出土したもので口縁部形態は27は平頭、28・29は外削ぎ状である。28は貝殻腹縁文によって沈線的な文様効果を表出している。24は早期後葉の条痕文土器の口縁部で波状を呈し口唇部はキザミ、外面には沈線文が施され、内面は丁寧に磨かれている。胎土には金雲母がわずかに含まれる。

25は前期初頭の土器で外面のみの縄文施文で繊維を含む。30は中期前葉の土器の頸部で隆帯には半載竹管文を施し、体部は結節縄文を縦方向に施文する。

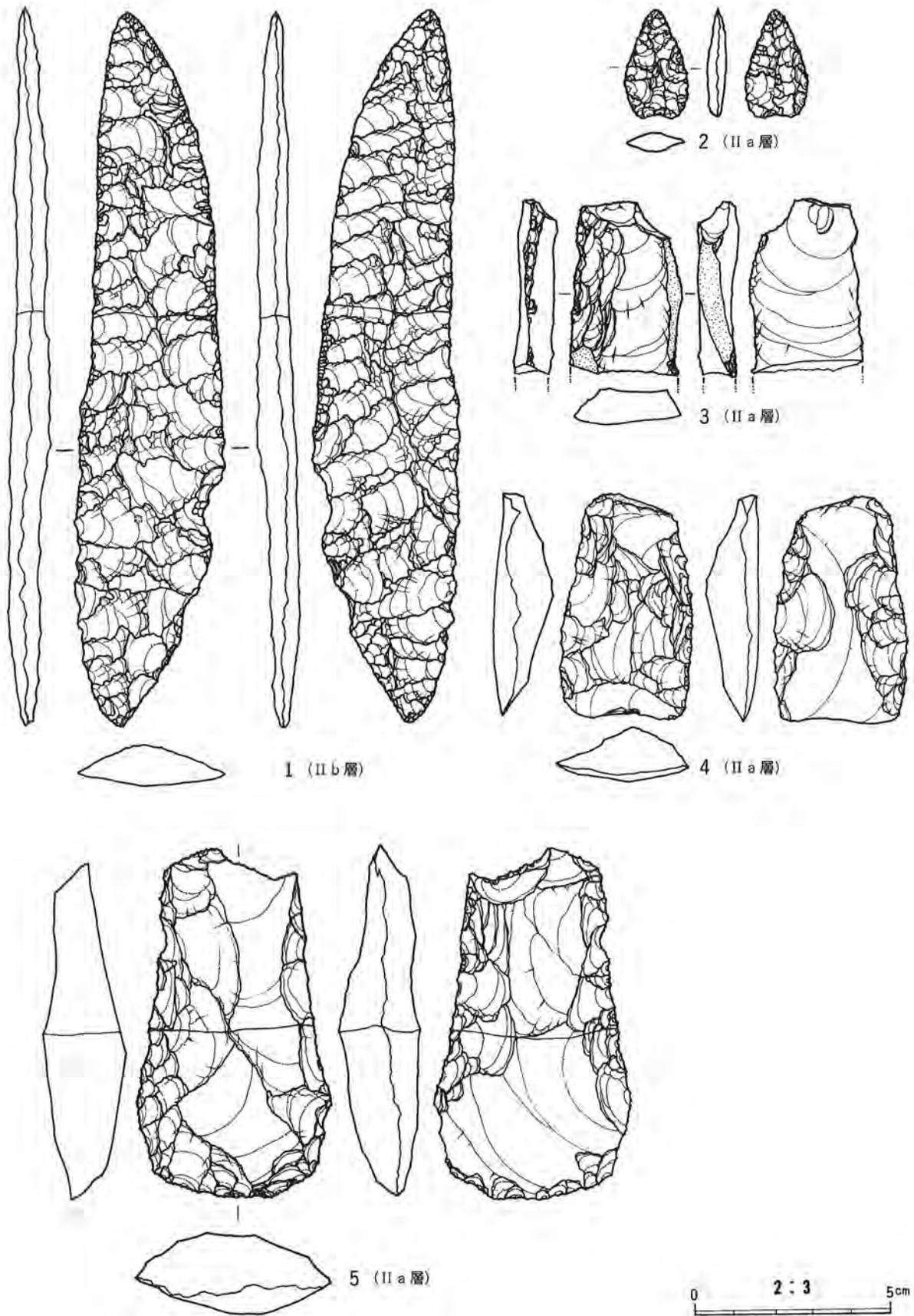
26・31・32は弥生終末期の土器で、羽状附加条縄文が施文される。26は体部で遺物包含層II a層出土、31・32は口縁部でI a層出土である。

1は削器で、両面両側縁に丁寧な調整が加えられ鋭利な刃部を作出している。背面右側縁下

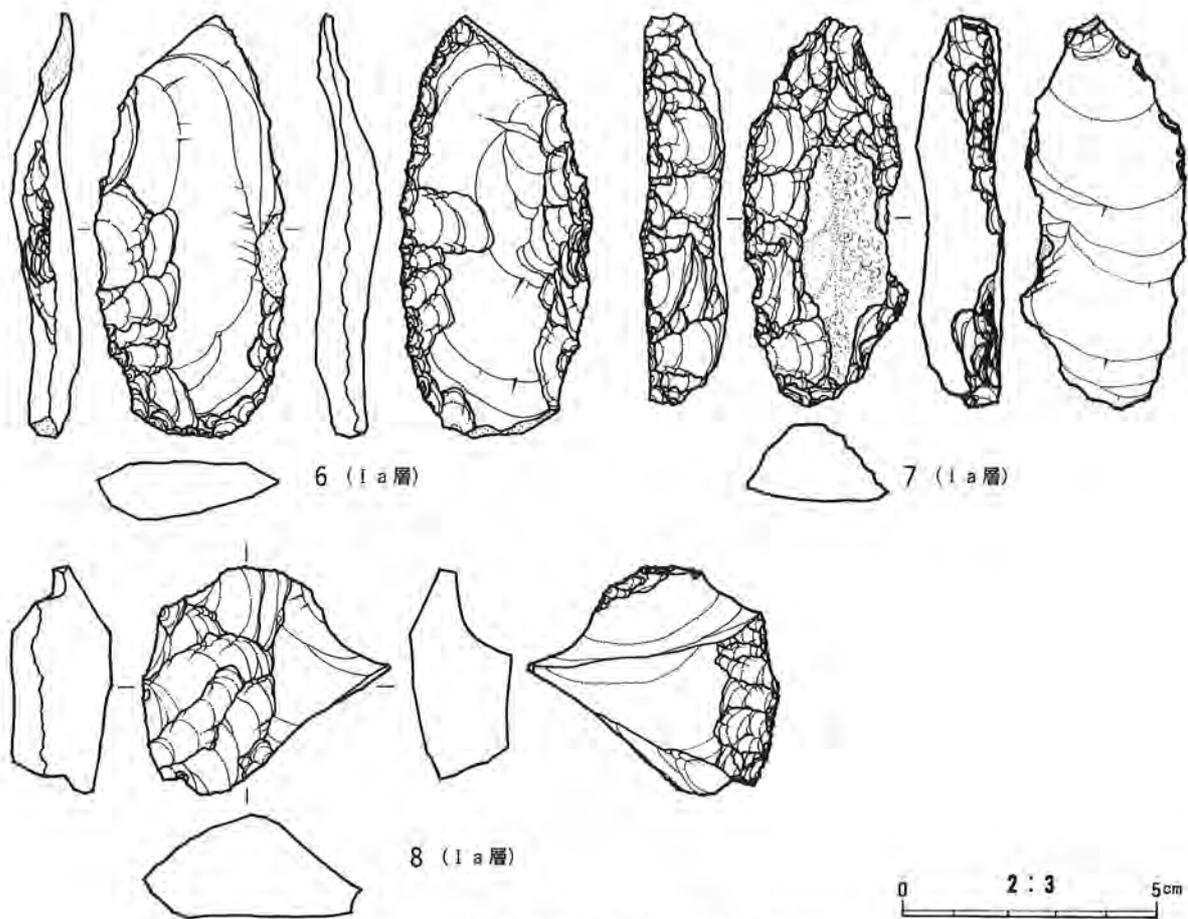
石器



第11圖 遺物包含層出土土器



第12図 遺物包含層出土石器(1)



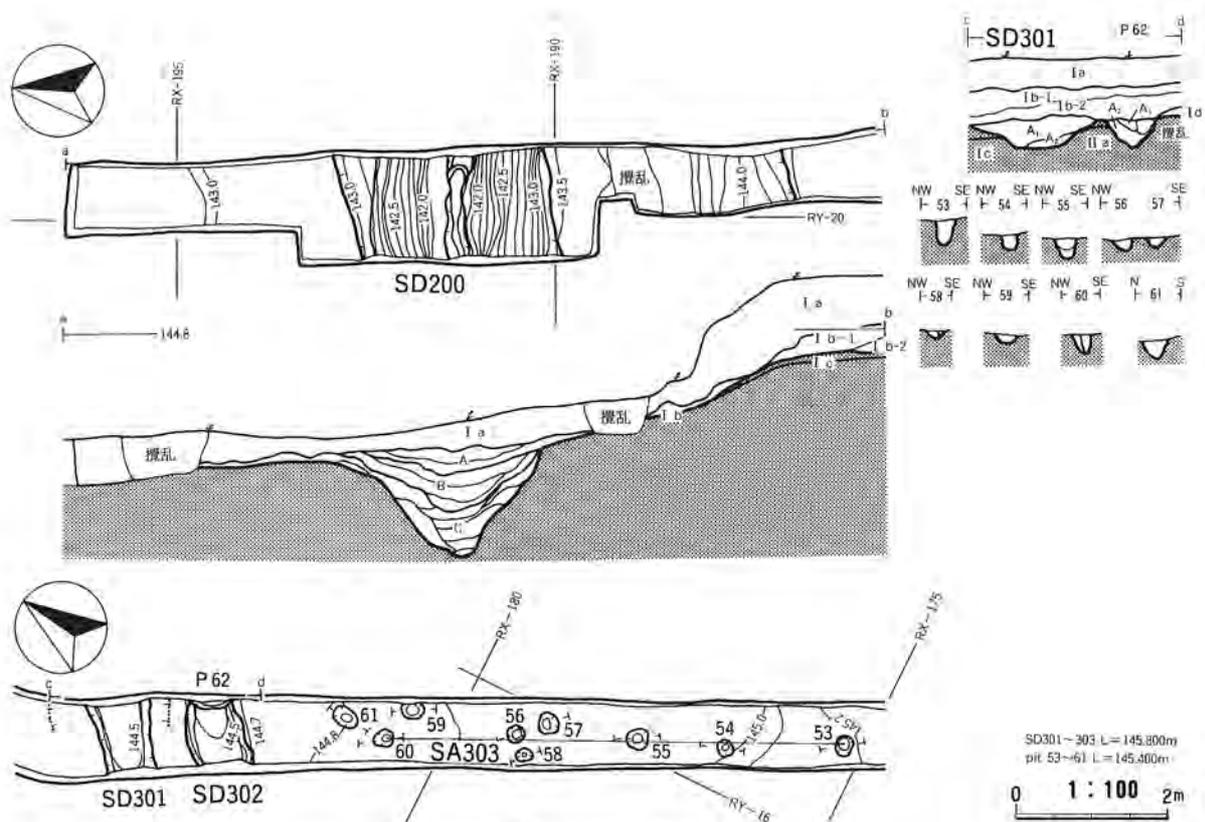
第13図 遺物包含層出土石器(2)

半に2ヶ所の浅いくびれを作出している。2は無茎凹基鏃で両側縁はやや膨らみを持つ。3は削器で、縦長剝片を素材として背面左側縁に刃部を作出し、もう一方の側縁に刃自然面を残す。4は篋状石器で、背面両側縁に急斜度調整を施す。5は篋状石器で、長軸一端に背面のみに調整を加えた部厚な刃部を持つ。6は削器で背面左側縁に丁寧な調整を加え刃部とし、右側縁には急斜度な調整が粗く施されている。端部には自然面を残す。7は搔器で主要剝離面は無調整で背面左側縁に急斜度の調整を加えて片刃を作出している。8は搔器で主要剝離方向と平行に両面調整により部厚な刃部が作出される。上下は折りとられ、腹面上端には調整が加えられる。

(3) 中世の遺構

S D 200 堀跡 (第14図)

北トレンチ北端に位置する。規模は幅2.80m、深さ1.40mをはかり、断面形はV字状である。主軸方向はN 8°Wを示す。表土直下で検出されている。埋土は自然堆積で3層に大別される。A層は黒色土主体、B層は粉～塊状褐色土を少量含む暗褐色土、C層は粒状褐色土を多量に含む暗褐色土である。遺物は出土していない。



第14図 北トレンチ遺構図

SD 301 溝跡 (第 14 図)

北トレンチ中央に位置する。規模は上幅 0.8 m、深さ 0.36 m をはかる。壁はなだらかに立ち上がり、底は北東側に緩やかに傾斜する。主軸方向は N 35°W を示す。II a 層直下で検出され、埋土は自然堆積で暗褐色土主体である。遺物は出土していない。

SD 302 溝跡 (第 14 図)

北トレンチ中央に位置し、P 62 に切られる。規模は上幅 0.76 m、深さ 0.2 m をはかり、主軸方向は N 35°W を示す。壁はほぼ直壁で底は北東側にやや傾斜する。II a 層直下で検出され、埋土は自然堆積で暗褐色土主体である。遺物は出土していない。

SD 303 溝跡 (第 6 図)

調査区東端に位置する。規模は幅 0.7 m、深さ 0.15 m をはかる。主軸方向はほぼ南北で、壁は緩やかに立ち上がり、底は北側から南側へ傾斜する。II b 層直下の地山面で検出され、埋土は、自然堆積で暗褐色土主体である。遺物は出土していない。

S D 500 溝跡 (第4図)

第67次調査区西端に位置し、表土直下で検出した。上幅は8.0 m以上であるが、精査は検出面から深さ0.5 mに留めたため全体規模及び断面形態は不明である。埋土は2層に大別され、A層は黒褐色土主体で褐色土を少量含み、B層は褐色土を多量に含む黒褐色土である。出土遺物はない。

S A 301 掘立柱列跡 (第5・6図)

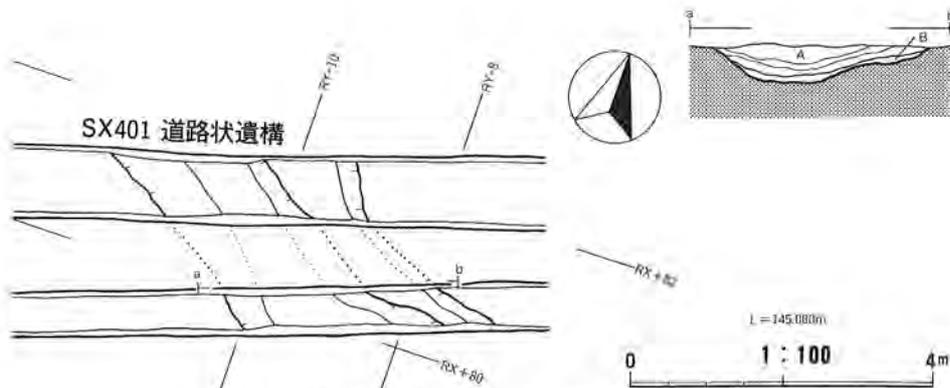
調査区中央に位置し、表土直下で検出している。調査区外にのびる可能性があるが、3間で総長7.3 mをはかり、P1～P3間は2.5 m等間でP3～P4間は2.3 mである。主軸方向はN 14° Wを示し、S A 302 掘立柱列跡に平行する。柱穴は径0.2～0.28 mと小規模で、深さは浅いものではP2の0.1 m、深いものではP1の0.4 mとばらつきがみられる。柱痕跡は認められず、埋土は暗褐色土主体である。遺物は出土していない。

S A 302 掘立柱列跡 (第5・6図)

調査区中央、S A 301 掘立柱列跡の東側に位置し、表土直下で検出している。調査区外にのびる可能性があるが、P5～10で構成され5間で総長12.55 m、柱間寸法は2.3～2.6 mである。柱穴は径0.25 m内外で、深さは0.28 m前後と小規模である。柱痕跡が認められるのはP8のみで、埋土は暗褐色土主体である。主軸方向はN 14° WでS A 301 掘立柱列跡に平行する。遺物は出土していない。

S A 303 掘立柱列跡 (第14図)

北トレンチに位置し、表土直下で検出している。P53～56・60の4間で構成され、総長6.0 mをはかる。柱間はP54・55間のみが1.15 mで、ほかは約1.6 mである。柱穴の径は0.2～0.3 mと小規模である。P60のみ柱痕跡が認められ、暗褐色土主体である。主軸方向はN 26° Wを示し、調査区外の現代まで使用された通路に平行する。



第15図 第51次調査区 SX401道路状遺構

2. 北館の調査

第 51 次調査 (第 15 図)

第 51 次調査は公共上下水道敷設工事に伴い北館と本丸の 2 地点を調査しており、北館は南縁辺部を調査している。検出遺構は中世以後の道路状遺構と北館西側を画する堀 (S D 400) である。堀は東端を検出したのみで、埋土の掘り下げおよび精査は実施していない。

S X 401 道路状遺構

北館中央部南端に位置し、表土直下で検出した。上幅 2.85 m、底面幅 1.0 m、深さ 0.5 m をはかり、主軸方向は N 52°W を示す。底面は平坦で、壁面は西側に外傾しながら、東側はなだらかに立ち上がる。埋土は自然堆積で A・B の 2 層に大別される。A 層は黒褐色土主体で、粒状褐色土の含有量により A 1～A 3 の 3 層に細分されるが、A 2 層が硬くしまり、粒状褐色土を最も多量に含む。B 層はやや軟らかく、黒褐色土主体で塊状暗褐色土を多量に含む。形状は溝状であるが、A 2 層のみが硬くしまり、現在使用されている通路の延長上にあることから通路として利用された可能性がある。

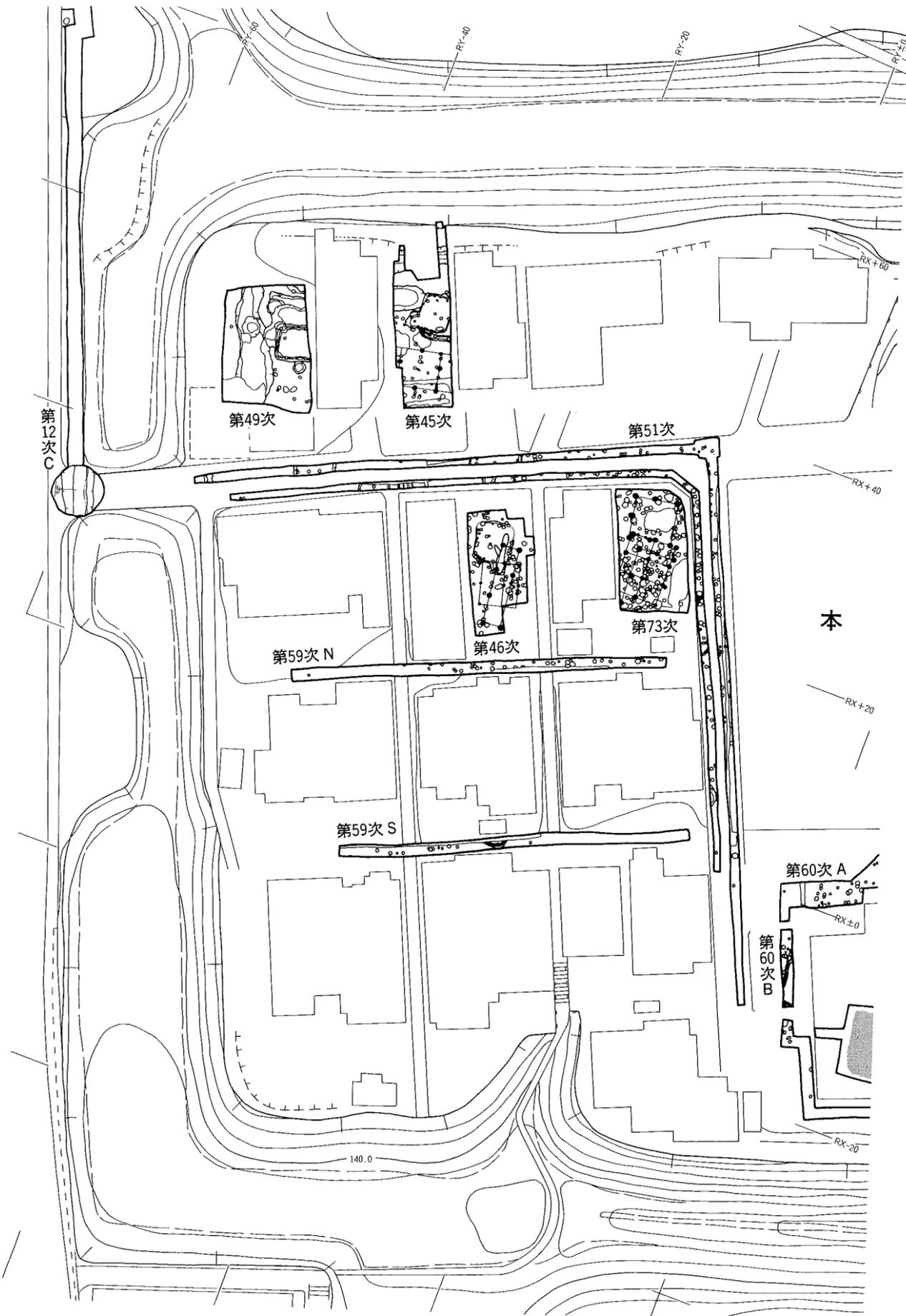
3. 本丸の調査

本丸の調査は平成 4 年度から 10 年度まで 7 件の調査を行っており、昭和 43 年に保育園建設に伴い板橋源氏が調査して以来の平坦部の調査である。

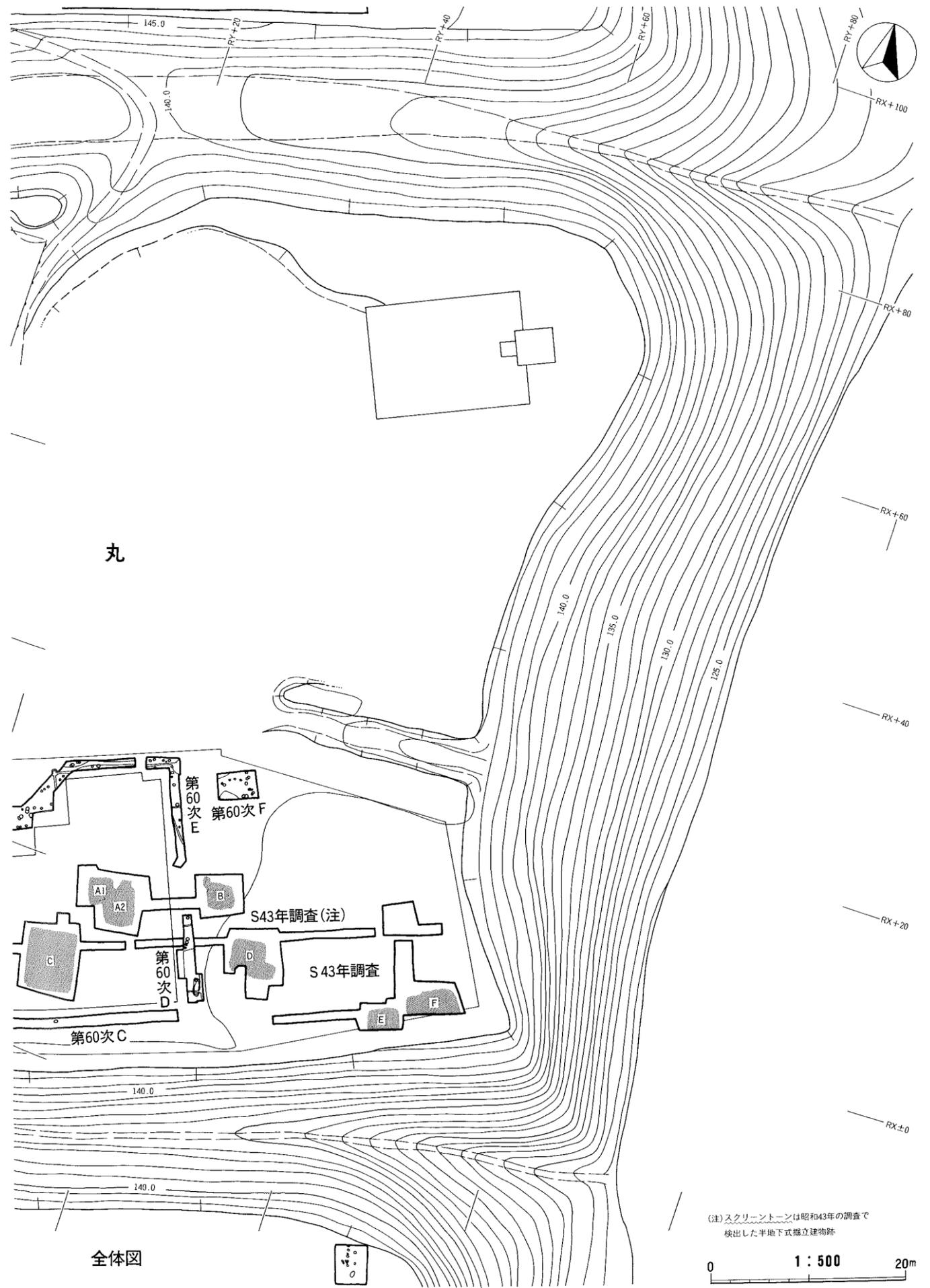
本丸北西部は第 45・49 次調査を実施した。第 45 次調査は本丸北辺で、土塁跡とそれに伴う溝・掘立柱建物跡・竪穴建物跡・柱穴群などが検出されている。第 49 次調査では中世の竪穴建物跡、本丸西辺に平行する溝、土塁とその土取り穴と思われる遺構などが検出されている。

本丸中央部付近は第 46・51・59・73 次の 4 件の調査を実施している。第 51 次調査は公共下水道敷設工事に伴って本丸北西部から南部中央にかけてトレンチ調査を行った。本丸北西部では中世の竪穴状遺構・土坑が検出され、本丸中央部にあたる調査区の屈折部周辺から南側にかけては、高密度で柱穴が検出されている。また、第 51 次調査の屈折部の内側に位置する第 73 次調査でも同様に多数の柱穴と掘立柱建物跡が検出されているが、そのやや西側の第 46 次調査では柱穴はやや少なくなり、竪穴建物跡・掘立柱建物跡などが検出されている。第 59 次調査は下水道敷設工事に伴い本丸西半部 2 地点を東西方向のトレンチ状に調査し、本丸中央寄りの北側調査区では南側調査区に比べて柱穴が多数検出されている。

また、本丸南東部は下水道敷設工事に伴い保育園の周囲 6 地点を調査し、竪穴建物跡・柱穴などが検出している。過去の保育園建設に伴う調査では竪穴建物跡が 7 棟検出されている。



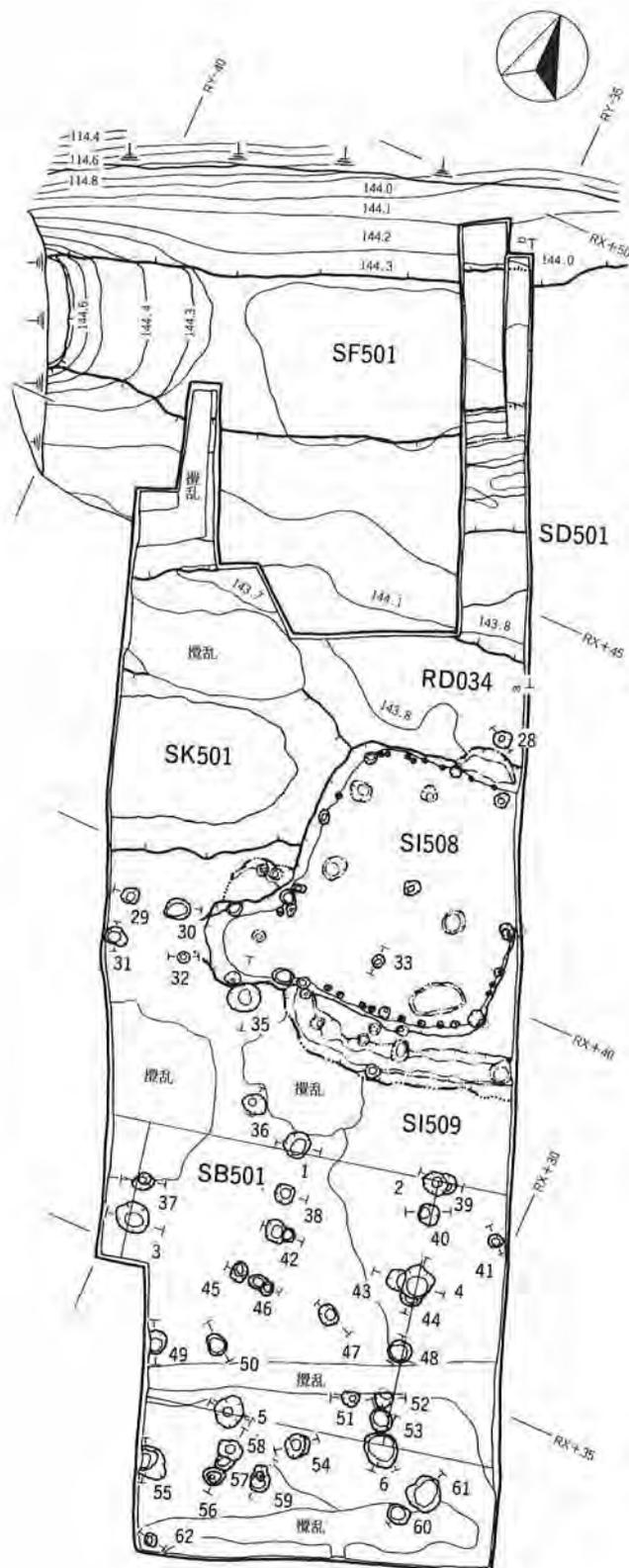
第16図 本丸



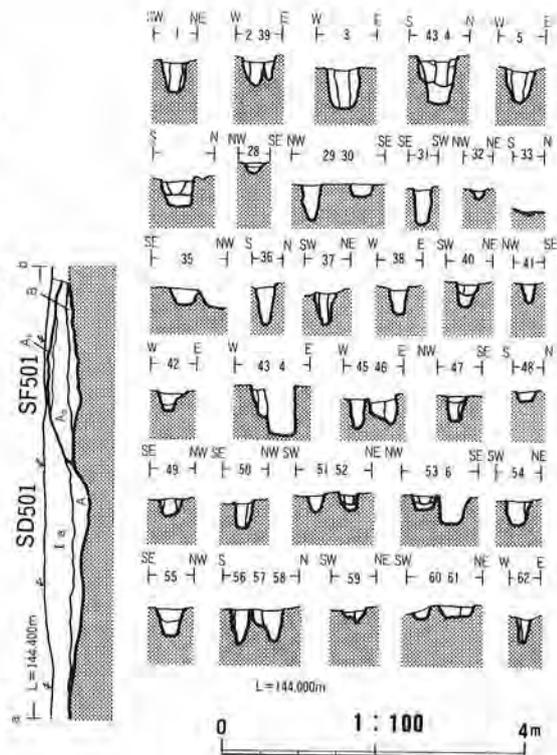
全体図

第1次

(注)スクリーントーンは昭和43年の調査で検出した半地下式掘立建物跡



第17図 第45次調査区全体図

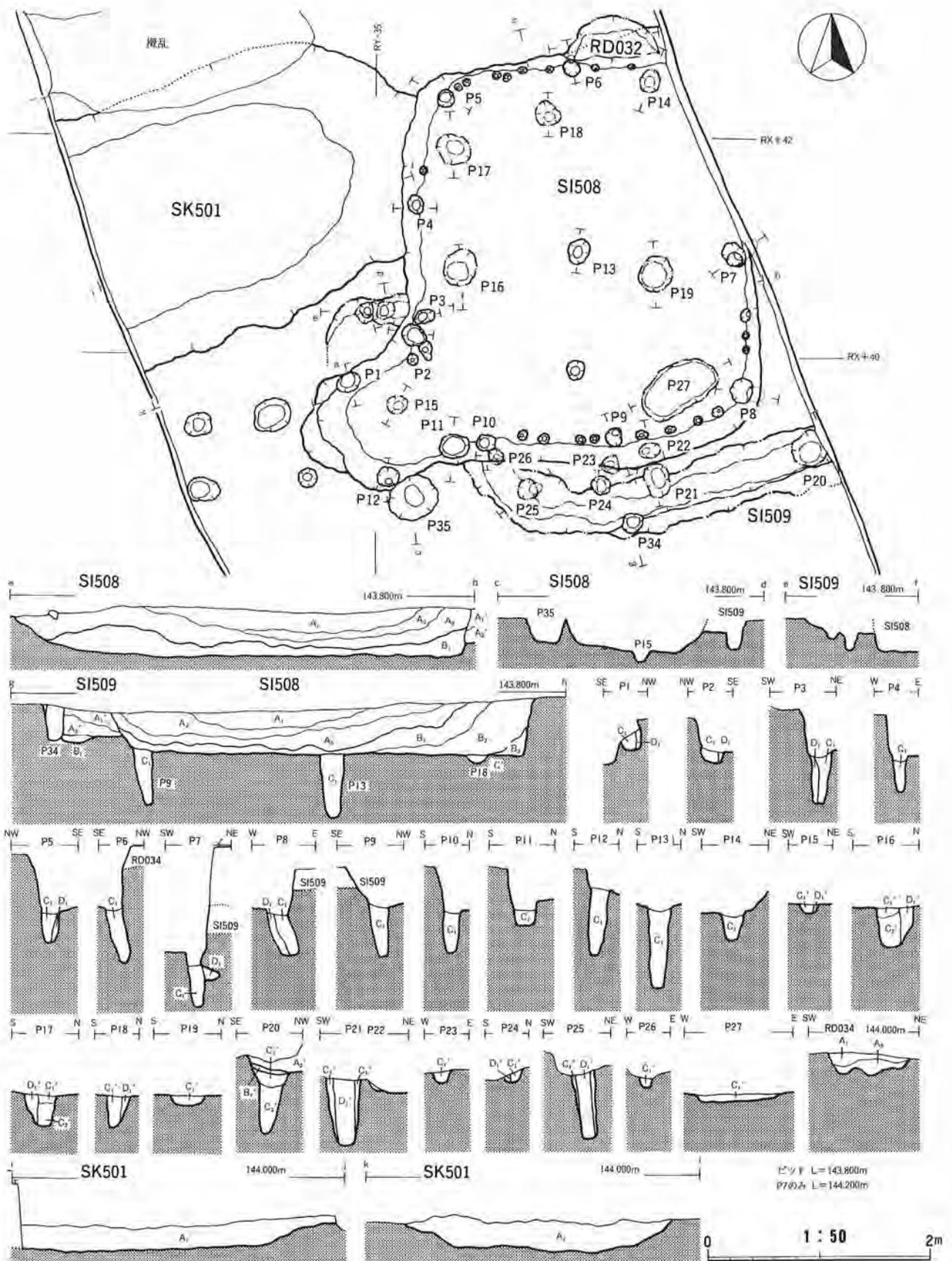


第45次調査 (第17・18図)

(1) 縄文時代の遺構

R D 034 土坑 (第17・18図)

調査区中央部に切られ S I 508 堅穴建物跡北壁に切られている。規模は径 0.82 m、深さは最深部で 0.2 m をはかる。検出面は表土直下の地山黄褐色土上面である。埋土は暗褐色土主体で粒状褐色土を少量含む。壁は緩やかに立ち上がり底面は起伏がある。出土遺物はない。



第18図 SI508・509竪穴建物跡、SK501・RD034土坑

(2) 中近世の遺構

S I 508 竪穴建物跡 (第 17・18 図)

規 模 調査区中央に位置し、R D 034 土坑・S I 509 竪穴建物跡を切る。表土直下で検出した。隅丸長方形で西壁に出入口の張り出しを有する。長軸 3.62 m、短軸 3.05 m、壁高 0.52 m をはかり、南北 3 間・東西 2 間の N 10°W を示す南北棟である。埋土は自然堆積で 3 層に大別される。A 層は黒褐色土主体、B 層は暗褐色土主体、C 層は黒褐色土主体で塊状褐色土を多量に含む。床面はほぼ平坦で壁際に小ピットが検出され、直壁ぎみに立ち上がる。支柱穴を構成するピットは、P3 を除く P1～P13 である。遺物は出土していない。

S I 509 竪穴建物跡 (第 17・18 図)

規 模 調査区中央に位置し、S I 508 竪穴建物跡に切られる。調査区外に続くため全体規模は不明であるが、東西 3.10 m 以上、壁高 0.25 m をはかる。南北 2 間・東西 2 間以上で、西壁に出入口の張り出しを有する。N 9°W を示す東西棟である。埋土は自然堆積で 3 層に大別され、A 層は黒褐色土主体、B 層は塊状褐色土を含む黒褐色土、C 層は塊状明黄褐色土を多量に含む褐色土である。床面は平坦で南壁際に幅 0.4 m、深さ 0.08 m の周溝があり、壁は直壁ぎみに立ち上がる。柱穴は 15 口を検出し、支柱穴を構成するピットは P14、16～21、25 である。出土遺物はない。

S B 501 掘立柱建物跡 (第 17 図)

規 模 調査区南端に位置し、南北 2 間 (総長 3.65 m)、東西 2 間 (総長 3.80 m) で調査区外に続く可能性がある。棟方向は N 12°W である。柱穴は P1～6 を検出し、径 0.35～0.45 m、深さ 0.35～0.6 m である。すべて柱痕跡が認められ、柱痕跡は黒褐色土主体で、掘方埋土は暗褐色土と褐色土の混合土である。P2 埋土下部から図示はしていないが、開元通寶 1 点が出土している。

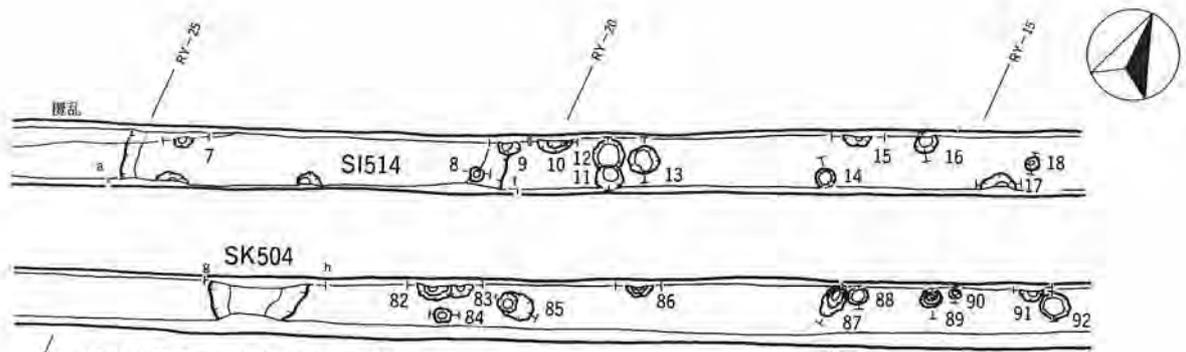
出土遺物 なお、建物に属する柱穴のほか 34 口の柱穴が検出され、P42 から鉄釉稜皿 (第 29 図 8) が出土している。

S F 501 土塁跡 (第 17 図)

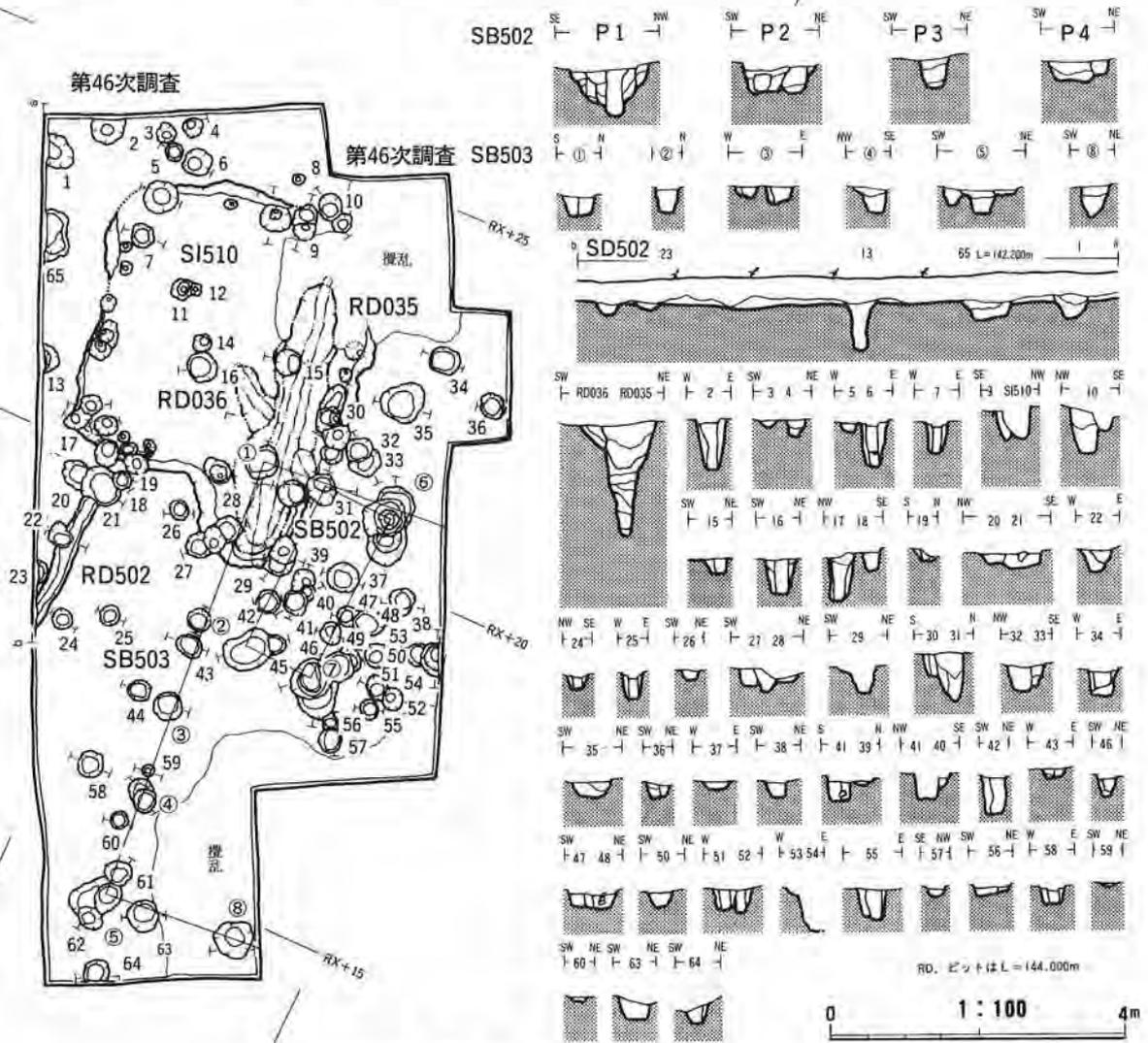
調査区北側に位置し、S D 501 溝跡に隣接する。上幅 1.95 m、下幅は調査区外を含め約 3.45 m、高さ 0.30 m の盛土を確認しているが、調査区外の敷地西端には 0.6 m の高まりが残存する。地山漸移層直上に黒褐色土を主体に構築されている。主軸方向は N 70°E である。出土遺物はない。

S K 501 土坑 (第 17・18 図)

調査区中央に位置し、表土直下で検出した。長楕円形を呈し、長軸 3.20 m 以上、短軸 2.40 m、深さ 0.22 m をはかる。主軸方向は N 70°E を示す。埋土は自然堆積で粒状褐色土を少量含む黒褐色土主体である。底はほぼ平坦で壁はなだらかに立ち上がる。遺物は出土していない。



第51次調査 (断面図は第26図)



第19図 第46次・第51次調査区全体図

S D 501 溝跡 (第 17 図)

調査区北半、S F 501 土塁跡南側に隣接して表土直下で検出した。主軸方向はN 70°Eを示す。規模は上幅 3.0 m、深さ 0.2 m をはかる。底はやや起伏があり、壁はなだらかに立ち上がる。埋土は自然堆積で黒褐色土主体で、時期不詳の底部穿孔土器(第 29 図 2)が出土している。

第 46 次調査 (第 19・20 図)

(1) 縄文時代の遺構

R D 035 土坑 (第 19・20 図)

調査区北半部中央に位置し、S I 510 竪穴建物跡床面で検出した。平面形は長楕円形を呈し、規模は長さ 3.84 m、上幅 0.74 m、下幅 0.15 m、深さ 1.52 m をはかる。下半はほぼ直壁で、上半はやや外傾しながら立ち上がる。S I 510 竪穴建物跡に切られ、R D 036 土坑を切る。主軸方向はN 10°Wを示す。埋土は自然堆積でA層は黒褐色土主体、B層は塊状明黄褐色土を含む暗褐色土、C層は黒色土主体である。遺物は出土していない。

R D 036 土坑 (第 19・20 図)

調査区北半部中央に位置し、S I 510 竪穴建物跡床面で検出した。長楕円形を呈し、規模は長さ 2.40 m、上幅 0.48 m、下幅 0.16 m、深さ 0.34 m をはかる。下半はほぼ直壁で、上半は緩やかに立ち上がる。主軸方向はN 56°Wを示す。S I 510 竪穴建物跡、R D 035 土坑に切られる。埋土は自然堆積で黒褐色土主体である。遺物は出土していない。

(2) 中近世の遺構

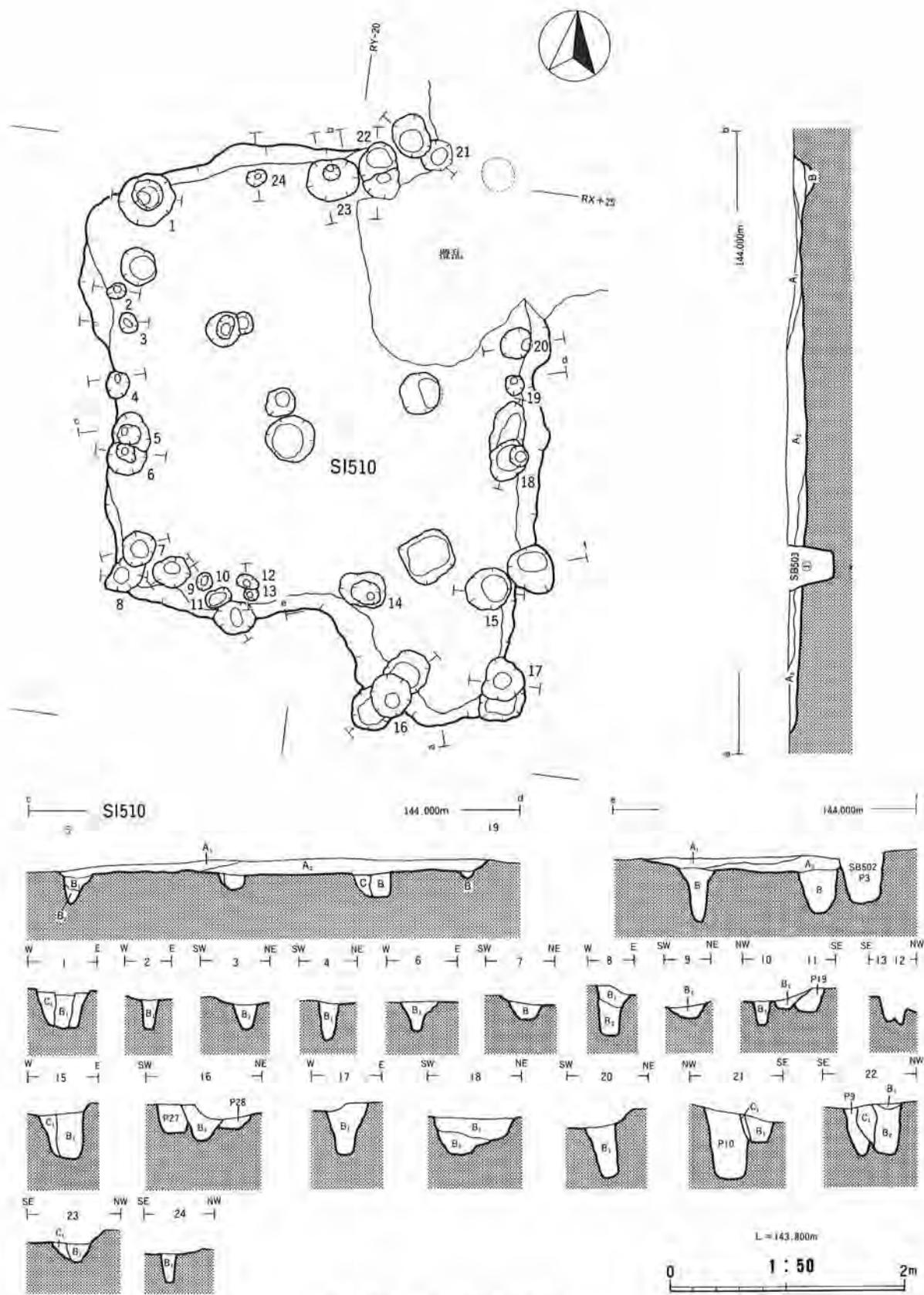
S I 510 竪穴建物跡 (第 19・20 図)

規 模 調査区北半に位置し、表土直下で検出した。隅丸方形を呈し、南北 3.90 m、東西 3.70 m、壁高 0.15 m をはかり、北壁東側に張り出しを有する。棟方向はN 12°Wを示し、R D 035、R D 036 土坑を切っている。埋土は自然堆積で、少量の粒状褐色土を含む暗褐色土である。床面はほぼ

出土遺物 平坦で、25 口の柱穴を確認している。壁は緩やかに立ち上がる。床面から古銭(洪武通宝?第 30 図 29)、埋土から瀬戸・美濃灰釉甃皿(第 29 図 9)、ピット 7 から中国白磁皿(第 29 図 12)が出土している。

S B 502 掘立柱建物跡 (第 19 図)

規 模 調査区中央に位置し、表土直下で検出した。南北 1 間(総長 2.4 m)、東西 1 間(総長 1.0 m)でN 2°Eを示す南北棟である。柱穴は 4 口検出し、柱痕跡が認められるものは 1 口のみで黒褐色土主体である。S B 503 掘立柱建物跡を切る。出土遺物はなし。



第20図 SI510豎穴建物跡

S B 503 掘立柱建物跡 (第 19 図)

規 模

調査区南半に位置し、表土直下で検出されている。調査区外へのびる可能性があるが、東西 1 間 (総長 1.8 m)・南北 4 間 (総長 6.3 m) で、西側柱筋は N 2° E を示す。S B 502 掘立柱建物跡に切られている。柱穴は 8 口検出され、径 0.4~0.6 m、深さ 0.25~0.4 m である。柱痕跡の認められるものは 2 口のみで、黒褐色土主体で粒状褐色土をごく少量含む。遺物はピット

出土遺物

③堀方から中国白磁皿 (第 29 図 15)、⑤から瀬戸美濃灰釉丸皿 (第 29 図 6)、⑥から鉄釉大皿 (第 29 図 10)、⑧の柱痕跡から瀬戸美濃天目茶碗 (第 29 図 4) が出土している。

なお、建物に属する柱穴の他に調査区全体から 64 口の柱穴が検出されている。

S D 502 溝跡 (第 19 図)

調査区中央部西端に位置し、表土直下で検出している。調査区外西側にのびるが、長さ 1.75 m 以上、幅 0.25 m である。主軸方向はほぼ真北を示し、P21 に切れ P22 を切る。埋土は自然堆積で、粒状褐色土を含む黒褐色土である。壁は外傾しながら立ち上がる。出土遺物はない。

第 49 次調査 (第 21・22 図)

S I 511 竪穴建物跡 (第 21・22 図)

規 模

調査区東半部中央に位置し、表土直下で検出されている。調査区外へ続くため全体規模は不明であるが、南北 3.54 m、東西 3.50 m 以上、壁高 0.45 m をはかる。棟方向は N 17°W を示す。

埋 土

埋土は人為堆積で A・B・C の 3 層に大別される。A 層は暗褐色土主体、B 層は褐色土主体で塊状暗褐色土を多量に含み、C 層は暗褐色土主体である。壁はほぼ直壁に立ち上がり、床面はほぼ平坦で壁際に幅 0.2~0.3 m、深さ 0.1 m の周溝が検出されている。柱穴は 13 口検出し、径 0.2~0.3 m で、P 1・3・4 は柱痕跡が認められる。出土遺物はなし。

S K 502 土坑 (第 21・22 図)

調査区中央に位置し、S D 503 溝跡に切られる。楕円形を呈し、長軸 2.0 m、短軸 1.70 m、深さ 0.42 m をはかる。底面はやや起伏があり、外傾しながら立ち上がる。主軸方向は N 52°W を示す。埋土は人為堆積で 2 層に大別され、A 層は塊状褐色土を多量に含む暗褐色土で、B 層は塊状暗褐色土を含む褐色土である。埋土中から中国白磁染付皿 (第 29 図 18)、砥石の破片 (第 29 図 24) が出土している。

S K 503 土坑 (第 21・22 図)

S I 511 竪穴建物跡の北側に位置し、表土直下で検出されている。ほぼ円形を呈し、最大径 1.15 m、深さ 0.2 m をはかる。底面はやや起伏があり、緩やかに立ち上がる。埋土は自然堆積で、A 層はスコリアを少量含む黒色土、B 層は塊状褐色土を多量に含む黒色土である。

S D 503 溝跡 (第 21 図)

調査区西半部に位置し、表土直下で検出されている。上幅は北端 2.0 m、南端 3.7 m、深さ 0.2

mをはかり、北側から南側へ次第に幅広になる。底面は平坦で壁はなだらかに立ち上がる。主軸方向はN 23°Wを示し、SK 503土坑とP2を切っている。埋土は自然堆積で粒状褐色土を含む暗褐色土主体である。壁はなだらかに立ち上がる。

S F 502 土壘跡 (第 21 図)

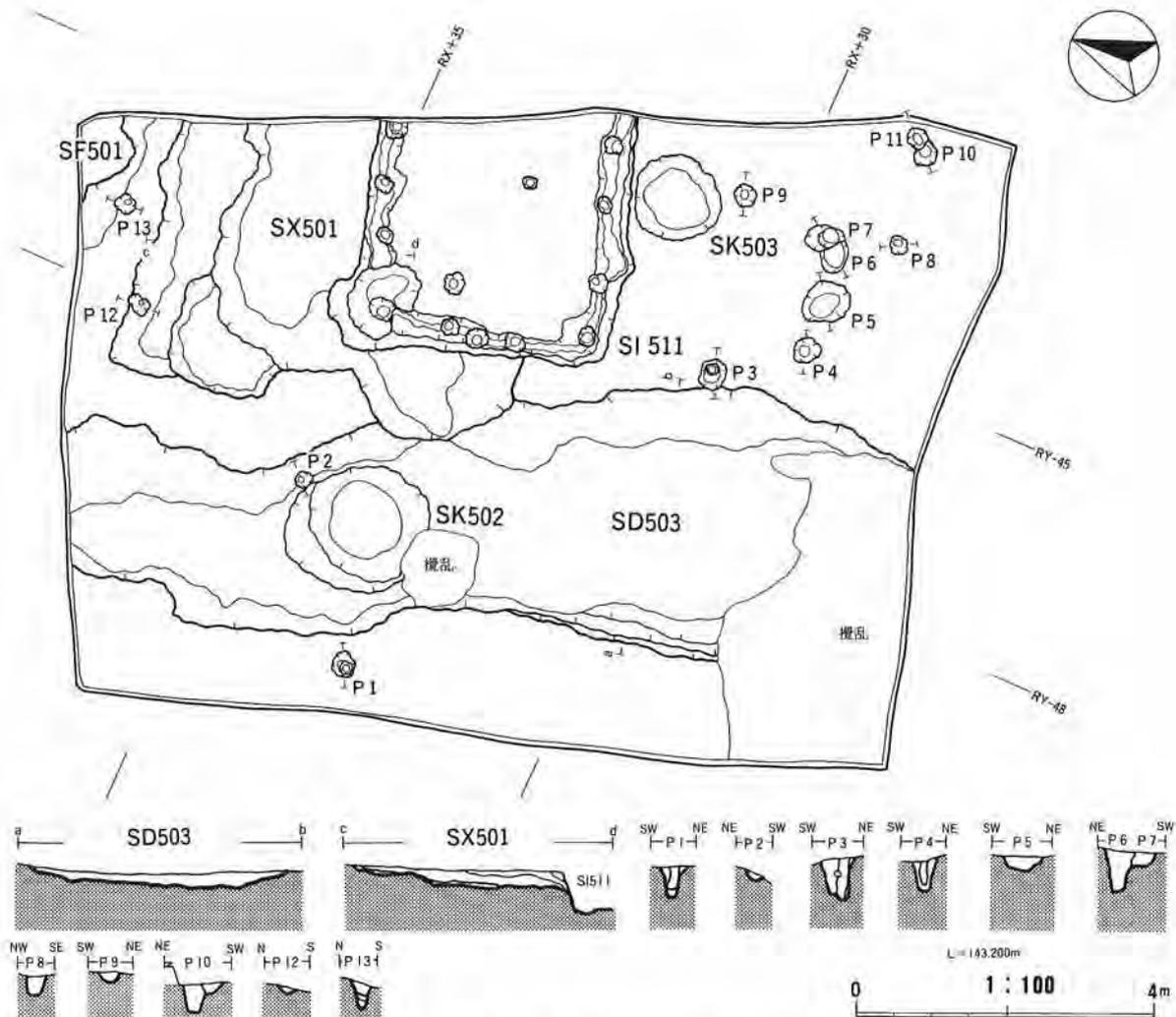
調査区北東端に位置し、表土直下で検出している。部分的な検出のため全体規模は不明であるが、南北0.7m、東西1.0m、高さ0.2mをはかる。出土遺物はなし。

S X 501 土取り穴 (第 21 図)

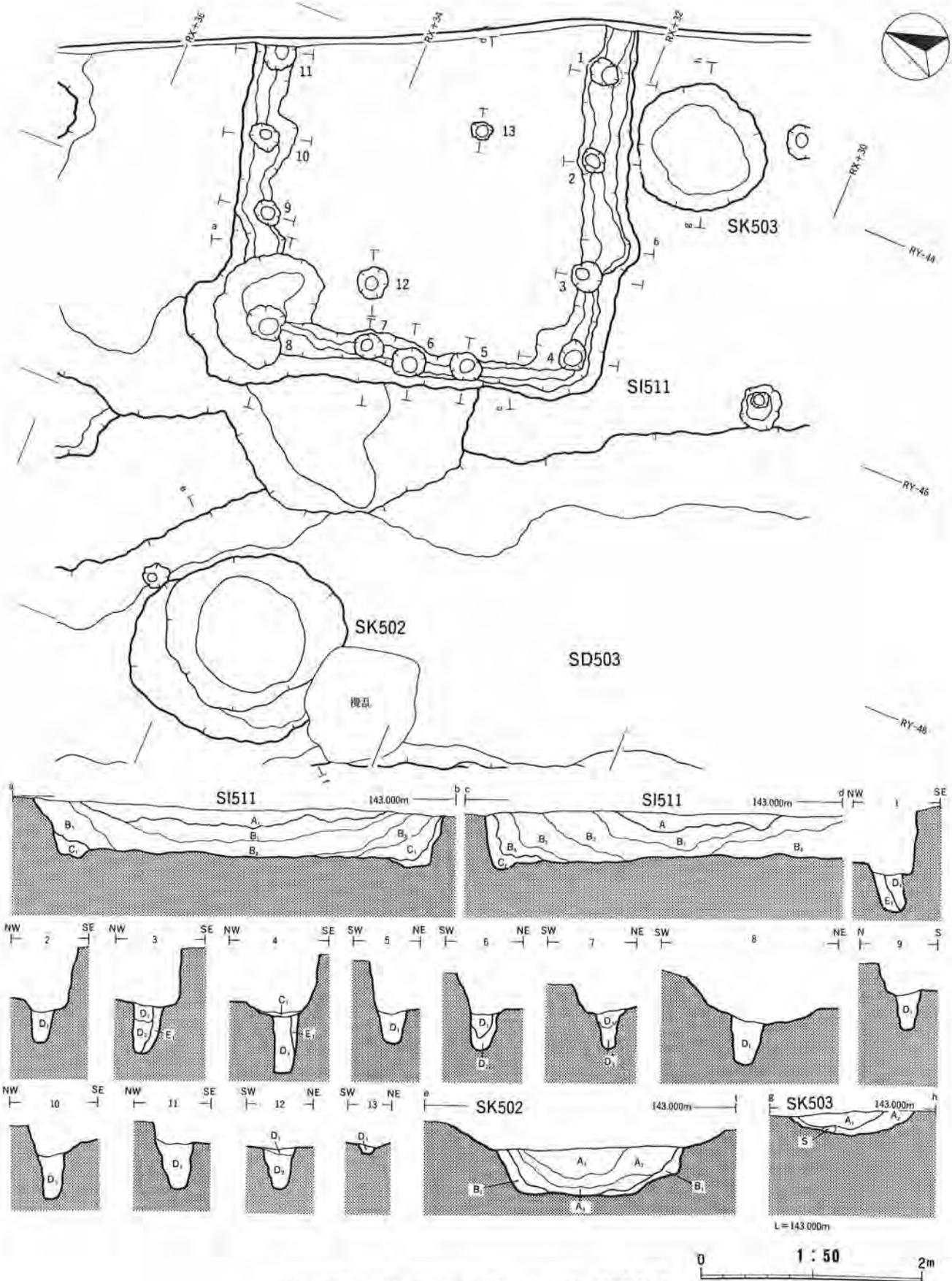
S I 511 竪穴建物跡の北側に位置し、表土直下で検出されている。平面形は不整形で、南北5.30m、東西3.60m以上、深さは最深部で0.2mをはかる。S I 511 竪穴建物跡に切られる。底面は激しい起伏があり、南壁は緩やかに、東壁は直壁ぎみに立ち上がる。埋土は自然堆積でA・Bの2層に大別され、A層は褐色土を少量含む暗褐色土、B層は褐色土を多量に含む暗褐色土である。出土遺物はなし。土壘の土取り穴と思われる。

なお、調査区全体に13口の柱穴が検出されている。

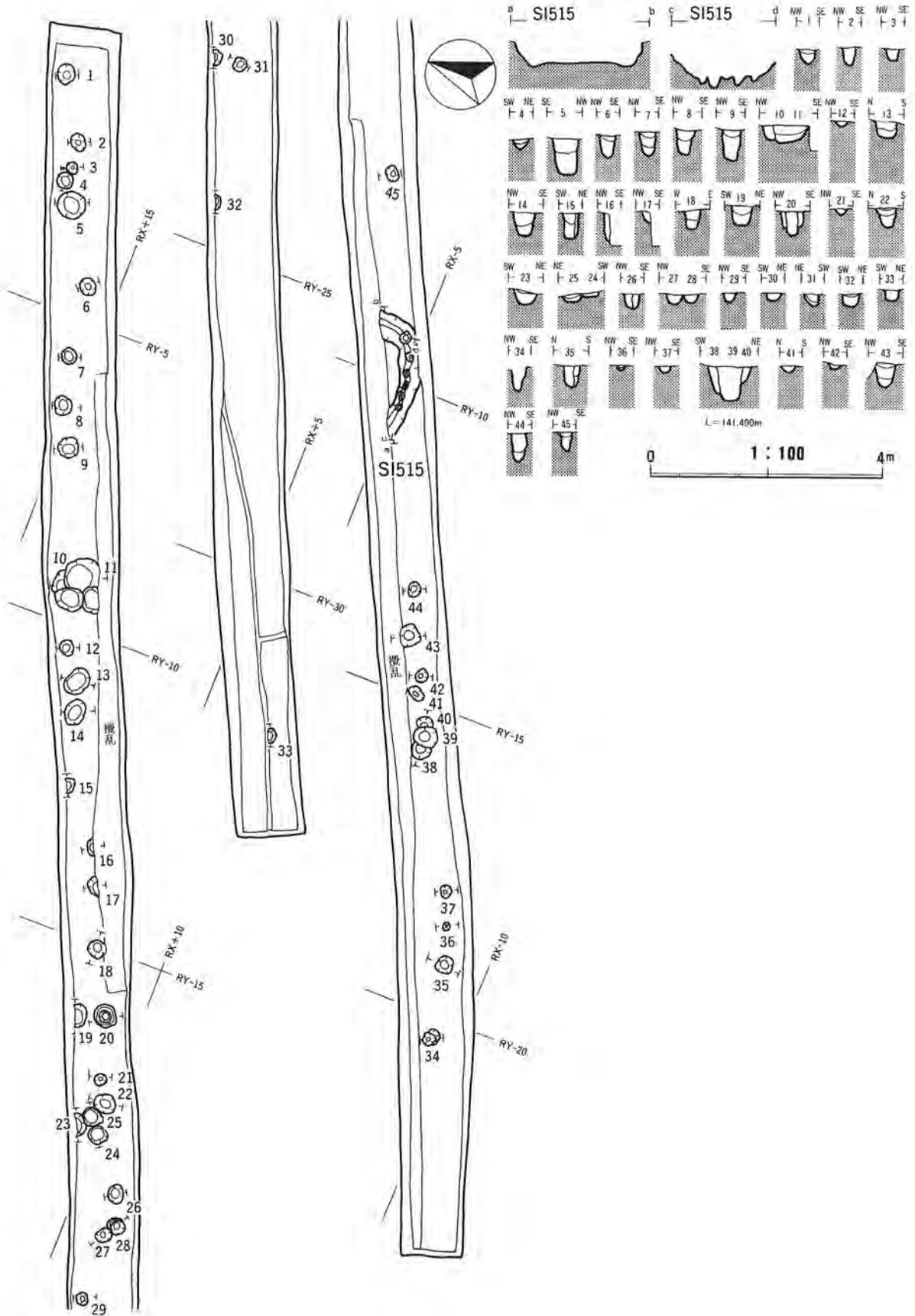
柱穴群



第21図 第49次調査区全体図



第22図 SI511竪穴建物跡、SK502・503土坑



第23図 第59次調査区遺構図

第 59 次調査 (第 23 図)

S I 515 竪穴建物跡

規模 南トレンチ中央に位置する。表土直下で南端を検出したのみで全体規模は不明であるが、隅丸方形あるいは隅丸長方形と思われる。規模は南北 1 m 以上、東西 2 m 以上、壁高 0.35 m をはかる。床はほぼ平坦で壁際に幅 0.4 m、深さ 0.08 m の周溝が検出されている。壁は外傾しながら立ち上がる。棟方向は E 2°N を示す。埋土は不明である。

柱穴群 尚、調査区全体から柱穴 45 口が検出されている。

第 60 次調査 (第 24 図)

S I 516 竪穴建物跡

規模 B 区に位置し、P41・45 に切られる。隅丸方形か隅丸長方形と思われるが西端を検出したのみで全体規模は不明である。棟方向はほぼ真北を示し南北 4.80 m 以上、東西 1.50 m 以上、壁高 0.4 m をはかる。スコリア層を床面とし、平坦で部分的に貼床が認められる。柱穴は確認されていない。壁は外傾しながら立ち上がり、壁際には 0.15~0.25 m、深さ 0.1~0.22 m の周溝が検出されている。埋土は自然堆積で A・B の 2 層に大別され、A 層は黒褐色土主体で粒状褐色土を少量含み、B 層は黒褐色土主体で粒~塊状褐色土とスコリアを多量に含む。A 層から芋引金 (第 30 図 25) が出土している。

出土遺物

R D 038 土坑

D 区南端に位置し、表土直下で検出した。長楕円形を呈し、長軸 1.85 m、短軸 0.6 m、深さ 0.14 m をはかる。主軸方向は N 10°W を示す。底面はほぼ平坦であるが、北端に径 0.25 m、深さ 0.6 m のピット状のくぼみが認められ、壁は外傾しながら立ち上がる。埋土は自然堆積で、粒状褐色土を多量に含む黒褐色土である。

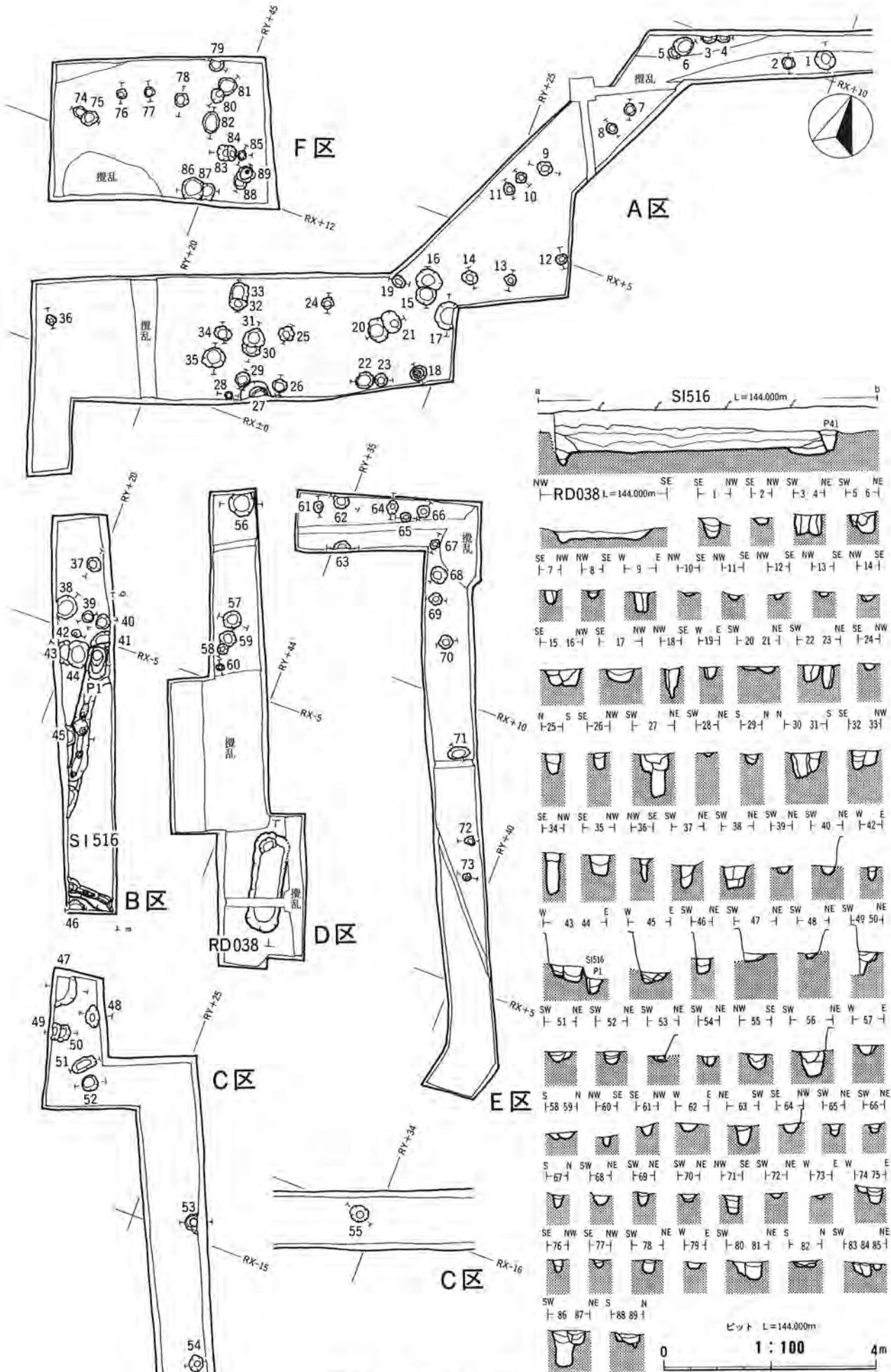
柱穴群 なお、調査区全体から 89 口の柱穴が検出され、P86 から灰釉卸し皿 (第 29 図 5)、P44 から志野の丸皿 (第 29 図 11)、P17 から炭化物が付着した礫 (第 29 図 23) が出土している。

第 51 次調査 (第 19・25~27 図)

(1) 縄文時代の遺構

R D 037 土坑 (第 26・27 図)

本丸北西部、東西トレンチ中央、S I 513 竪穴建物跡東側に位置し、II a 層直下で検出されている。平面形は長楕円形と思われるが全体規模は不明である。上幅 0.9 m、下幅 0.1 m、深さ 1.2 m をはかる。主軸方向は N 40°W で、埋土は自然堆積で 2 層に大別される、A 層は黒色土主



第24図 第60次調査区遺構図

体で粒～塊状褐色土を少量含み、B層は黒褐色土主体で、塊状褐色土を多量に含む。底面はやや起伏があり、壁は外傾しながら立ち上がる。

(2) 中近世の遺構

S I 512 竪穴建物跡 (第 26・27 図)

規 模

本丸北西部、東西トレンチ西部に位置し、表土直下で検出されている。部分的な検出のため全体規模は不明であるが、東西 4.15 m、壁高 0.35 m をはかる。床面はほぼ平坦で、東壁際に幅 0.25 m、深さ 0.1 m の周溝が検出されている。柱穴は 5 口検出されている。埋土は 3 層に大別される。A 層は黒褐色土主体で塊状褐色土を多量に含み、B 層は黒褐色土主体で粒～塊状褐色土を多量に含む。壁は外傾しながら立ち上がる。

S I 513 竪穴建物跡 (第 26・27 図)

規 模

本丸北西部、東西トレンチ西部に位置し、表土直下で検出されている。部分的な検出のため全体規模は不明であるが、東西 3.8 m、壁高 0.4 m をはかる。床面はほぼ平坦で、柱穴が 3 口検出されている。壁は外傾しながら立ち上がる。埋土は自然堆積で、粒～塊状褐色土を少量含む暗褐色土である。出土遺物はなし。

S I 514 竪穴建物跡 (第 19・27 図)

規 模

本丸北西部、東西トレンチ中央に位置し、表土直下で検出されている。部分的な検出のため全体規模は不明であるが、東西 4.9 m、壁高 0.2～0.3 m をはかる。埋土は自然堆積で粒～塊状褐色土を少量含む黒褐色土主体である。床面は平坦で、構築土が認められる。構築土は黒色土主体で塊状褐色土を多量に含む。柱穴は 4 口検出されている。壁は外傾しながら立ち上がる。出土遺物はない。

S D 500 堀跡 (第 26 図)

本丸北西部、東西トレンチ西端に位置する。表土直下で堀の東端を検出したのみで全体規模は不明であるが、上幅 1.2 m 以上、深さ 0.5 m 以上をはかる。主軸方向は N 20°W を示す。壁は外傾しながら立ち上がり、出土遺物はない。

S K 504 土坑 (第 19・27 図)

本丸北西部東西トレンチ中央に位置し、表土直下で検出した。全体規模は不明であるが楕円形と思われる。規模は最大幅 1.3 m、深さ 0.4 m をはかる。底面はやや起伏があり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色土主体で粒状褐色土を多量に含む。出土遺物はない。

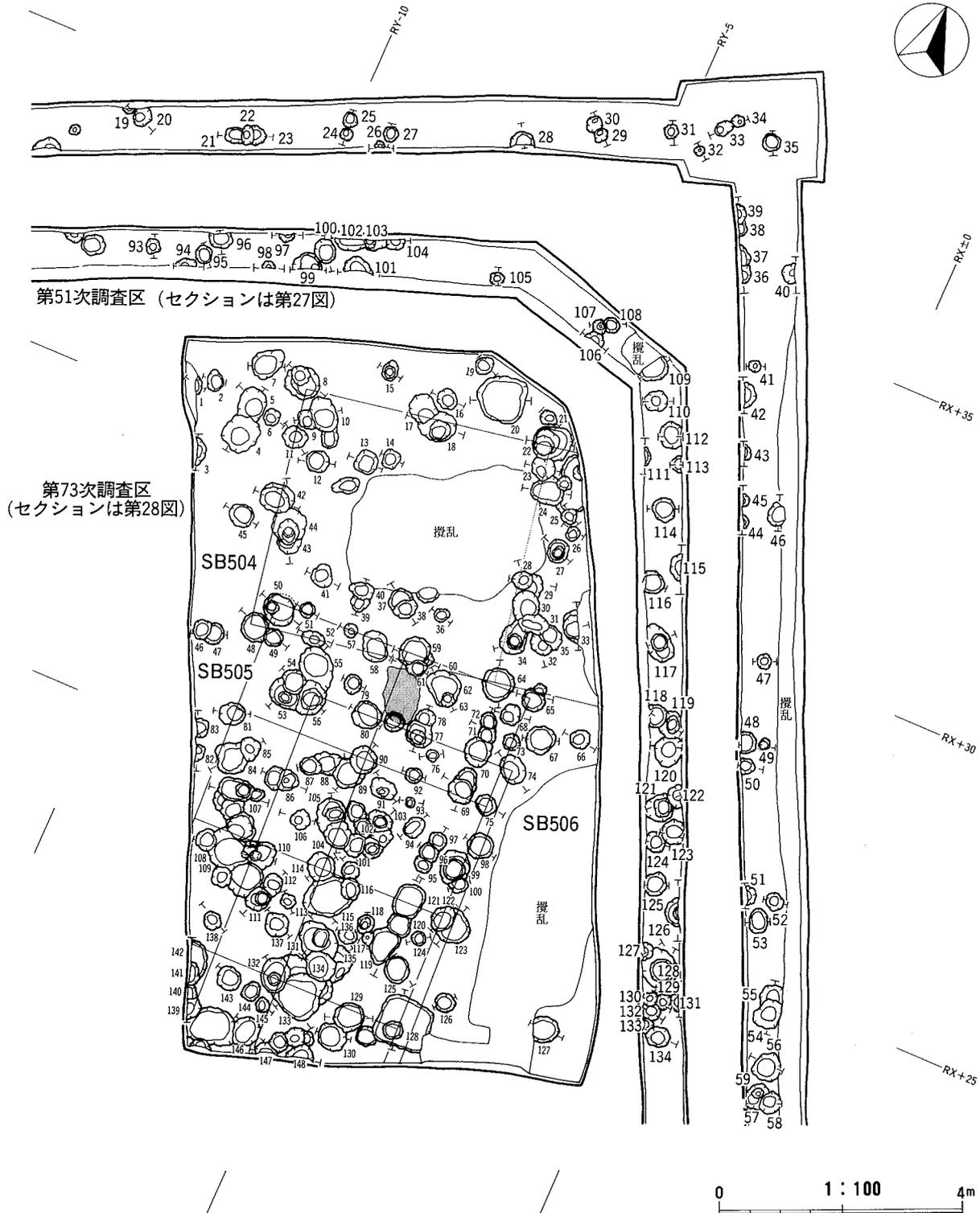
S K 505 土坑 (第 26・27 図)

本丸中央部、南北トレンチ南半部に位置し、P155 を切っている。径 1.9 m、深さ 0.3 m をはかる円形と思われるが調査区外にのびるため全体形は不明。底面はやや起伏があり、壁は緩

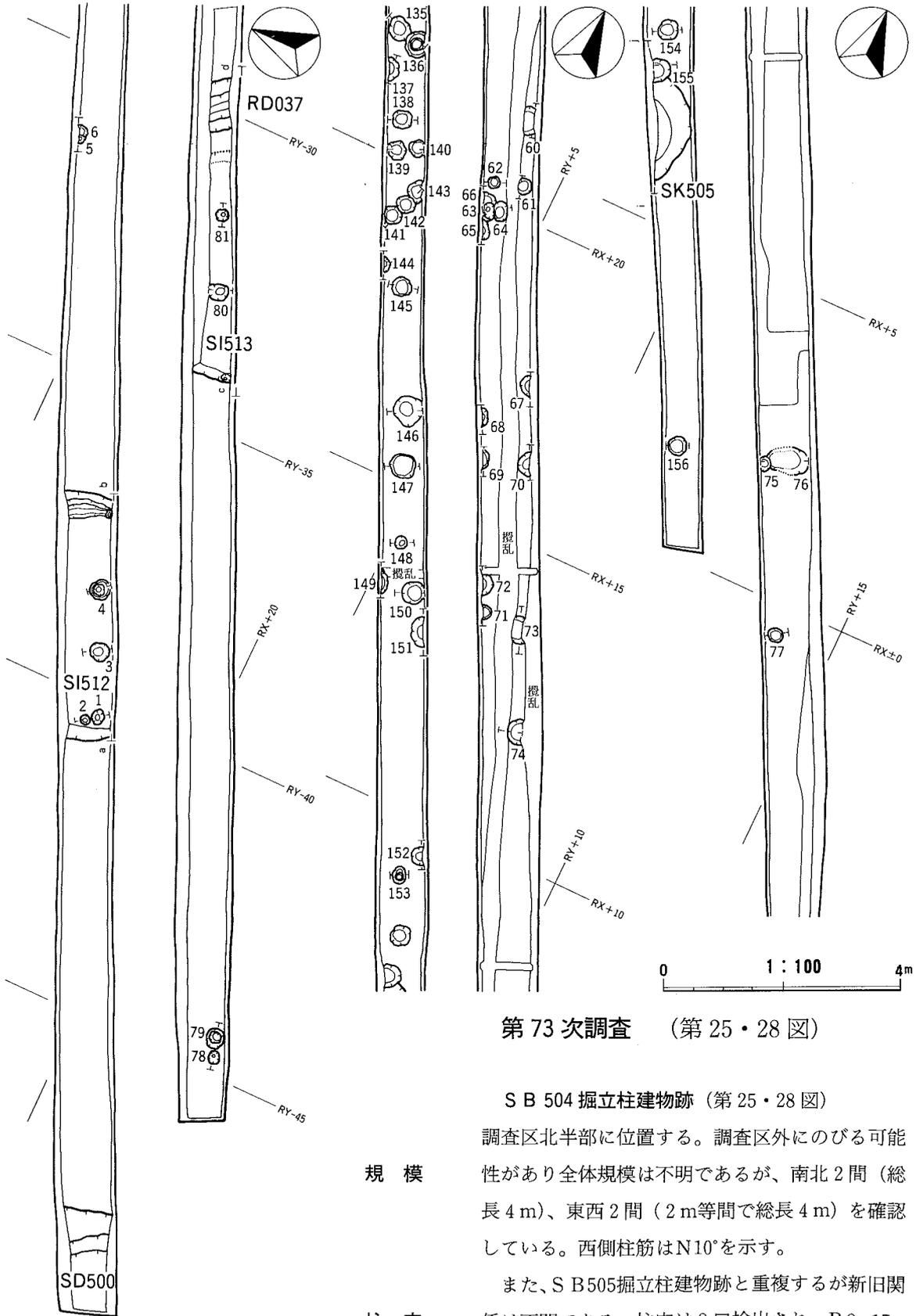
やかに立ち上がる。埋土は2層に大別され、A層は黒褐色土主体で、粒状褐色土を少量含み、
B層は黒褐色土主体で粒～塊状褐色土を少量含む。出土遺物はない。

なお、調査区全体から150口の柱穴が検出されている。

柱穴群



第25図 第51次・第73次調査区遺構図



第26図 第51次調査区遺構図

第73次調査 (第25・28図)

S B 504 掘立柱建物跡 (第25・28図)

調査区北半部に位置する。調査区外にのびる可能性があり全体規模は不明であるが、南北2間（総長4m）、東西2間（2m等間で総長4m）を確認している。西側柱筋はN10°を示す。

また、S B 505掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。柱穴は8口検出され、P 8・17・22・28・42・48・58・64で構成される。規模は径0.5～0.6m、深さ0.35～0.5mのものが多く、

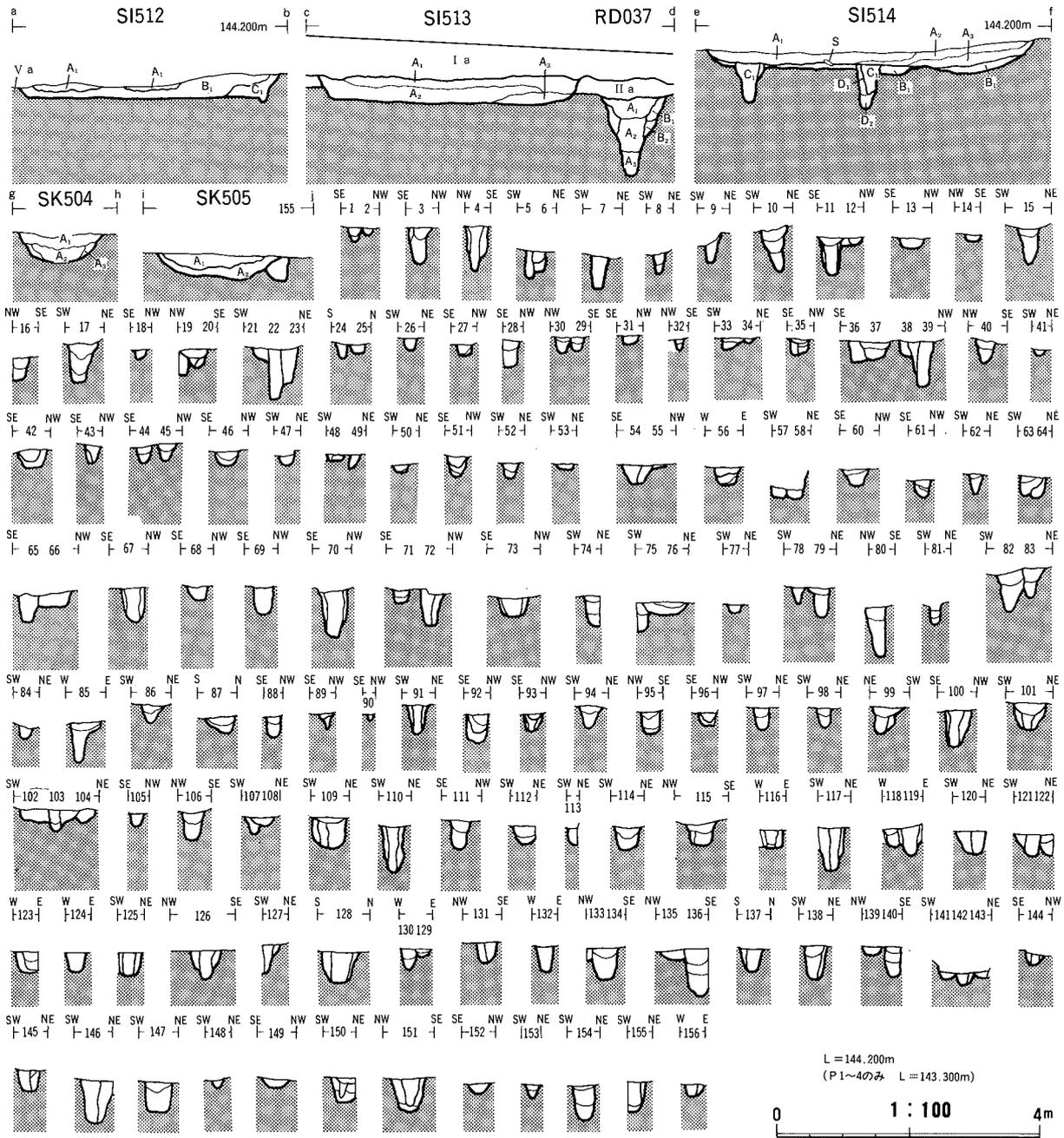
規模

柱穴

P 28・42・48 の 3 口は比較的浅い。P 17 を除くすべての柱穴に柱痕跡が認められ、柱痕跡は黒褐色土主体、掘方埋土は暗褐色土と褐色土の混合土である。出土遺物はない。

S B 505 掘立柱建物跡 (第 25・28 図)

調査区南半部に位置する。調査区外にのびる可能性があり全体規模は不明であるが、南北 3 間(1.94 m 等間で総長 5.82 m)、東西 2 間(総長 4.5 m)を確認し棟方向は N 3°W を示す。P 50・規模 59・65・75・81・90・114・122・128・132 の 10 口で構成される。規模は径 0.35~0.55 m で、



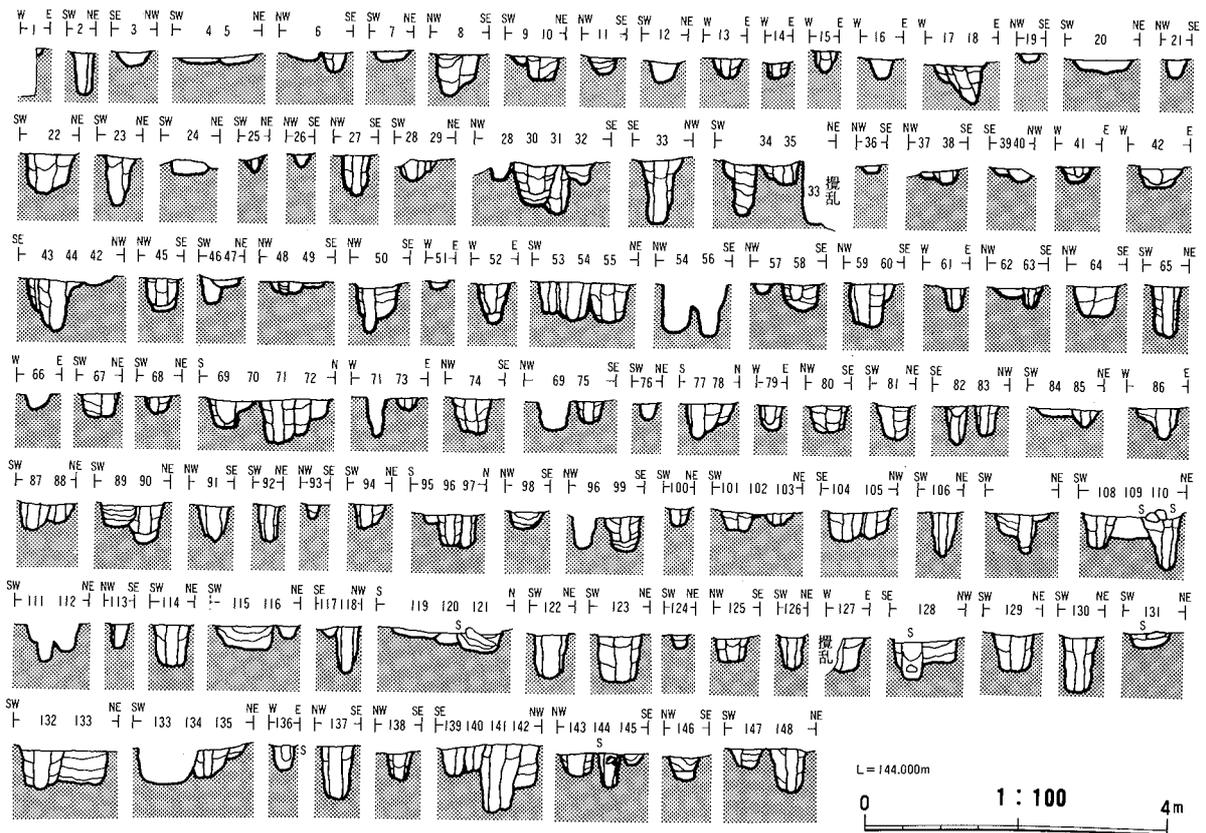
第27図 第51次調査区遺構土層断面

深さ 0.45~0.6 m のものが多く、P 75 のみ浅く径が小さい。すべての柱穴に柱痕跡が認められ、柱痕跡は黒褐色土主体で、堀方埋土は粒~塊状暗褐色土を少量含む褐色土である。S B 504・506 掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。P 122 堀方から中国白磁皿（第 29 図 14）の破片が 1 点出土している。

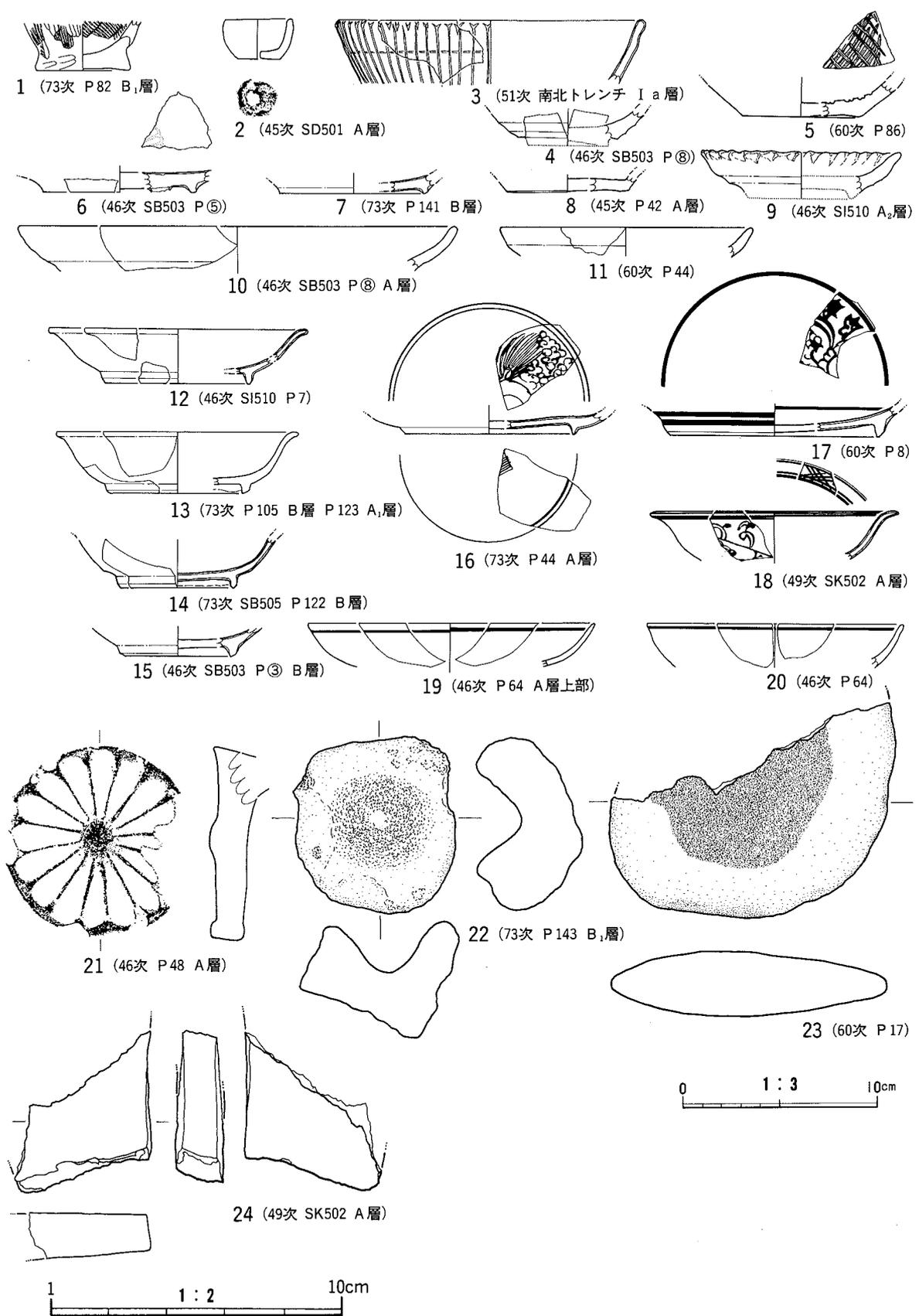
S B 506 掘立柱建物跡（第 25・28 図）

調査区南半部に位置する。調査区外にのびる可能性があり全体規模は不明であるが、南北 2 間（総長 5.5 m）、東西 2 間（総長 3.4 m）を確認し、棟方向は N 3°W を示す。P 56・74・77・110・123・139 の 6 口で構成される。規模は径 0.4~0.58 m、深さ 0.4~0.7 m である。P 56 を除くすべての柱穴に柱痕跡が認められ、柱痕跡は暗褐色土主体、堀方埋土は粒~塊状褐色土を多量に含む暗褐色土である。S B 505 掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。P 123 柱痕跡から中国産白磁皿（第 29 図 13）が出土し、これと同個体の破片が P 105 から出土している。

なお、建物に属する柱穴の他に 124 口の柱穴が検出されており、P 44 から中国明の染付皿（第 29 図 16）が出土し、P 82 堀方から土師器甕の底部（第 29 図 1）、P 141 堀方から灰釉皿（第 29 図 7）、P 143 堀方から搗臼（第 29 図 22）が出土している。



第28図 第73次調査区遺構土層断面



第29図 本丸跡出土遺物(1)

本丸の出土遺物 (第29・30図)

土器

第29図1は土師器の甕の底部で、底部中心は丸く窪み、外面は底部から体部にかけて強く屈曲する器形である。外面はハケメ調整の後ヘラミガキが施され、内面はハケメが施される。

第29図2は素焼きの小坏で、第45次調査S D 501溝跡埋土より出土した。底部は回転糸切り無調整であるが、中心に穿孔が認められる。時期不詳である。

国産陶器

第29図3は瀬戸・美濃大窯I期の灰釉碗である。口唇部直下から体部にかけて、簡略化された蓮弁文が篋描きで表現されている。4は鉄釉天目茶碗の底部である。瀬戸・美濃大窯II期の製品で、内面は黒色の鉄釉、体部下半は露胎で篋削りされ、鉄錆化粧である。5は窖窯IV期の灰釉鉢で、破片部分は無釉である。6は大窯I期の灰釉丸皿で、底部見込みに菊花の押印があり、底部は付高台で輪トチンの痕跡がある。7は大窯期の灰釉皿底部で被熱が著しい。8は鉄釉稜皿の底部で大窯II期の製品である。9は灰釉襷皿で、大窯III～V期の製品である。10は大窯III～V期の鉄釉大皿口縁部の破片である。胎土は暗い赤褐色に焼かれている。11は志野の丸皿で、大窯V期の製品である。

中国陶磁器

12～15は中国明白磁の皿である。12・13は口縁部が端反りで、12・14は高台の下端を内外から回転へら削り、13・15端外側から斜めに回転へら削りしている。16～20は中国明の染付皿である。16は見込みの界線雲竜文、17は花唐草文もしくは芙蓉文である。16・17ともに高台下端は内外とも回転へら削りしている。18は端反りの染付皿で口縁部内面に格子目文、体部外面に唐草文が描かれる。小野分類のB2群に相当する。19・20は口縁部が内湾する染付皿(E群)であり、口縁部内外に一条の界線がある。

瓦

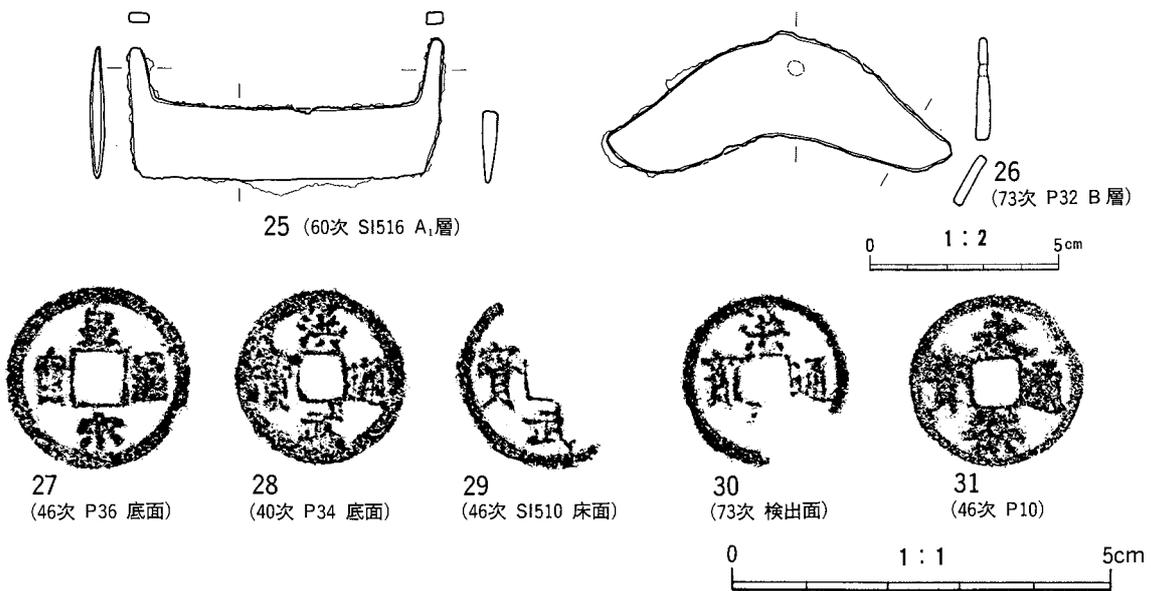
21は小形の丸瓦で、近世以後の燻瓦である。

石器・石製品

22は火山岩を使用した搗臼である。23は扁平な礫の中央部が焦げ炭化物が付着し、明かり取り等に使用されたと思われる。24は砥石の破片で、割れた面にも摩擦痕が認められる。

鉄製品・銭貨

25は芋引金、26は火打金である。27は皇宋通寶、28～30は洪武通寶、31は永楽通寶である。



第30図 本丸跡出土遺物(2)

4. 中館の調査

中館は昭和63年度から平成6年度まで第29・30・31・52次の4件の調査が実施されている。第29次調査は、第23次調査区の東側で中館中央部にあたる部分を住宅建築に伴って調査したもので、両調査区にまたがる中近世の掘立柱建物跡のほか多数の柱穴が検出されている。その北側では第31次調査のトレンチが中館中央を東西に横断するが、柱穴が集中するのはこの付近だけである。調査区西端部では中館西辺を画する堀(S D 600)の一部が検出されている。第30次調査は公民館改築に伴うもので、中館南東縁辺部に位置し時期不詳の竪穴建物跡・土坑・ピット群などが検出されている。第52次調査は住宅新築に伴い中館南西部を調査したもので中世の竪穴建物跡が検出されているが、隣接する第11次調査区でも竪穴建物跡が検出されている。

第29次調査 (第32・33図)

S B 615 掘立柱建物跡 (第32・33図)

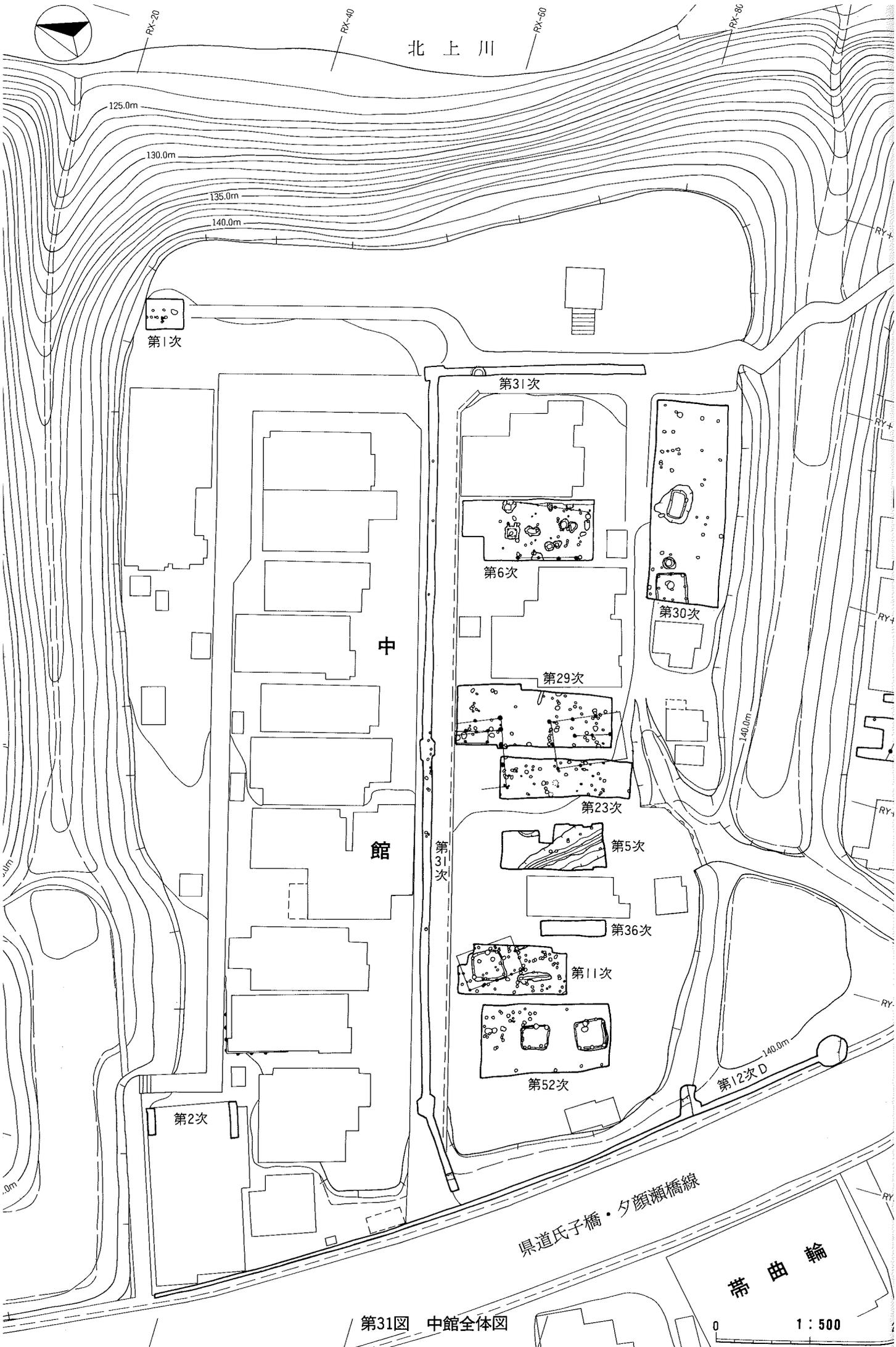
調査区北西部に位置する。調査区北西方向にのびるため、全体の規模・構造は不明であるが、規模南北1間(2.4m)、東西1間(1.2m)を確認している。棟方向はN 15°Wを示す。S B 616 建物跡と重複するが新旧は不明である。検出面は表土直下の地山面である。柱穴はP1~4の4口確認され、径0.3m内外、深さ0.2~0.28mと小型で、埋土は軟らかい黒色土主体で柱痕跡は認められない。出土遺物はない。

S B 616 掘立柱建物跡 (第32・33図)

29次調査区調査区北西部から23次調査区北端にまたがって位置し、調査区外北方向にのびる可能性があり全体規模は不明であるが、母屋桁行1間(総長2.7m)以上、梁間3間(総長5.75m)の二面庇建物で庇部分は桁行1間2.7mで母屋と対応し、妻側が1.2mである。N 20°を示す南北棟である。第23次調査区P3・6・12と第29次調査区P5・6・7・8・37の8口で構成され、径は0.3~0.4mが多く、深さは母屋部分が0.65m前後、庇部分が0.2~0.3mと浅くなっている。柱痕跡が認められるものはP5・6・37で、柱痕跡はやや軟質の黒褐色土主体、掘方埋土は暗褐色土と黄褐色土の混合土である。S B 615 掘立柱建物跡と重複するが新旧は不明である。出土遺物はない。

S B 617 掘立柱建物跡 (第32・33図)

第29次調査区南西部から第23次調査区南東部にまたがって位置する。調査区外南方向へのびる可能性があり全体規模は不明であるが、南北2間(総長5m)、東西2間(総長5.8m)である。東西の柱筋は2.5m等間に対応するが、南北は対応しない。西側柱筋はN 23°を示している。第29次調査P9・10・11・12・13・67と第23次調査区のP37・45・65・66の合計10口のピットにより構成され、径0.3~0.4mで、深さ0.28~0.48mである。第23次調査区P37と第29次調査区P11のみ柱痕跡が認められ、柱痕跡はやや軟質の黒褐色土、掘方埋土は黄褐色土と暗褐色土の混合土でその他の柱穴埋土は主に粒状の黄褐色土を含む黒褐色土主体である。出土



北上川

第1次

第31次

第6次

第30次

第29次

第23次

第5次

第36次

第11次

第52次

第12次D

中

館

第31次

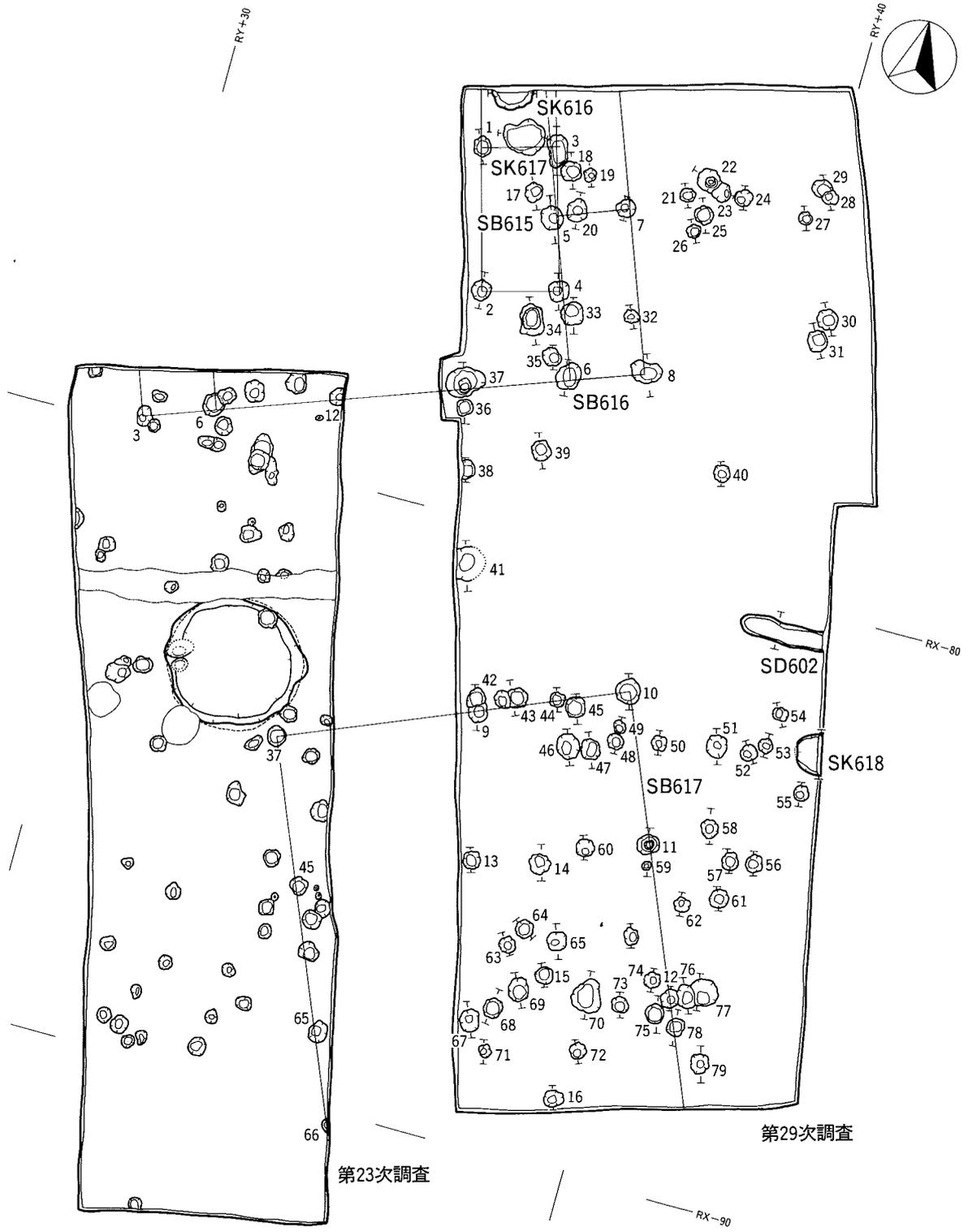
第2次

県道氏子橋・夕顔瀬橋線

帯曲輪

第31図 中館全体図

1:500



第32図 第23次・第29次調査区全体図

遺物はない。

S K 616 土坑 (第 32・33 図)

調査区北西端に位置し、表土直下で検出した。部分的な検出のため平面形は不明である最大径 0.65 m、深さ 0.32 m をはかる。底面はやや起伏があり、壁はほぼ直壁に立ち上がる。埋土は自然堆積で 2 層に大別され、A 層は硬くしまり黒褐色土主体で粒状褐色土を少量含み、B 層はやややわらかく暗褐色土主体で粒状褐色土とスコリアを多量に含む。出土遺物はない。

S K 617 土坑 (第 32・33 図)

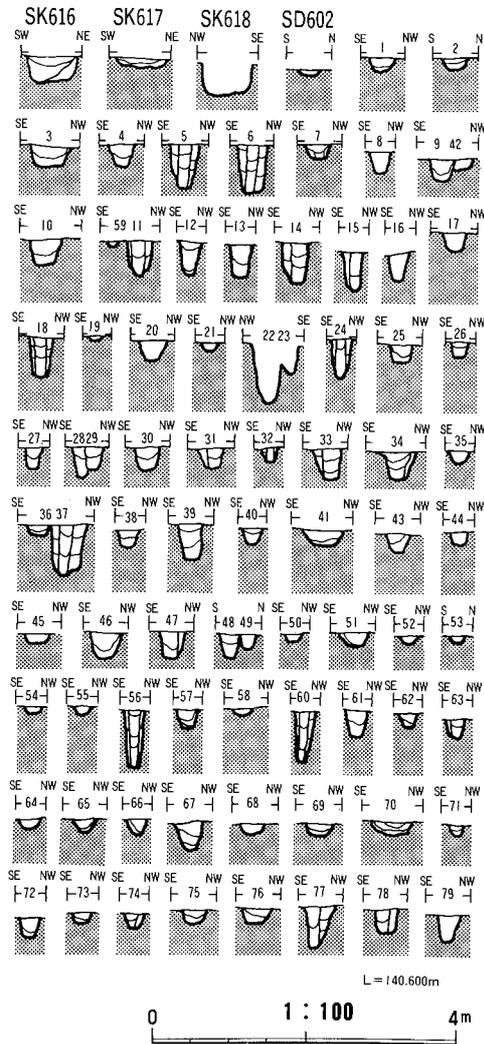
調査区北西端に位置し、表土直下で検出した。不整円形を呈し、長軸 0.68 m、短軸 0.43 m、深さ 0.12 m をはかる。長軸方向は N 69° を示す。底面は起伏があり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は自然堆積で黒褐色土主体で黄褐色土を少量含んでいる。出土遺物はない。

S K 618 土坑 (第 32・33 図)

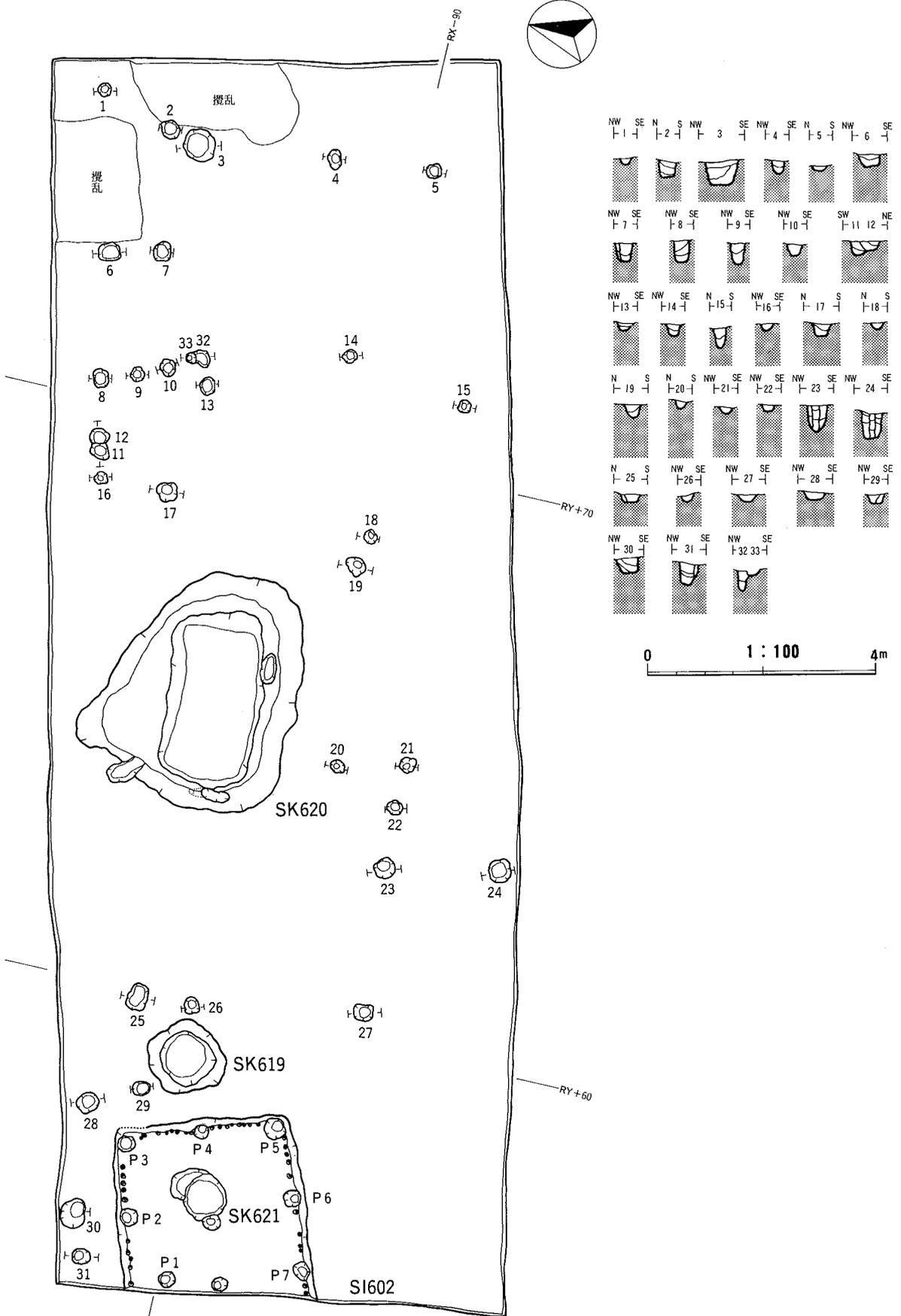
調査区東端に位置し、表土直下で検出した。西端のみの検出であるため全体規模は不明であるが、最大径 0.65 m、深さ 0.42 m をはかる。底面は平坦で壁はほぼ直壁に立ち上がる。埋土は自然堆積で、A・B の 2 層に大別される。A 層は黒褐色土主体で粒状黄褐色土とスコリアを少量含み、B 層は黒褐色土主体で粒～塊状褐色土を少量含んでいる。出土遺物はない。

S D 602 溝跡 (第 32・33 図)

調査区東端に位置する。東側調査区外にのびるため全体規模は不明であるが、長さ 1.35 m 以上、幅 0.32 m、深さ 0.08 m をはかる。底面はほぼ平坦で壁は緩やかに立ち上がる。主軸方向はほぼ東西を示し、埋土は暗褐色土主体で粒状褐色土を少量含む。出土遺物はない。



第33図 第29次調査区土層断面



第34図 第30次調査区全体図

第30次調査 (第34・35図)

S I 602 竪穴建物跡 (第34・35図)

規模

調査区西端に位置し、表土直下で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸3.30 m以上、短軸3.30 m、深さ0.38 mをはかる。棟方向はN 71°を示し、P10・P11を切る。竪穴建物の埋土は不明である。壁は外傾しながら立ち上がり、壁際には小ピットが多数検出した。床面は平坦で、柱穴が9口確認され支柱穴はP2～9である。支柱穴の規模は径0.28～0.35 m、深さは0.6～0.75 mでしっかりしている。柱痕跡はP2・3・5・7・8・9に認められ暗褐色土主体で、掘方埋土は粒状～塊状黄褐色土を含む暗褐色土である。出土遺物はない。

支柱穴

S K 619 土坑 (第34・35図)

調査区北西部に位置し、表土直下で検出した。不整形円形を呈し、最大径1.40 m、深さ0.9 mをはかる。底面はほぼ平坦で直壁ぎみに立ち上がる。埋土はA・B・Cの3層に大別される。A層は暗褐色土主体、B層は黒褐色土主体、C層は黒褐色土を多量に含む黄褐色土である。出土遺物はない。

S K 620 土坑 (第34・35図)

調査区中央部に位置し、表土直下で検出した。上端は楕円形、下端は隅丸方形を呈する。上端は長軸4.16 m・短軸3.60 m、下端は長軸3.1 m・短軸1.65 m、最深部1.10 mをはかる。底面はほぼ平坦で直壁ぎみに立ち上がり、主軸方向はN 84°Eを示す。出土遺物はない。

S K 621 土坑 (第34・35図)

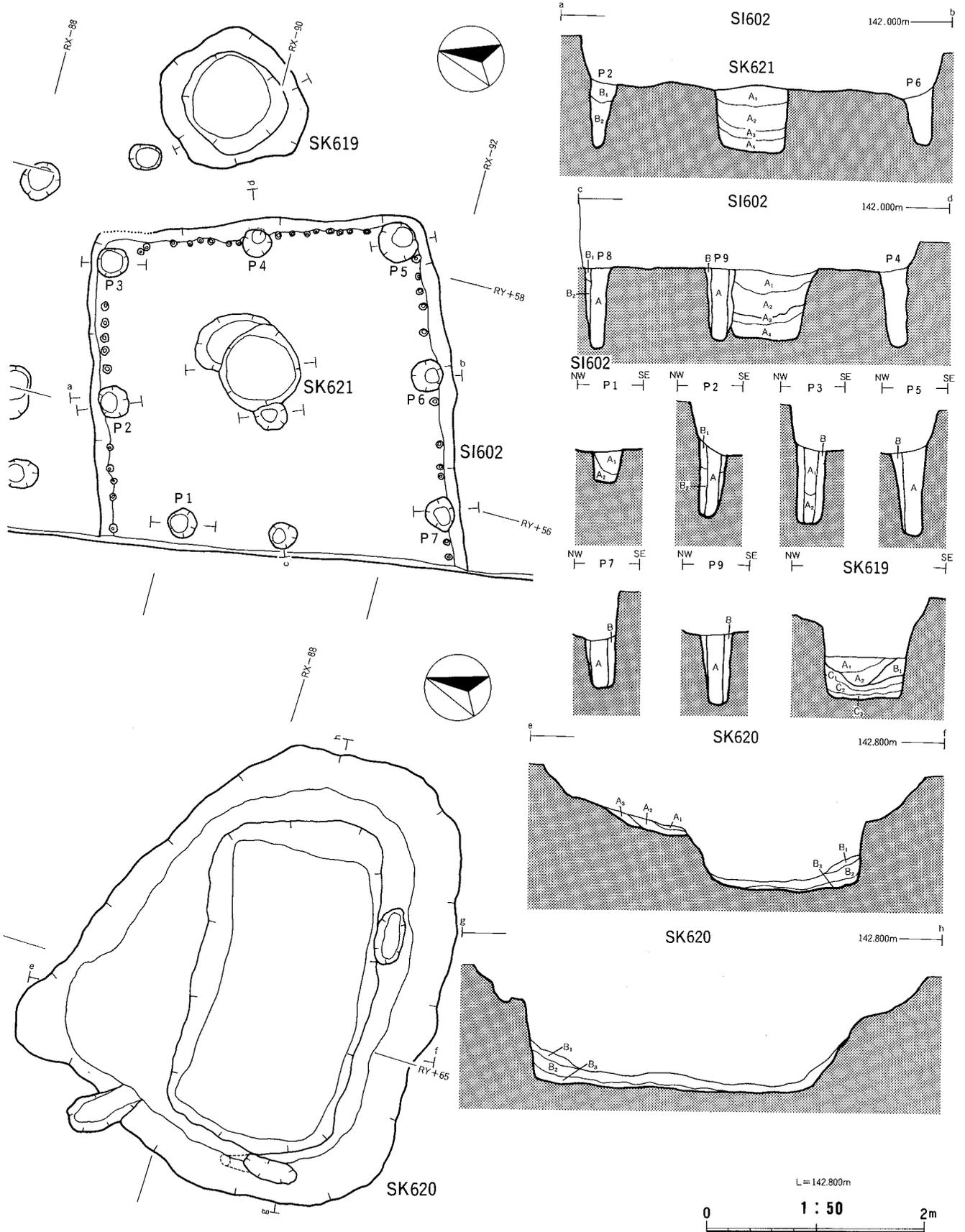
調査区西半部に位置する。S I 602 竪穴建物跡床面で検出し、S I 602 竪穴建物跡に切られる。不整形円形を呈し、長軸1.0 m、短軸0.73 m、深さ0.62 mをはかる。底面は平坦で直壁ぎみに立ち上がる。埋土は褐色土を挟んでA・B層に大別される。A層は硬くしまり粒状黄褐色土をごく少量含む黒褐色土、B層は粒状炭化物を多量に含む黒褐色土である。出土遺物はない。

第31次調査 (第36図)

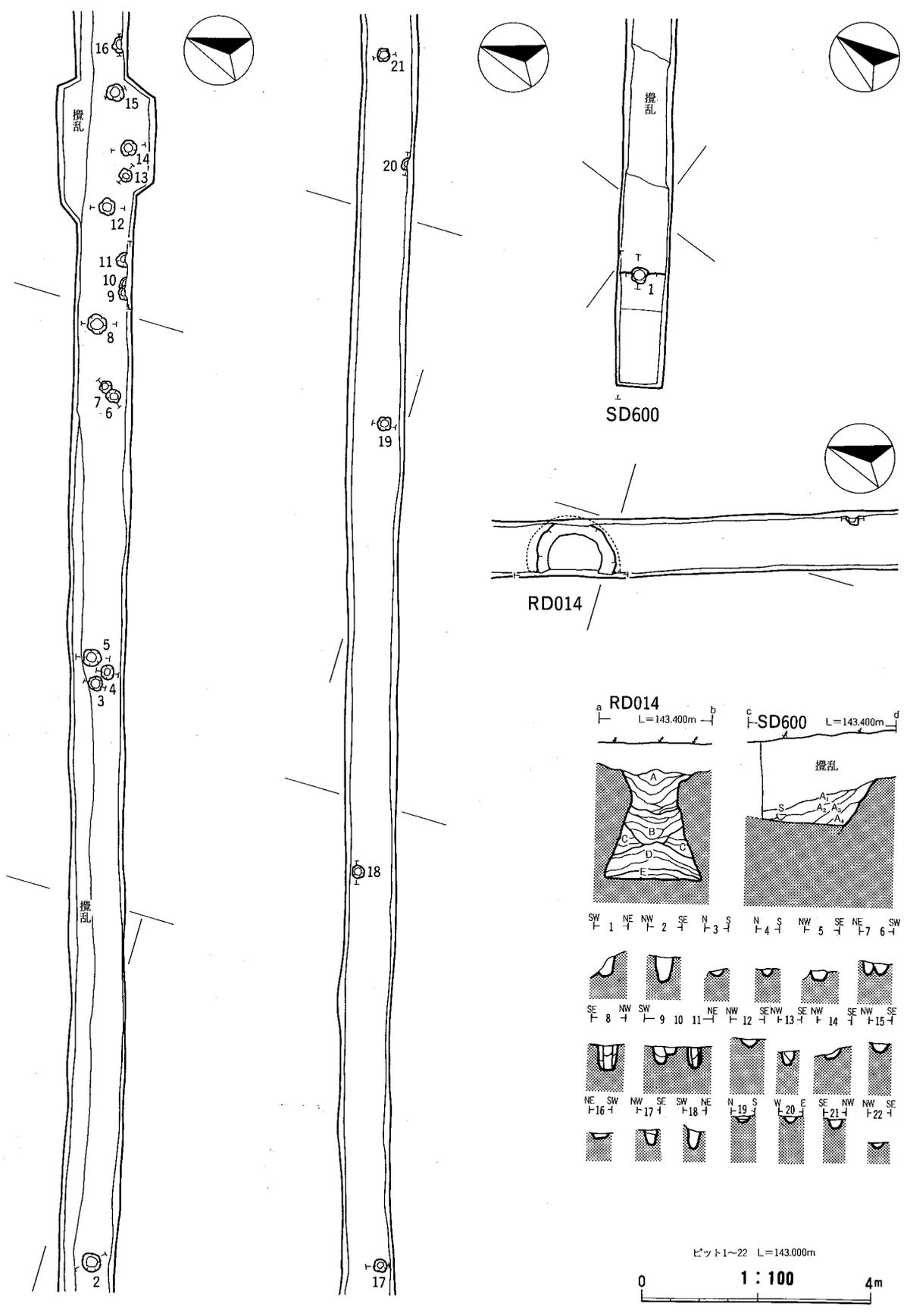
(1) 縄文時代の遺構

R D 014 土坑 (第36図)

南北トレンチに位置し、表土直下の地山面で検出した。ほぼ円形を呈し、上端径1.34 m、底面径1.60 m、深さ1.90 mをはかる。断面プラスチック形で上半部は外傾し、底面は平坦である。埋土は自然堆積でA～Eの5層に大別され、A層は暗褐色土主体、B層は少量の黄褐色土を含む暗褐色土、C層は黄褐色土主体、D層は暗褐色土主体、E層はやわらかい黒褐色土主体である。出土遺物はない。



第35図 SI602竖穴建物跡・SK619~621土坑

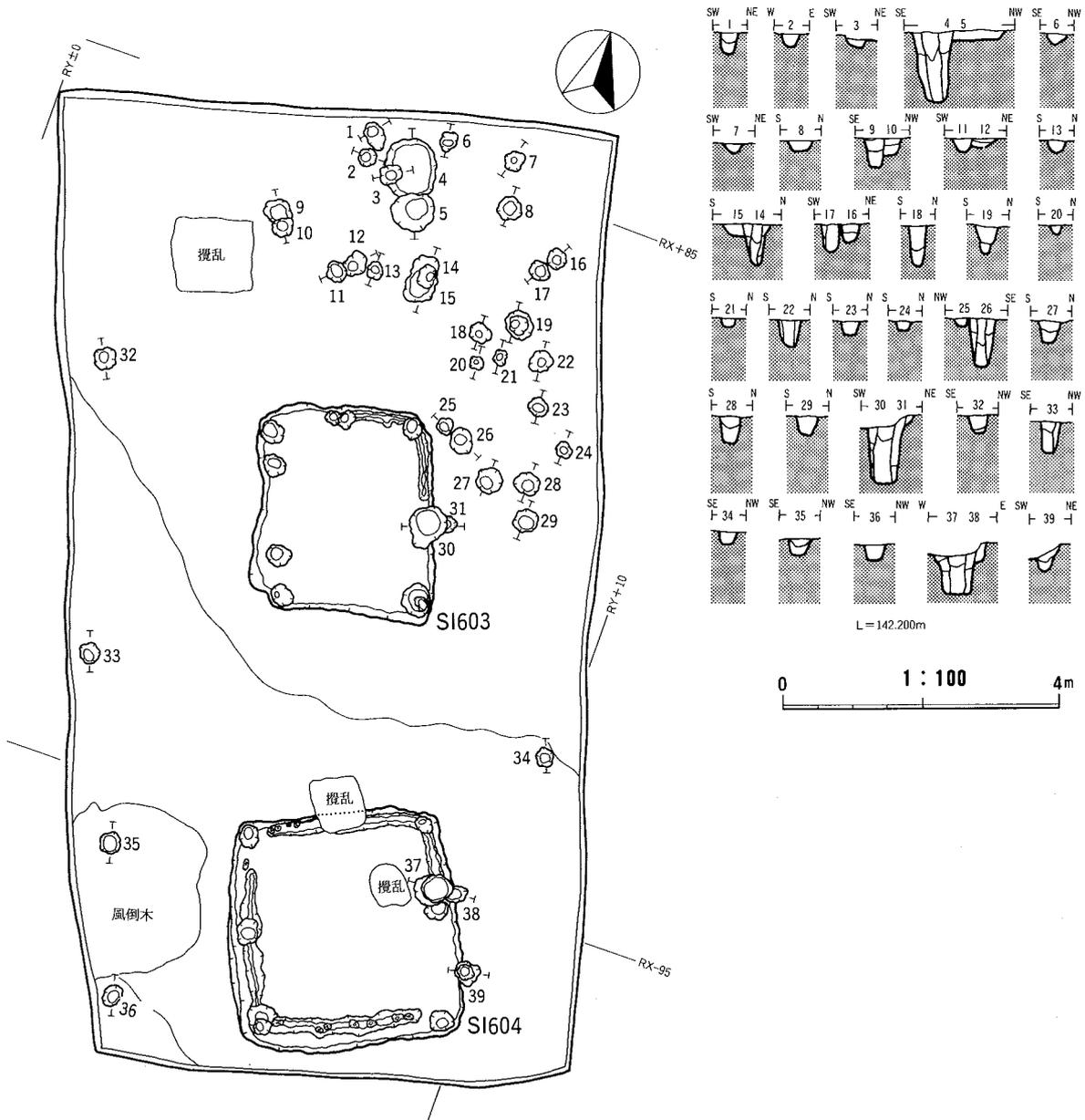


第36図 第31次調査区遺構図

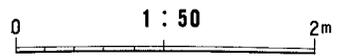
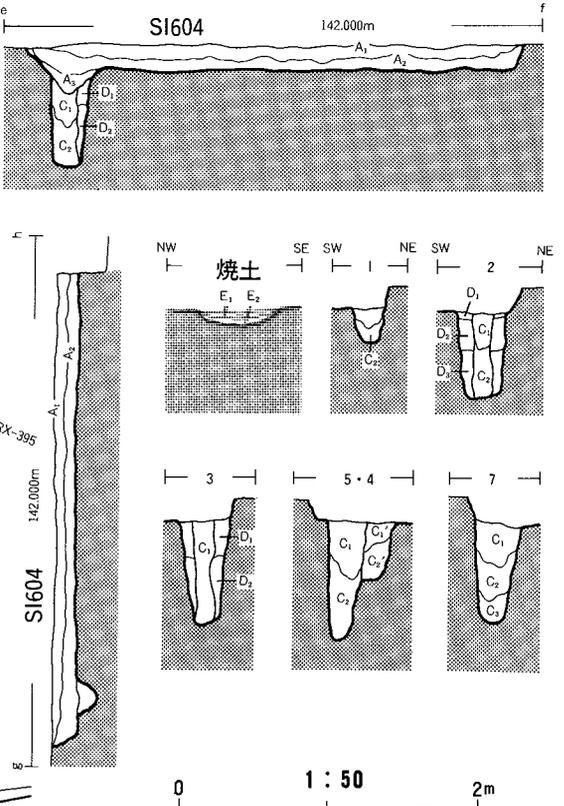
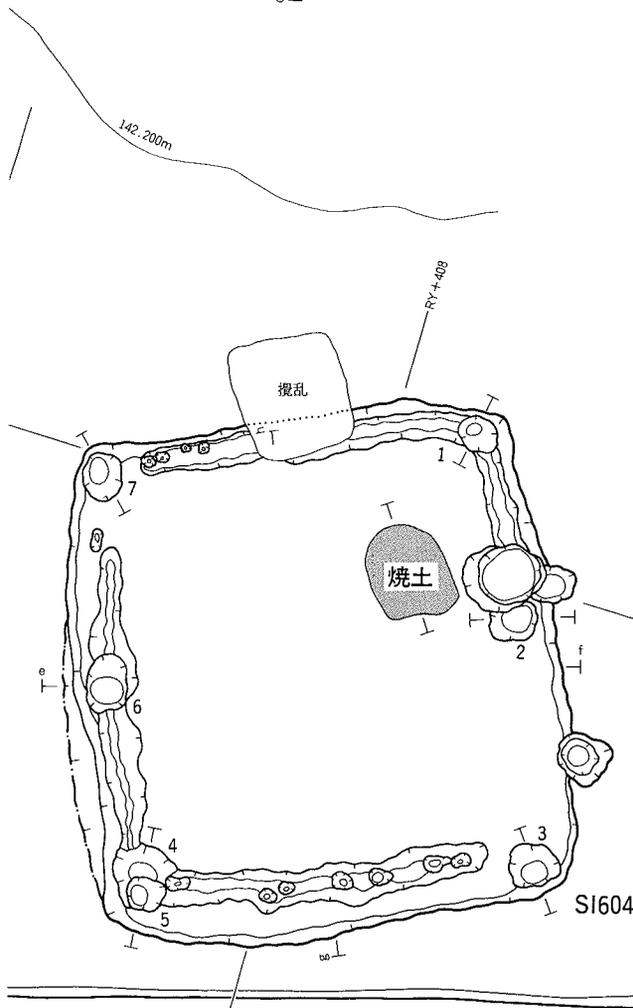
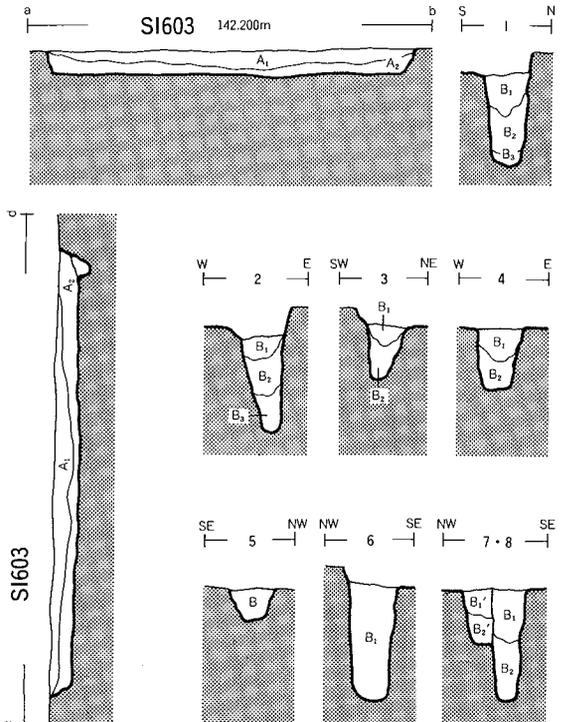
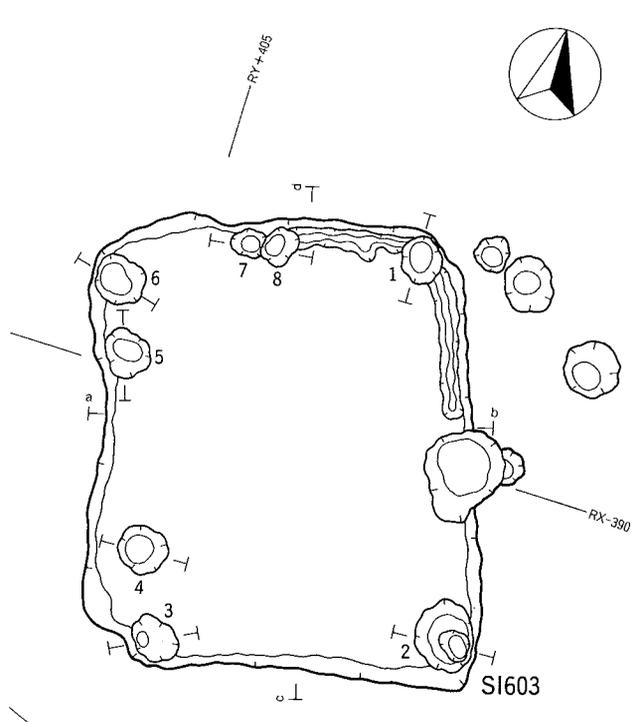
(2) 中近世の遺構

S D 603 溝跡 (第 36 図)

東西トレンチ西端に位置し、盛り土（表土）直下の地山面で検出した。東端のみの検出のため上幅・下幅は不明であるが、深さは0.8m以上をはかる。主軸方向はN 35°を示す。壁は外傾しながら立ち上がり、P1を切る。埋土は自然堆積でA・Bの2層に大別され、A層は黒褐色土主体で少量の黄褐色土を含み、B層は黄褐色土と黒褐色土の塊状混合土である。出土遺物はない。



第37図 第52次調査区全体図



第38図 SI603・604竪穴建物跡

第 52 次調査 (第 37・38 図)

S I 603 竪穴建物跡

調査区北半部に位置し、表土直下の地山面で検出した。隅丸長方形を呈し、長軸 3.0 m、短軸 2.6 m、壁高 0.18 m をはかる。床面は平坦で北東隅壁際だけに周溝が検出され、柱穴は 8 口検出されている。壁は外傾しながら立ち上がる。主軸方向は N 15°W を示し P30 を切る。埋土は暗褐色土主体で粒～塊状褐色土を少量含み自然堆積である。出土遺物はなし。規模

S I 604 竪穴建物跡

調査区南半部に位置し、表土直下の地山面で検出した。隅丸方形を呈し、一辺 3.3 m～4.0 m、壁高 0.16 m をはかる。主軸方向は N 66°E を示し、P37・38・39 を切っている。床面はほぼ平坦で北東隅に焼土が認められ、東壁南半部を除くすべての壁際に周溝が検出されピットが 7 口検出されている。壁は外傾しながら立ち上がり、西側壁は盛りあげ土が認められた。埋土は暗褐色土主体で粒～塊状褐色土を少量含んでいる。出土遺物はない。規模

5. 南館の調査

南館は平成 3 年度から平成 10 年度まで第 43・44・70・72 次の 4 件の調査が実施されている。第 43 次調査は南館中央を東西に横断するトレンチと南館北部中央から帯曲輪まで南北方向に続くトレンチの 2 地点を調査し、南館と帯曲輪を画する上端約 10 m の S D 700 堀跡や縄文時代の土坑が検出されている。第 44 次調査の南館北西部 S D 600 堀跡の南側隣接地では中世の掘立柱建物跡など、南館中央付近の第 70・72 次調査では中近世の柱穴が検出されている。SD 700

第 44 次調査

(1) 縄文時代の遺構

R D 033 土坑 (第 40 図)

調査区南西隅に位置し、表土直下の地山面で検出した。長楕円形を呈し、N 5°E を示す。北半のみの検出であるため全体規模は不明であるが、上幅長軸 1.80 m 以上・短軸 0.8 m、底面幅長軸 1.2 m 以上・短軸 0.2 m、深さ 0.55 m をはかる。底面はほぼ平坦で壁は外傾しながら立ち上がる。埋土は自然堆積で A・B の 2 層に大別され、A 層は暗褐色土主体で粒状褐色土をごく少量含み、B 層は褐色土主体で塊状暗褐色土を多量に含む。出土遺物はない。

(2) 中世の遺構

S B 702 掘立柱建物跡 (第 40 図)

調査区中央に位置する。西側調査区外にのびる可能性があり全体規模は不明であるが、桁行



RX-100

RX-120

RX-140

RX-160

RX-180

北上川

125.0m

130.0m

135.0m

140.0m

第43次

第72次

第18次

第15次

第58次

第70次

第13次

南

館

第18次

第12次

第30次

140.0m

140.0m

第43次

第44次

第12次E

県道氏子橋・夕顔瀬橋線

輪

帯

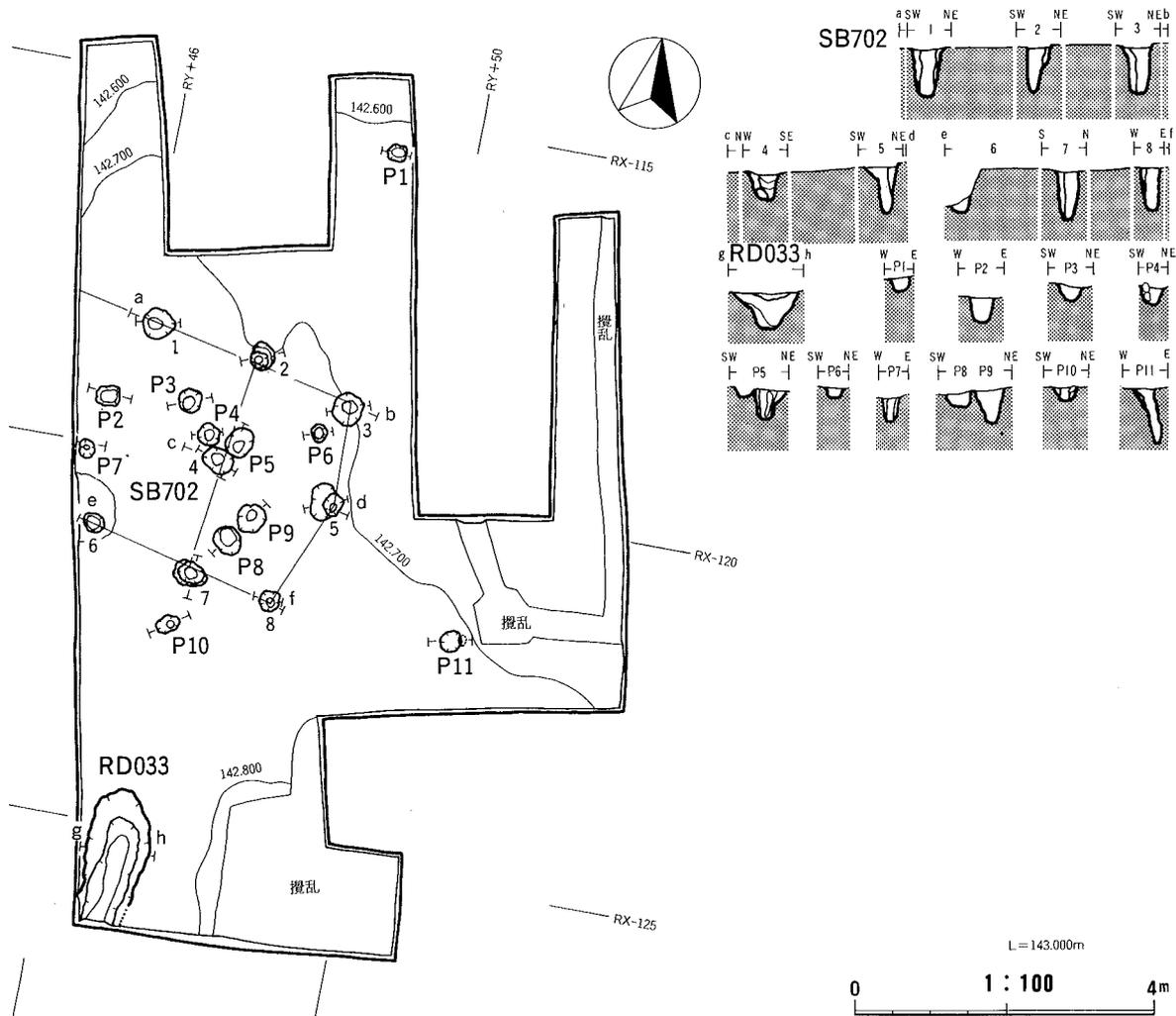
第39図 南館全体図

0 1 : 500 20r

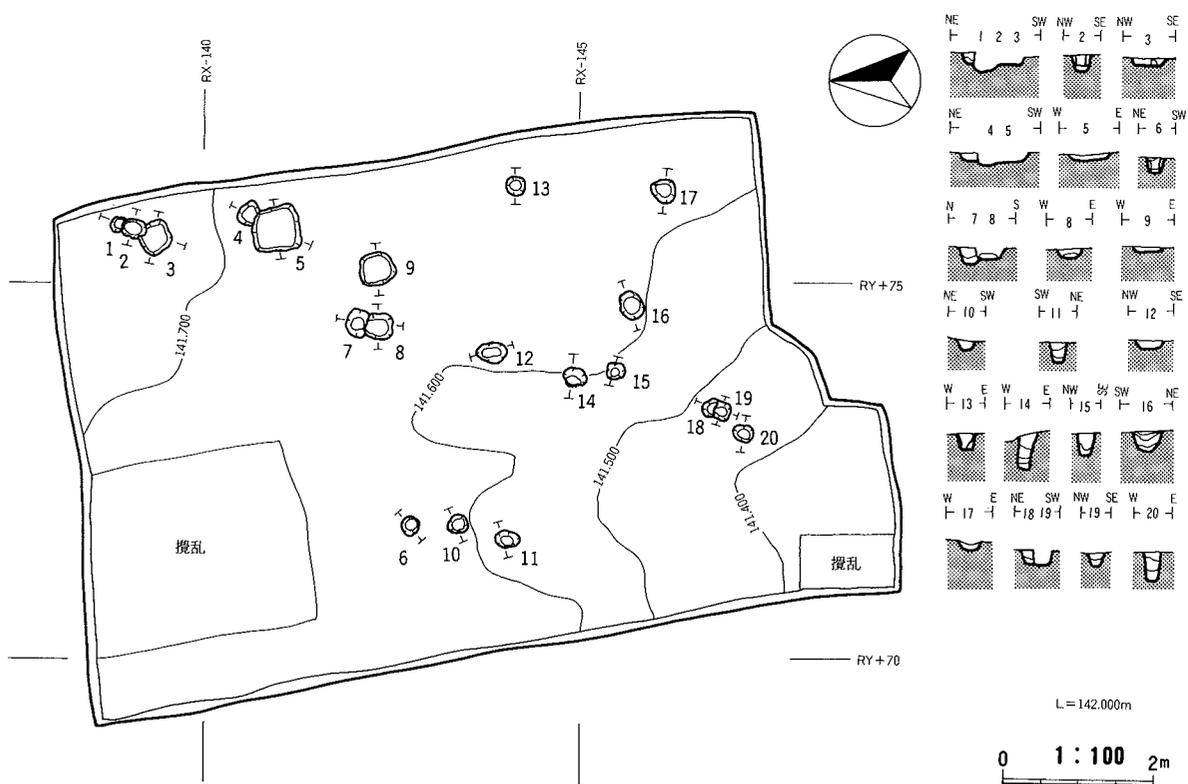
2間(総長2.84 m、1.42 m 等間)、梁間2間(総長1.85 m)の東西棟でW 15°を示す。P1~8の8口で構成され、径は0.3~0.4 m、深さはP4のみが浅く0.35 mで、他はすべて0.6 m前後である。P6を除くすべてに柱痕跡が認められ、埋土は黒色土主体、掘方埋土は粒状黄褐色土をごく少量含む黒褐色土主体である。出土遺物はない。

第70次調査 (第41図)

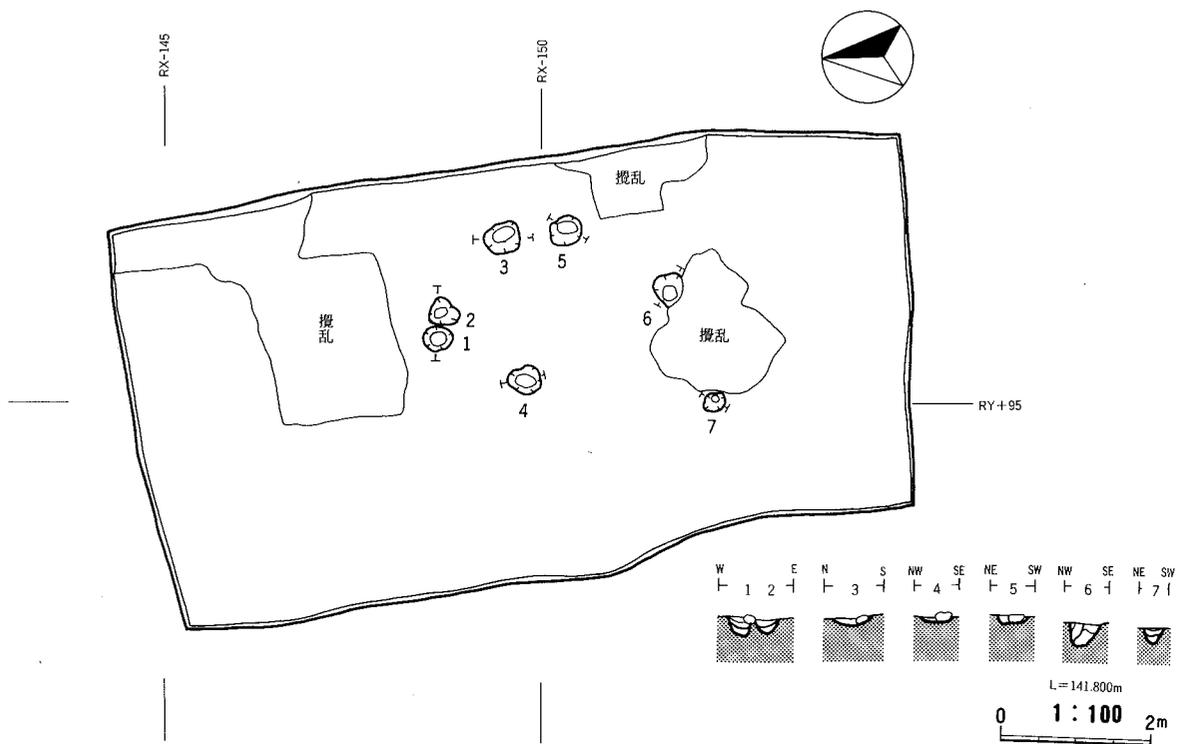
調査区全体に柱穴が20口検出したが不規則に分散し、規模にも規則性はない。柱痕跡の認められる柱穴については、柱痕跡は黒褐色土主体で、掘方埋土は褐色土と暗褐色土の混合土である。図示はしていないが検出面でルツボに転用されたとしい瀬戸・美濃の灰釉丸皿が1点出土している。



第40図 第44次調査区全体図



第41図 第70次調査区全体図



第42図 第72次調査区全体図

第 72 次調査 (第 42 図)

調査区中央部に柱穴が 7 口検出したが、不規則に分散し、規模にも規則性はない。埋土は主に暗褐色土と粒状褐色土の混合土で、P6 のみ柱痕跡が認められる。

6. 帯曲輪の調査

帯曲輪の調査は昭和 63 年度から平成 10 年度まで第 28・35・37・39・43・63・71 次の 7 件の調査を実施した。第 28 次から 39 次までは住宅建築に伴うもので、縄文時代の土坑がそれぞれ 1 基ずつ検出されている。第 63 次調査は污水管敷工事に伴って本丸西側帯曲輪中央付近の調査を実施し、時期不詳の溝跡・土坑・柱穴群が検出されている。第 71 次調査は住宅建築に伴って中館西側帯曲輪中央付近を調査し、中近世の溝・土坑・柱穴が検出されている。

第 63 次調査

S D 811 溝跡 (第 44 図)

北トレンチに位置し、表土(盛土)直下の地山面で検出した。部分的な検出のため、全体規模は不明であるが、上幅 9.25 m 以上、深さ 0.4 m をはかる。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。主軸方向はほぼ真北を示し、S K 807 土坑、S D 812・813 溝跡を切っている。埋土は自然堆積で層相の違いにより A・B・C の 3 層に大別され、A 層は粒状褐色土を少量含む黒色土、B 層は粒状～塊状褐色土を多量に含む黒褐色土 C 層は少量の粒状褐色土とスコリア、鉄分を含む黒褐色土である。出土遺物はない。

S D 812 溝跡 (第 44 図)

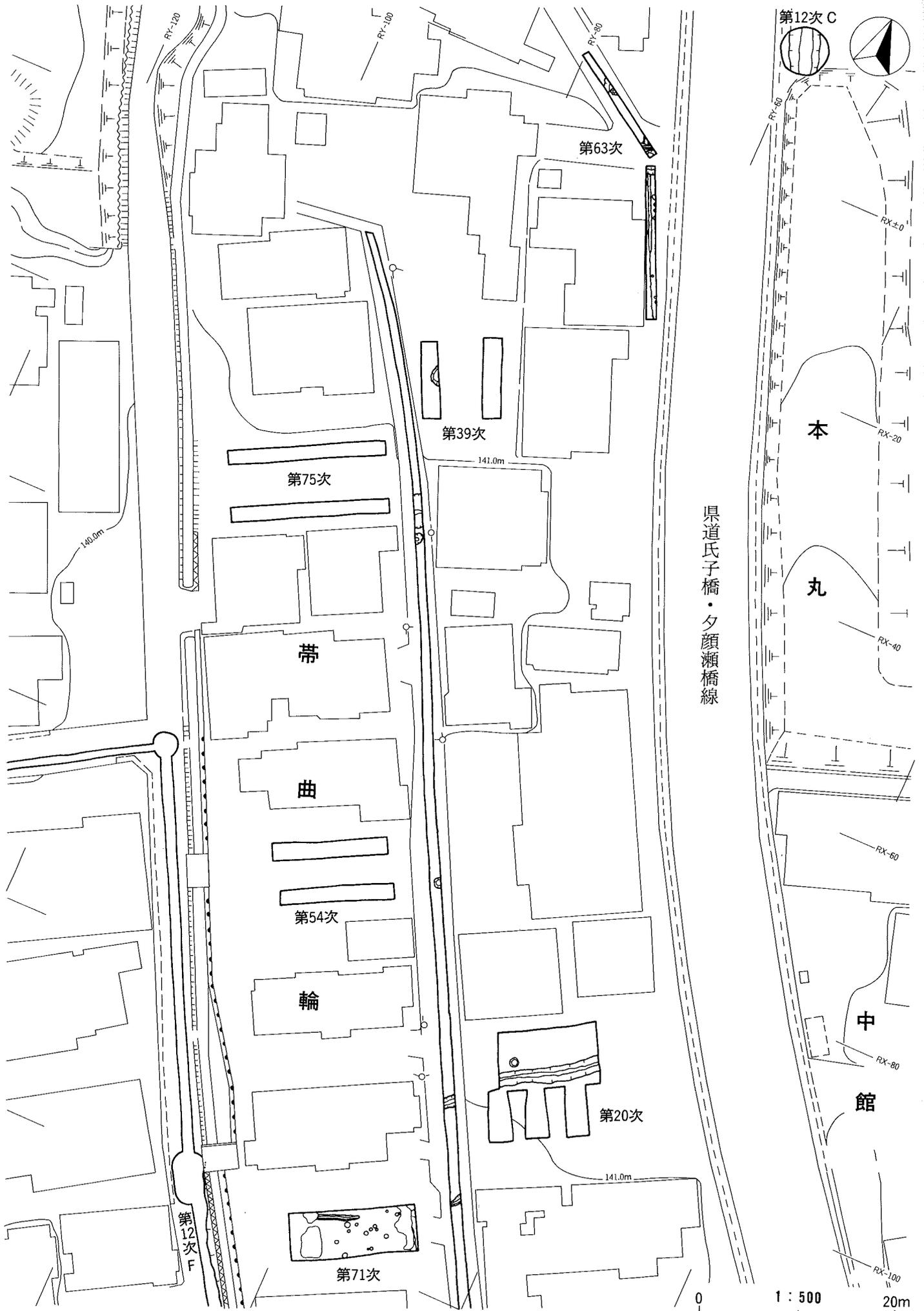
北トレンチ南東端に位置し、S D 811 溝跡底面で検出した。規模は上幅 0.64 m、深さ 0.14 m をはかり、N 18°を示す。S D 811・813 溝跡に切られ、S K 812 土坑を切る。埋土は黒褐色土主体で少量の粒状褐色土を含み、硬く締まる。底面はほぼ平坦で壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物はない。

S D 813 溝跡 (第 44 図)

北トレンチ南東端に位置し、S D 811 溝跡底面で検出した。規模は上幅 1.14 m、深さ 0.34 m をはかり、N 68°E を示す。底面はやや起伏があり、壁は外傾しながら立ち上がる。S D 811 溝跡にきられ、S D 812・813 溝跡を切っている。埋土は黒褐色主体で、粒状褐色土と鉄分を少量含み、硬く締まる。出土遺物はない。

S D 814 溝跡 (第 44 図)

南トレンチ北端に位置し、盛土直下の地山面で検出した。全体規模は不明であるが、上幅 0.86 m 以上、深さ 1.04 m 以上をはかり壁は外傾しながら立ち上がる。主軸方向は W 14°を示し、S



第43図 帯曲輪中央部全体図

D 815 溝跡と重複するが新旧は不明である。埋土は自然堆積で、A層は黒褐色土主体土、B層はスコリアを多量に含む黒褐色土、C層は黒色土主体である。出土遺物はない。

S D 815 溝跡 (第 44 図)

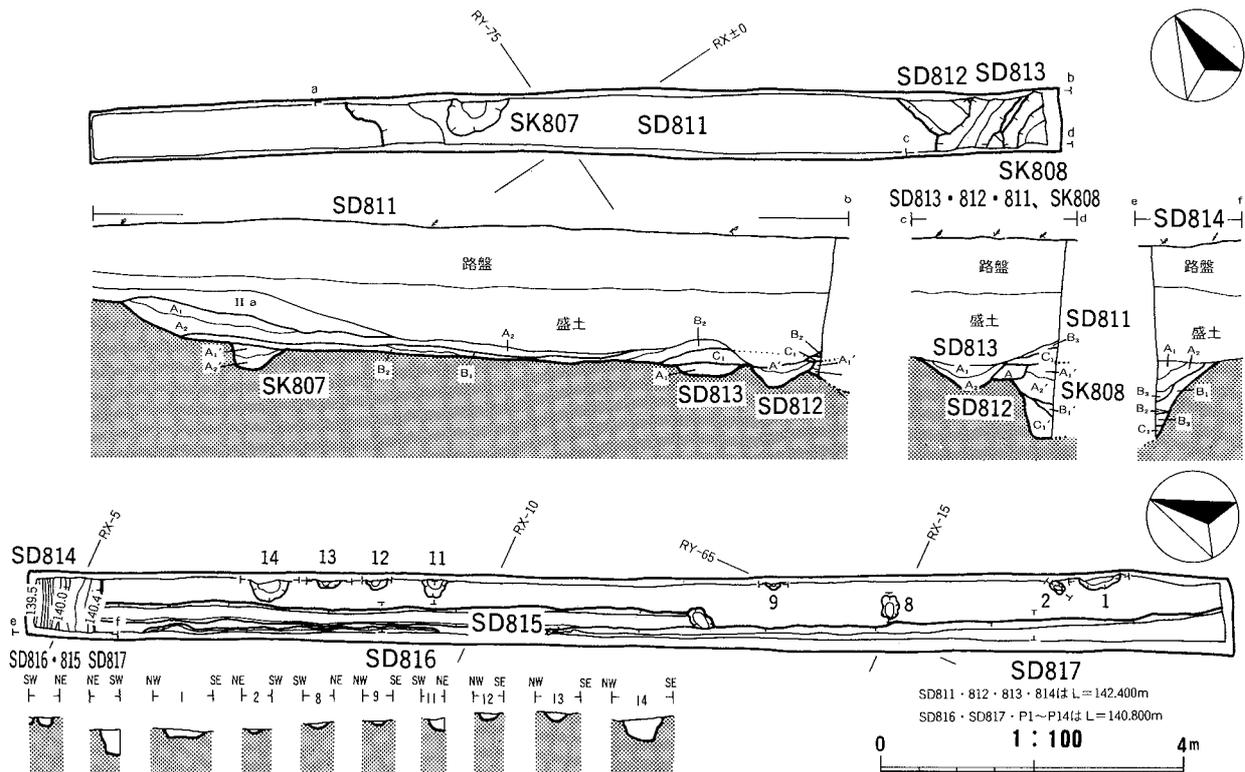
南トレンチ西壁際に位置し、表土(盛土)直下の地山面で検出した。規模は上幅 0.24 m、深さ 0.1 m をはかり、主軸方向は N 23° を示す。S K 808 土坑と重複するが、新旧は不明である。底面はほぼ平坦で直壁ぎみに立ち上がる。埋土は褐色土主体で、粒状褐色土を少量含む。出土遺物はない。

S D 816 溝跡 (第 44 図)

南トレンチ西壁際に位置する。東壁のみの検出であり全体規模は不明であるが、上幅 0.06 m 以上・深さ 0.08 m 以上をはかり、主軸方向は N 23° を示す。底面はほぼ平坦で壁は外傾しながら立ち上がる。埋土は自然堆積で褐色土主体で粒状暗褐色土を少量含む。出土遺物はない。

S D 817 溝跡 (第 44 図)

南トレンチ西壁際に位置する東壁のみの検出であり全体規模は不明であるが、上幅 0.25 m 以上・深さ 0.32 m をはかり、主軸方向は N 23° を示す。S D 815 溝跡と重複するが新旧は不明である。床はほぼ平坦で外傾しながら立ち上がり、壁は外傾しながら立ち上がる。埋土は自然堆積で粒状暗褐色土を少量含む褐色土である。出土遺物はない。



第44図 第63次調査区遺構図

S K 807 土坑 (第 44 図)

北トレンチ中央部に位置し、S D 811 溝跡に切られている。部分的な検出のため全体規模は不明であるが、楕円形を呈し、長軸 0.56 m 以上、短軸 0.58 m、深さ 0.33 m をはかる。主軸方向は W 15° S を示す。底面はほぼ平坦であるが、壁は外傾しながら立ち上がる。埋土は自然堆積で、粒状褐色土とスコリアを少量含む黒褐色土である。出土遺物はない。

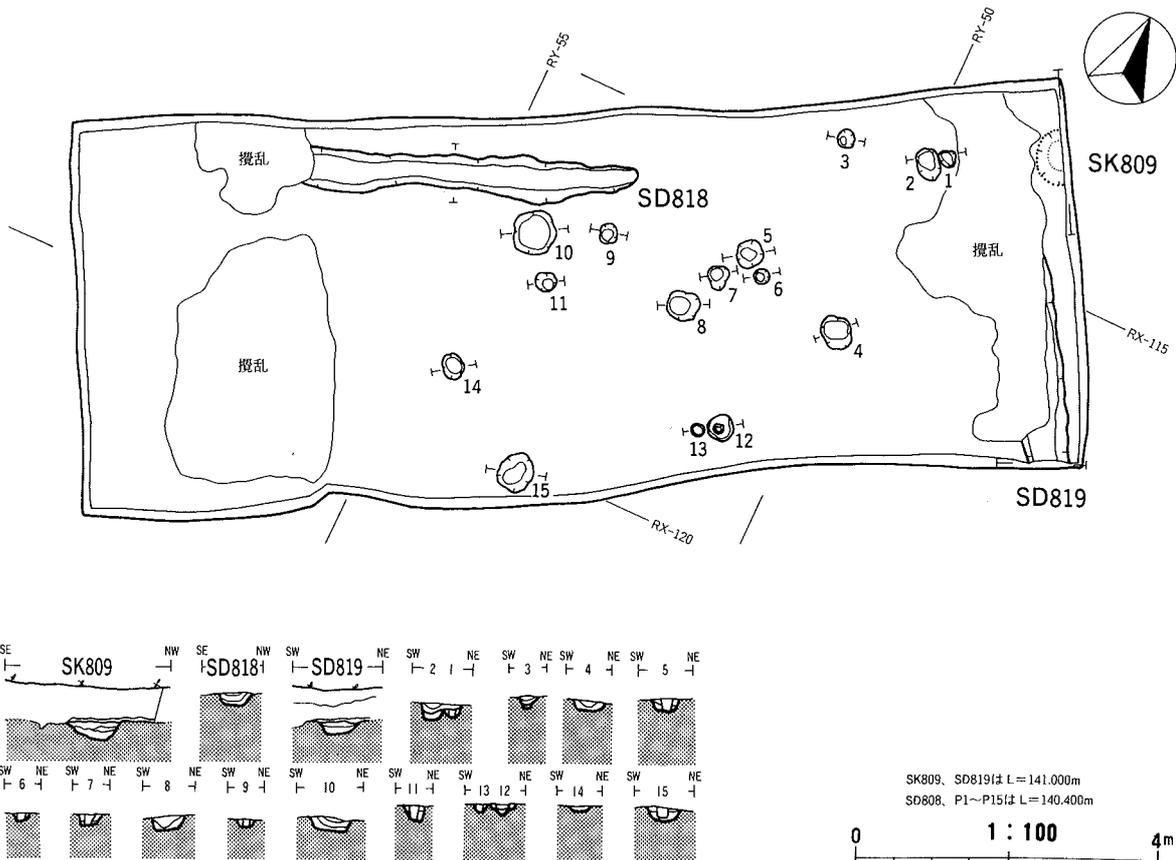
S K 808 土坑 (第 44 図)

北トレンチ南東端に位置する。S D 811 溝跡底面で検出した。部分的な検出のため全体規模は不明であるが、上幅 0.6 m 以上、深さ 1.0 m をはかる。底面はほぼ平坦で壁はやや外傾しながら立ち上がる。埋土は自然堆積で 3 層に大別され、A 層はスコリアを少量含む黒褐色土、B 層はスコリアを多量に含む黒褐色土、C 層はスコリアを少量含む黒色土である。S D 811・812 溝跡に切られる。出土遺物はない。

第 71 次調査

S K 809 土坑 (第 45 図)

調査区北東端に位置し、表土直下の地山面で検出した。壁面での確認のため平面形は不明。



第45図 第71次調査区全体図

規模は径 0.72 m、最深部 0.22 m をはかり、底面は起伏があり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色土主体で、粒～塊状褐色土を多量に含み、出土遺物はない。

S D 818 溝跡 (第 45 図)

調査区北西部に位置する。主軸方向は N 67° を示し、上幅 1.1 m、深さ 0.18 m をはかる。底面はほぼ平坦で壁は緩やかに立ち上がる。埋土は自然堆積で層相の違いにより 3 層に大別され、A 層は黒褐色土主体で粒状褐色土を少量含み、B 層は褐色土主体である。出土遺物はない。

S D 819 溝跡 (第 45 図)

調査区東端に位置する。主軸方向は N 30° を示し、規模は上幅 1.1 m、深さ 0.3 m をはかる。底面はほぼ平坦で壁は外傾しながら立ち上がる。埋土は自然堆積で、粒～塊状褐色土を少量含む黒褐色土である。出土遺物はない。

7. 郭外の調査

郭外の調査は住宅建築に伴って昭和 63 年度に第 26 次調査、平成 5 年度に第 47 次調査を実施している。第 26 次調査では第 25 次調査の北西側、勾当館北東部段丘縁辺部を調査し、近世の掘立柱建物跡・竪穴状遺構・土坑多数・溝が検出されている。第 47 次調査では勾当館北東側、第 26 次調査の西側を調査した。中近世の溝跡・柱穴が検出されている。

第 26 次調査

S B 101 掘立柱建物跡 (第 47 図)

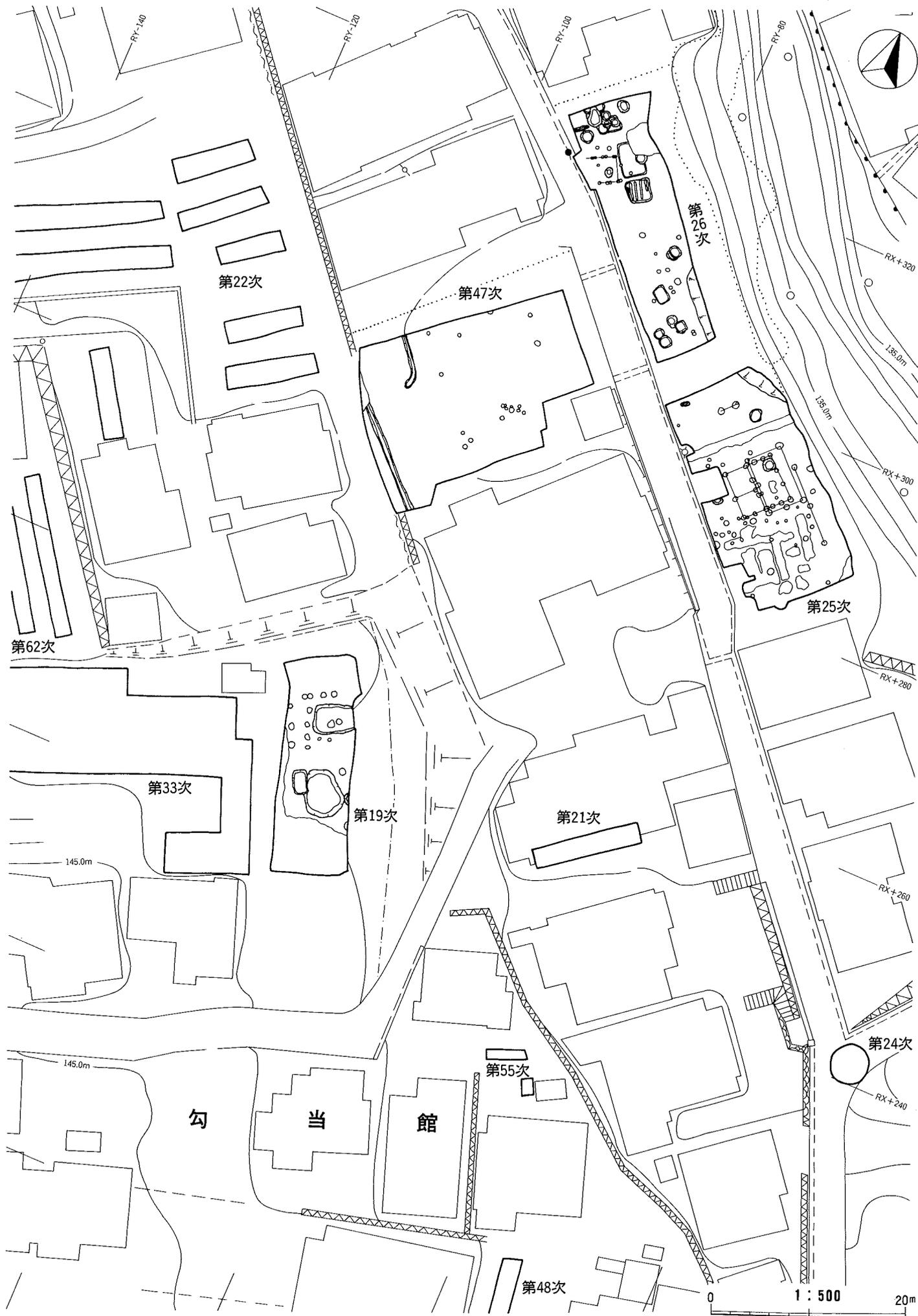
調査区北西部 S I 101 竪穴西側に位置する。調査区外にのびる可能性があるが、南北 1 間(総長 2.1 m)・東西 2 間(総長 2.25 m)で、棟方向は W 28° S を示す。S B 102 に切られ、S K 113 土坑と重複するが新旧は不明である。柱穴は P3・5・7・12・10 の 5 口で構成され、柱痕跡が認められるものはない。

S B 102 掘立柱建物跡 (第 47 図)

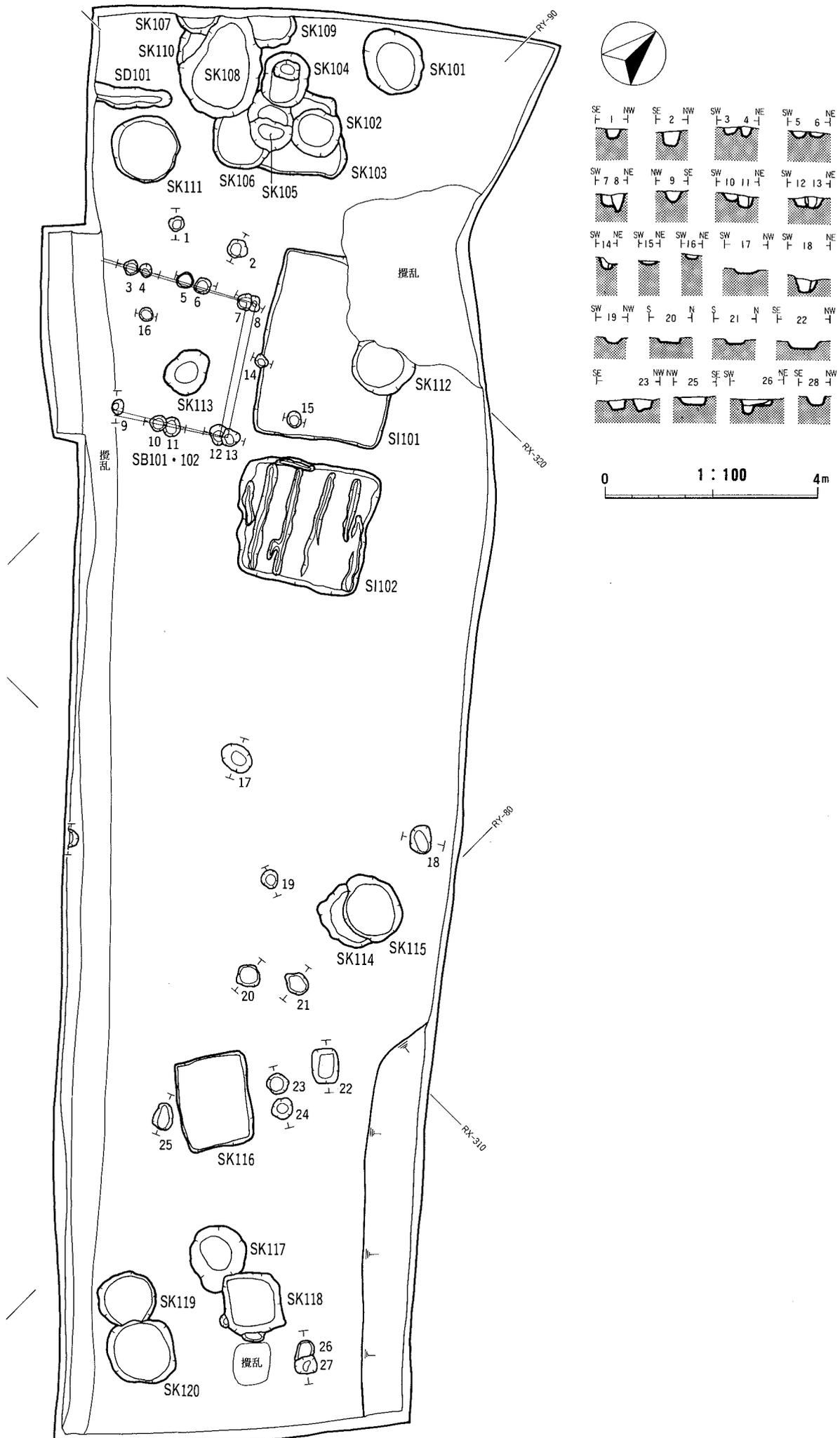
調査区北西部 S I 101 竪穴西側に位置し、S B 101 掘立柱建物跡を切る。S B 101 と規模・柱間・棟方向が近似し、建替と思われる。P4・6・8・9・11・13 の 6 口で構成され、P11・13 は柱痕跡が認められる。

S I 101 竪穴 (第 47・48 図)

調査区北西部、S I 102 竪穴の北西に位置し、表土直下で検出した。隅丸長方形を呈し、規模は長軸 3.5 m、短軸 2.5 m、壁高 0.1 m をはかり、建物の一部であった可能性がある。床面はほぼ平坦で、壁は直壁ぎみに立ち上がる。埋土は黒褐色土と黄褐色土の混合土である。主軸方向は N 34° W を示す。出土遺物はない。



第46图 勾当館北東部全体图



第47図 第26次調査区全体図

S I 102 竪穴 (第 47・48 図)

調査区中央部 S I 101 竪穴の南東に位置し、表土直下の地山面で検出した。隅丸方形を呈し、規模は一辺約 2.4 m、壁高 0.14 m をはかり、建物の一部であった可能性がある。床面は転ばし根太の痕跡があり、壁は直壁ぎみに立ち上がる。埋土は A・B の 2 層に大別され、A 層は黒褐色土主体で、粒状褐色土を多量に含み、B 層は黒褐色土主体で粒状褐色土を少量含んでいる。主軸方向は N 34°W を示し、S I 102 竪穴状遺構に近似する。出土遺物はない。

S K 101 土坑 (第 47・49 図)

調査区北西部に位置し、表土直下の地山面で検出した。楕円形を呈し、長軸 1.2 m、短軸 1.1 m、深さ 0.4 m をはかる。主軸方向は N 47°W を示す。底面はやや起伏があり、壁は外傾しながら立ち上がる。埋土は自然堆積でやや硬く、黒褐色土主体で粒状褐色土を少量含む。出土遺物はない。

S K 102 土坑 (第 47・49 図)

調査区北西部に位置し、S K 103・105 土坑を切っている。ほぼ円形を呈し、規模は最大径 1.02 m、深さ 0.2 m をはかる。底面はほぼ平坦で壁は外傾しながら立ち上がり、埋土は暗褐色土と黄褐色土の混合土である。出土遺物はない。

S K 103 土坑 (第 47・49 図)

調査区北西部に位置し、S K 102・104・105 土坑に切られる。平面形は隅丸方形と思われるが、重複のため不明である。主軸方向は N 55°E を示し、一辺約 1.50 m、深さ 0.05 m をはかる。底面はやや起伏があり、壁はほぼ直壁ぎみに立ち上がる。埋土は不明である。

S K 104 土坑 (第 47・49 図)

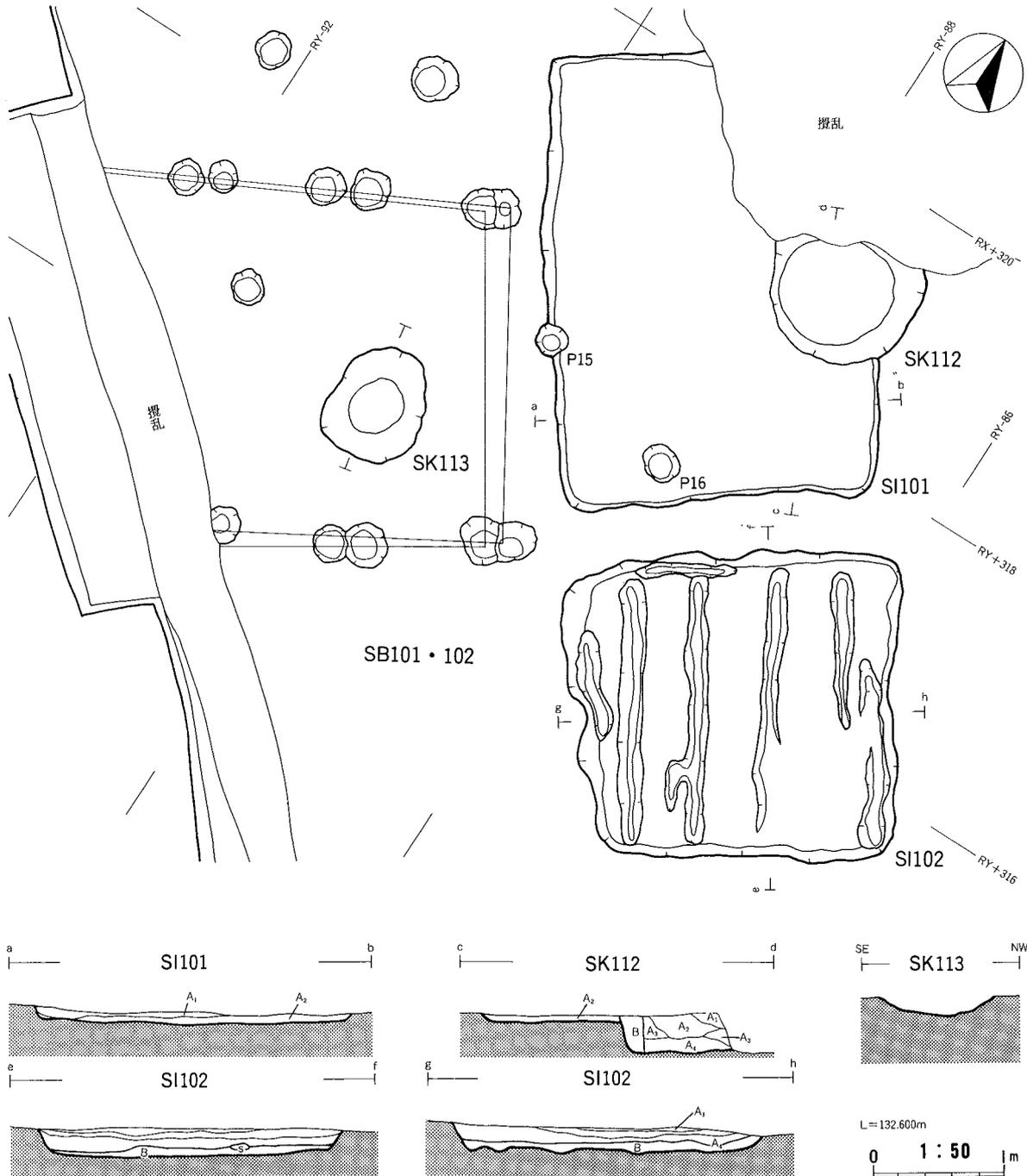
調査区北西部に位置し、S K 103・105 土坑を切っている。平面形は楕円形を呈し、長軸 1.30 m、短軸 0.8 m、深さは最深部で 0.34 m をはかり、主軸方向は N 34°W を示す。底面は起伏があり壁は緩やかに立ち上がる。埋土は硬くしまり、粉～粒状褐色土を少量含む黒褐色土である。出土遺物はない。

S K 105 土坑 (第 47・49 図)

調査区北西部に位置し、S K 102・104 土坑にきられ、S K 103・106 土坑を切る。重複のため全体規模は不明であるが楕円形を呈し、長軸 1.2 m 以上、短軸 0.8 m 以上、深さ 0.34 m をはかる。底面には段が付いて南西部が窪み、壁は外傾しながら立ち上がる。主軸方向は N 45°W を示す。埋土は 2 層に大別され、A 層は塊状黄褐色土を多量に含む暗褐色土で、B 層は粉状黄褐色土を多量に含む黒褐色土である。出土遺物はない。

S K 106 土坑 (第 47・49 図)

調査区北西部に位置し、S K 105・108 土坑にきられる。重複のため全体規模は不明であるが、楕円形を呈し、長軸 1.2 m 以上、短軸 1.0 m、深さ 0.2 m をはかる。主軸方向は N 45°W を示す。埋土は黒褐色土主体で粉状褐色土をごく少量含み、底面はほぼ平坦で壁は外傾しながら立ち上がる。出土遺物はない。



第48図 SI101・102 竪穴建物跡、SK112・113 土坑

S K 107 土坑 (第 47・49 図)

調査区北西部に位置し、S K 109 土坑にきられ、S K 108 土坑をきる。S K 110 土坑とも重複するが新旧は不明である。調査区外へのびるため全体規模は不明であるが長軸 0.8 m 以上、深さ 0.4 m をはかる。底面はほぼ平坦で壁は外傾しながら立ち上がる。埋土は黒褐色土主体で粒状褐色土を少量含み、出土遺物はない。

S K 108 土坑 (第 47・49 図)

調査区北西部に位置し、S K 107・109 土坑にきられ、S K 110 土坑をきる。不整形を呈し、長軸 1.9 m、短軸 1.7 m、深さ 0.3 m をはかる。主軸方向は N 32°W を示す。底面はほぼ平坦で壁は外傾しながら立ち上がる。埋土は黒褐色土主体で、粉～粒状褐色土を少量含む。出土遺物はない。

S K 109 土坑 (第 47・49 図)

調査区北西部に位置し、S K 107・108 土坑をきる。部分的な検出のため全体規模は不明であるが、径 1.2 m 以上、深さ 0.24 m をはかる。底面はほぼ平坦で壁は外傾しながら立ち上がる。埋土は黒褐色土主体で粒状褐色土を少量含む。出土遺物はない。

S K 110 土坑 (第 47・49 図)

調査区北西部に位置し、S K 107・108 土坑と重複するが新旧は不明である。重複するため全体規模は不明であるが、深さは 0.1 m をはかる。底面はほぼ平坦で壁はやや外傾しながら立ち上がる。埋土は不明であり、出土遺物はない。

S K 111 土坑 (第 47・49 図)

調査区北西端に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、規模は最大径 1.26 m、深さ 0.2 m をはかる。底面はほぼ平坦で壁は外傾しながら立ち上がる。埋土は硬くしまり、黒色土主体で粒状褐色土を少量含み、出土遺物はない。

S K 112 土坑 (第 47・49 図)

調査区北東部、S I 101 竪穴の東部に位置し、S I 101 を切っている。ほぼ円形を呈し、最大径 1.14 m、深さ 0.28 m をはかる。底面はほぼ平坦で壁は直壁ぎみに立ち上がる。埋土は A・B の 2 層に大別され、A 層は暗褐色土主体で粉状褐色土と粒状焼土を少量含み、B 層は褐色土と暗褐色土の混合土である。出土遺物は底面から寛永通寶 (第 52 図 4～9) が 4 点、銭銘不詳の銅銭が 1 点、板状の木材が出土している。

S K 113 土坑 (第 47・49 図)

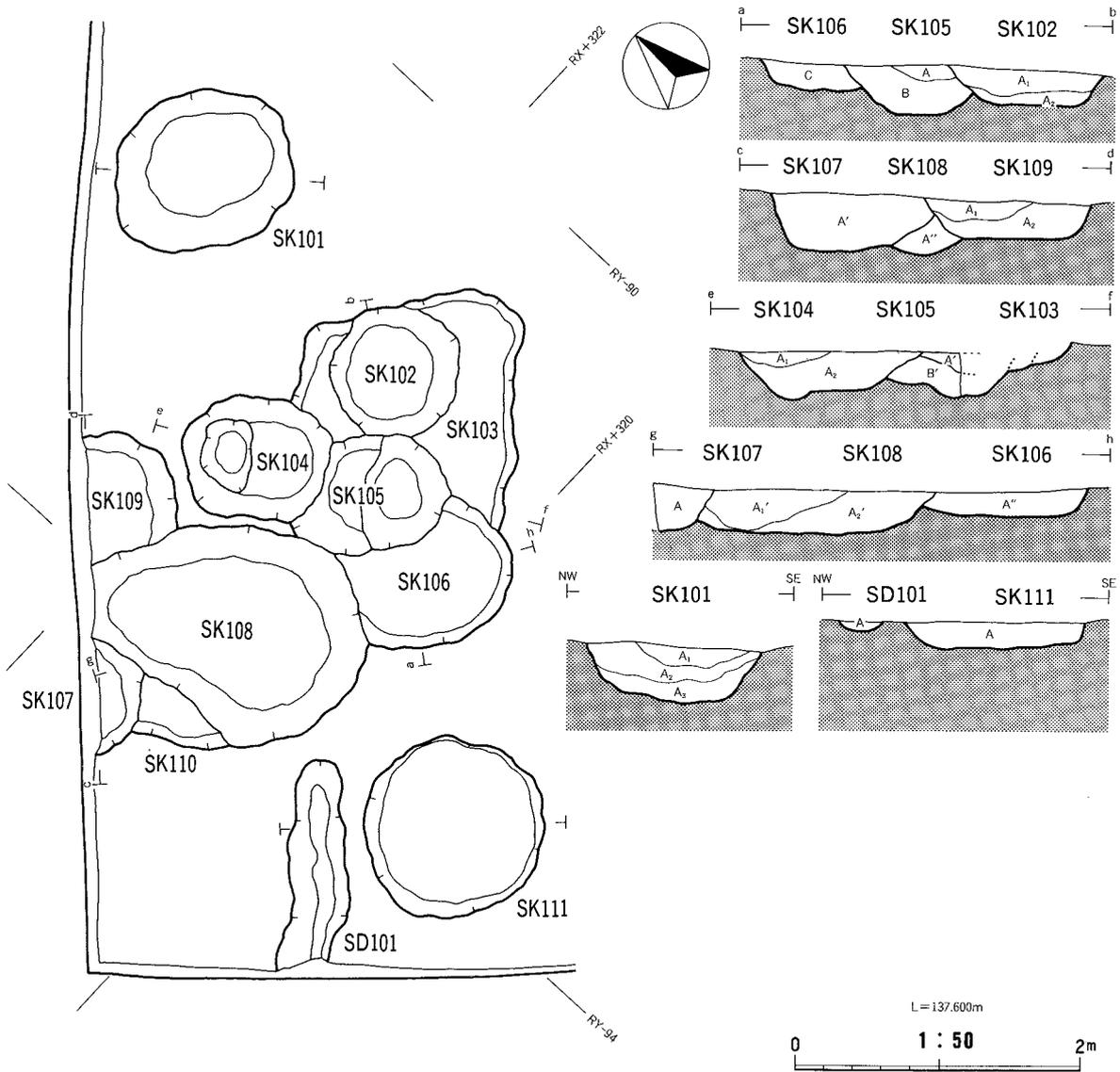
調査区北半部、S I 101 竪穴の南西に位置し、S B 101・102 掘立柱建物跡と重複するが新旧は不明である。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 1.0 m、短軸 0.7 m、深さ 0.12 m をはかる。主軸方向は N 12°W を示す。底面はほぼ平坦で壁はなだらかに立ち上がる。出土遺物はない。

SK 114 土坑 (第 47・50 図)

調査区中央部南東寄りに位置し、SK 115 土坑に切られる。ほぼ円形を呈し、最大径 1.25 m、深さ 0.62 m をはかる。底面はほぼ平坦で壁は直壁ぎみに立ち上がり、埋土は黄褐色土主体で塊状暗褐色土を多量に含む。出土遺物はない。

SK 115 土坑 (第 47・50 図)

調査区中央部南東寄りに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、最大径 1.28 m、深さ 0.72 m をはかる。底面はほぼ平坦で、壁は直壁ぎみに立ち上がる。埋土は A・B の 2 層に大別され、A 層は暗褐色土主体で粒状褐色土を少量含み、B 層は灰黄褐色土と暗褐色土の混合土である。出土遺物は埋土中から国産染付碗・陶器鉢の破片が各 1 点出土している。



第49図 SK101~111土坑、SD101溝跡

S K 116 土坑 (第 47・50 図)

調査区南半部中央に位置し、表土直下の地山面で検出した。平面形は長方形を呈し、規模は長軸 1.72 m、短軸 1.34 m、深さ 0.2 m をはかる。主軸方向は W 35° N を示す。底面はほぼ平坦で直壁ぎみに立ち上がる。埋土は自然堆積で黒褐色土主体で粉～粒状褐色土を少量含み、出土遺物はない。

S K 117 土坑 (第 47・50 図)

調査区南東部に位置し、S K 118 土坑に切られる。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 1.26 m、短軸 1.06 m、深さ 0.28 m をはかる。主軸方向は N 37° W を示す。床面はほぼ平坦で、壁は外傾しながら立ち上がる。埋土は硬く、黒褐色土主体で粉～粒状褐色土を少量含む。出土遺物はない。

S K 118 土坑 (第 47・50 図)

調査区南東部に位置し、S K 117 土坑を切る。隅丸長方形を呈し、長軸 1.1 m、短軸 1.05 m、深さ 0.3 m をはかる。主軸方向は W 39° N を示す。底面はほぼ平坦で、壁は外傾しながら立ち上がる。埋土は黒褐色土主体で粉状褐色土をごく少量含む。出土遺物はない。

S K 119 土坑 (第 47・50 図)

調査区南東部に位置し、S K 120 土坑にきられる。ほぼ円形を呈し、規模は最大径 1.1 m、深さ 0.12 m をはかる。床はほぼ平坦で壁は外傾しながら立ち上がる。埋土は自然堆積で粉～粒状褐色土をごく少量含む黒色土である。埋土中から肥前染付碗の破片 1 点が出土している。

S K 120 土坑 (第 47・50 図)

調査区南東部に位置し、S K 119 土坑をきる。ほぼ円形を呈し、規模は最大径 1.32 m、深さ 1.6 m をはかる。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は自然堆積で硬くしまり、黒色土主体で粉～粒状褐色土を少量含む。出土遺物はない。

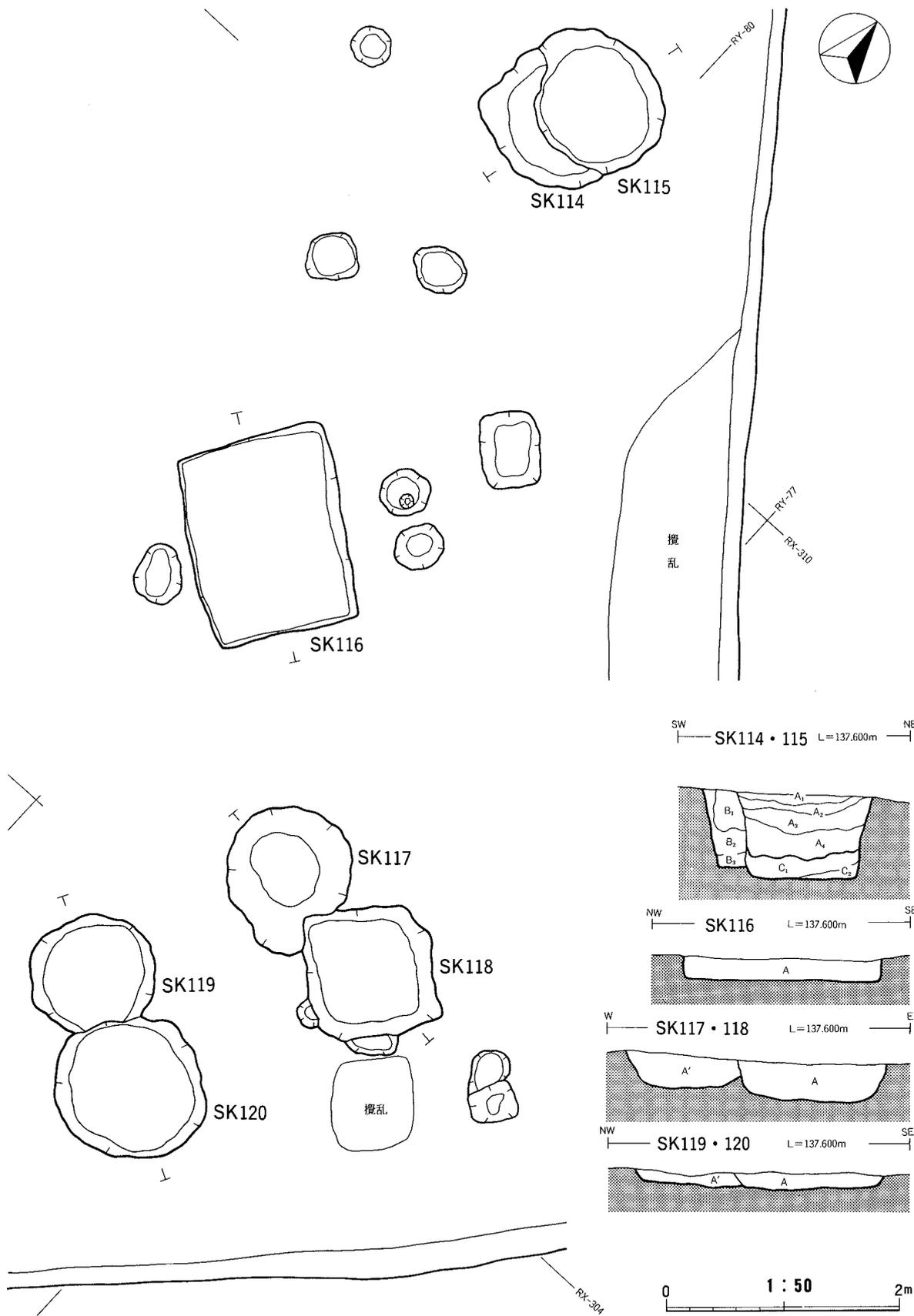
S D 101 溝跡 (第 47・49 図)

調査区北部西側に位置する。規模は上幅 0.32 m、深さ 0.7 m をはかり、底面はほぼ平坦で壁は緩やかに立ち上がる。埋土は自然堆積で黒色土主体である。出土遺物はない。

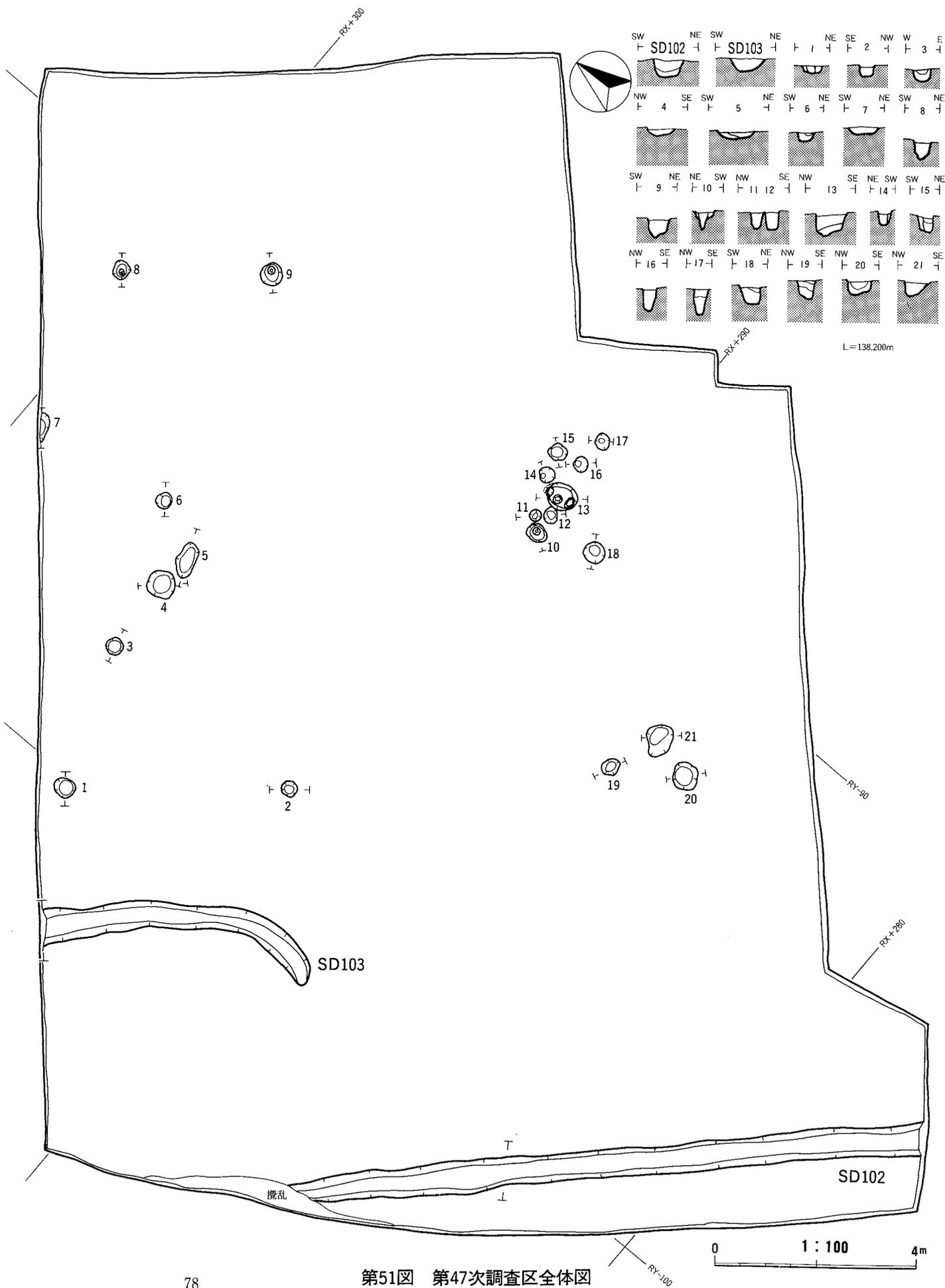
第 47 次調査

S D 102 溝跡 (第 51・52 図)

調査区南西端部に位置し、表土直下の地山面で検出した。上幅 0.55 m、深さ 0.32 m をはかり、主軸方向は N 45° E を示す。底面はほぼ平坦で、壁は外傾しながら立ち上がる。埋土は自然堆積で黒褐色土主体である。出土遺物はない。



第50図 SK114~120土坑



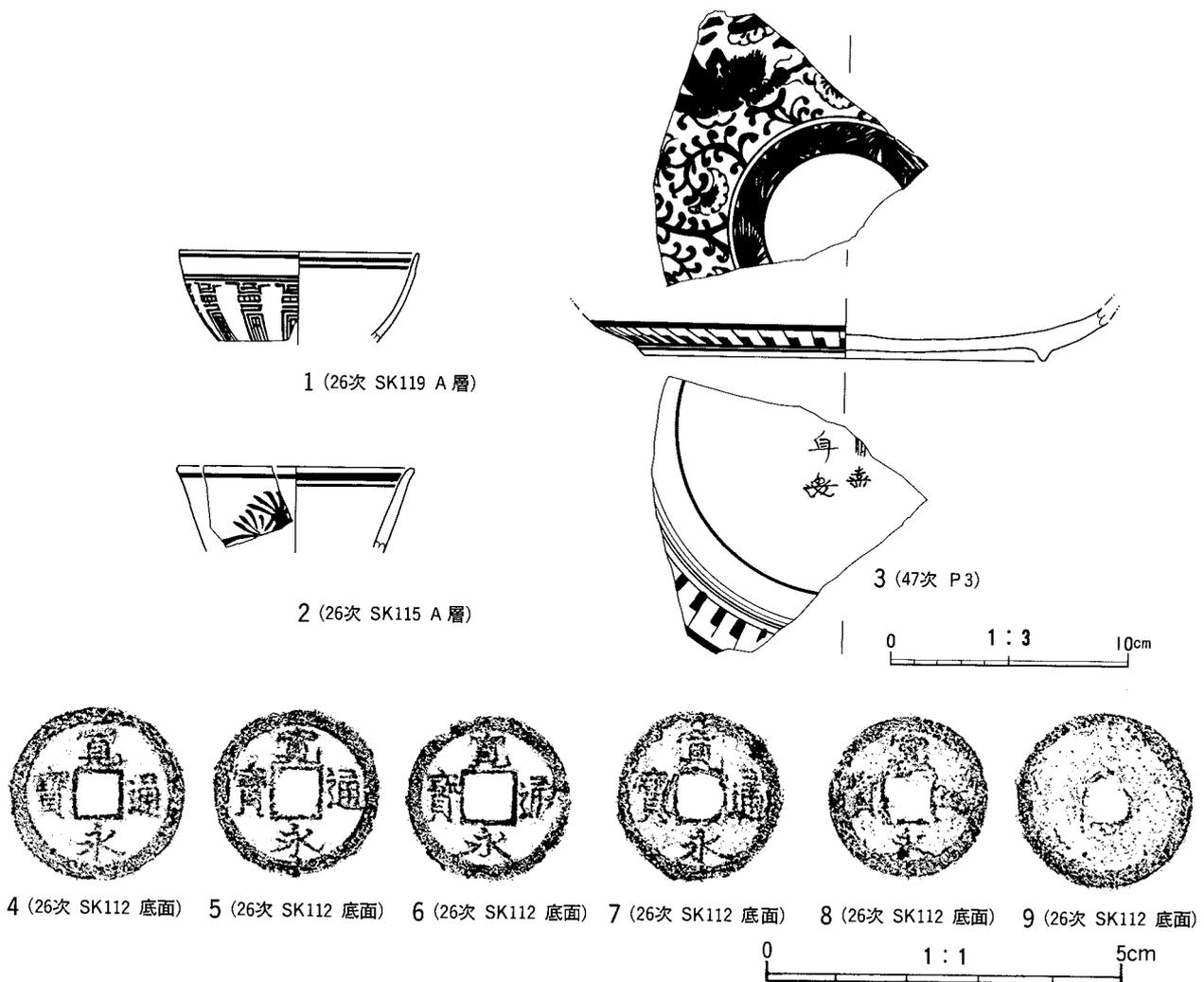
第51図 第47次調査区全体図

S D 103 溝跡 (第 51・52 図)

調査区西部に位置し、南から西へやや弧状を呈する。規模は上幅 0.7 m、深さ 0.25 m をはかり、底面は南側から西側へ低くなり、壁は外傾しながら立ち上がる。埋土は自然堆積で黒褐色土主体である。出土遺物はない。

第 26 次・第 47 次調査の出土遺物 (第 52 図)

第 52 図 1 は肥前の染付碗で、内湾する器形で体部外面は梵字文である。口縁部内面には 2 条の界線が引かれる。2 は国産磁器の染付碗で、口縁部は外傾し、外面には 1 条の界線と松、口縁部内面には 2 条の界線が引かれる。1・2 ともに 18 世紀後半から 19 世紀前半の製品である。3 は肥前染付の中皿である。内面は雲竜と花唐草文、底部外面には「嘉年製」の銘が入る。18 世紀の製品である。4～9 は近世の銅銭である。4～8 は寛永通寶で、すべて新寛永銭である。9 は銭銘不詳である。



第52図 第26次・第47次調査出土遺物

IV 調査のまとめ

1. 安倍館遺跡の年代と性格

(1) 城館の構造

縄張 安倍館遺跡は北上川に臨む台地縁辺部に立地する、大形の戦国期城館である。川沿いに北から勾當館・外館・北館・本丸・中館・南館の6郭が並び、外館西側から南館南側まで、幅の広い帯曲輪が取り巻くプランである。帯曲輪は絵図などにも名称の記載がないが、便宜上の名称として使用する。それぞれの曲輪は堀で区画されるが、確実に土塁が存在するのは中央の本丸のみである。本丸の土塁は現在北辺に断続的に痕跡を残すほか、かつて西辺にも存在したことが、地元の人々の記憶に残っている。曲輪の地形は、現況では外館以南の5郭の輪郭はたどれるが、勾當館と帯曲輪の範囲については、住宅建設等で不明瞭となり、一部をのぞいて判別できない状況である。そこで、現況で残る地形と地籍図（第54図）、それに寛文8年の奥州之内岩手郡栗谷川古城図（第57図）の記載内容をもとに、縄張りを復元したプランが第38図である。

この城館は最も土地の高い部分に外館（標高146m）があり、次の北館から南館に向けて1m前後の高低差で順次低くなっている。外館以南の5郭はおしなべて郭内の削平が行き届いており、築城にあたってはかなり入念な造成がおこなわれたものと考えられる。郭内の地形は南館の東端部分が一段低く造成されるほかは、他の4郭の内部はそれぞれ同一平坦面に造られている。北側の勾當館は外館よりも1m～1.5m低く、しかも東側の北上川へむけて緩く傾斜している。また帯曲輪は外館から南館にいたる5郭よりも低く、外方へ緩く傾斜し、勾當館と堀を隔てる北端は、勾當館と同一レベルで対峙する。この曲輪相互の高低差と、平面位置の関係から、外館から南館に至る5郭が中枢的曲輪であり、勾當館と帯曲輪が外郭的曲輪と推察される。

土塁 地籍図（第54図）で検討すると、南館西側より中館・本丸・北館・外館を通過し、勾當館東側を下る道路が存在したことがわかる。この道路は現況では外館の北端部付近にしか認められないが、実際の発掘調査においては、中館の南の堀から郭内に上がる箇所が、第5次調査のSD602堀として調査されたほか、北館の水道・下水管付設に伴う調査でも溝状の通路跡が確認されている。中館・本丸・北館・外館では、曲輪は矩形のプランをなしているにもかかわらず、道路は斜めに通過している。そして本丸・中館では、曲輪プランよりもこの道路方向に規制された字境が認められ、曲輪内部の当時の建物や柱列、竪穴建物までもが、道路に方向を規制されている。この事実から、この道路は城館当時から存在した道であり、城内の主要通路として機能していたことがわかる。曲輪のプランとは一見無関係なような道路の方向と、それに規制された郭内の遺構群は、道路が築城以前から存在した可能性をも示唆する。この道路に伴う虎口のうち、本丸においては南側の堀から登る箇所の虎口は、現在コンクリート擁壁で変形しているが、北側の堀に面した虎口は、左右の土塁の壁が喰違いになっており、当時の虎口の

形状を良好に残している。本丸の南北の堀をわたる箇所は、現在でも低い土橋状になっている。

堀は本丸の堀が最も大きく、現状でも幅 15 m～22 m 深さは西辺で 2～3 m、北辺・南辺の深いところで 10 m 内外である。本丸堀の調査は過去に 12 次調査において、西辺中央部の下水マンホール部分で、新旧 2 時期の堀の底部を確認している。古い時期の堀は本丸側から約 4 m 深い薬研堀、新期の堀は本丸から約 3 m 深い箱堀であった。帯曲輪の側から計測すればこれより 1 m～1.5 m 浅くなる。本丸の堀は戦後間もないころまで、土橋より西側部分が水が湛えられていたと伝えられており、現在でも北西部ではその名残がある。堀は本丸から外側に向かうにつれ規模を減じており、今のところ重複が認められたのは本丸の堀のみである。南館の堀は幅約 8 m、深さ 2.4 m の薬研堀で、南館の面からの深さは約 3.5 m 内外である。帯曲輪南端の堀は 12 次調査で確認されており、幅 3.1 m 深さ 2.2 m の薬研堀である。この堀は中ほどのところまで一気に埋戻され、その上面は踏み固められていた。寛文 8 年の栗谷川古城図では、この堀は「盛岡より鹿角への街道」になっている。

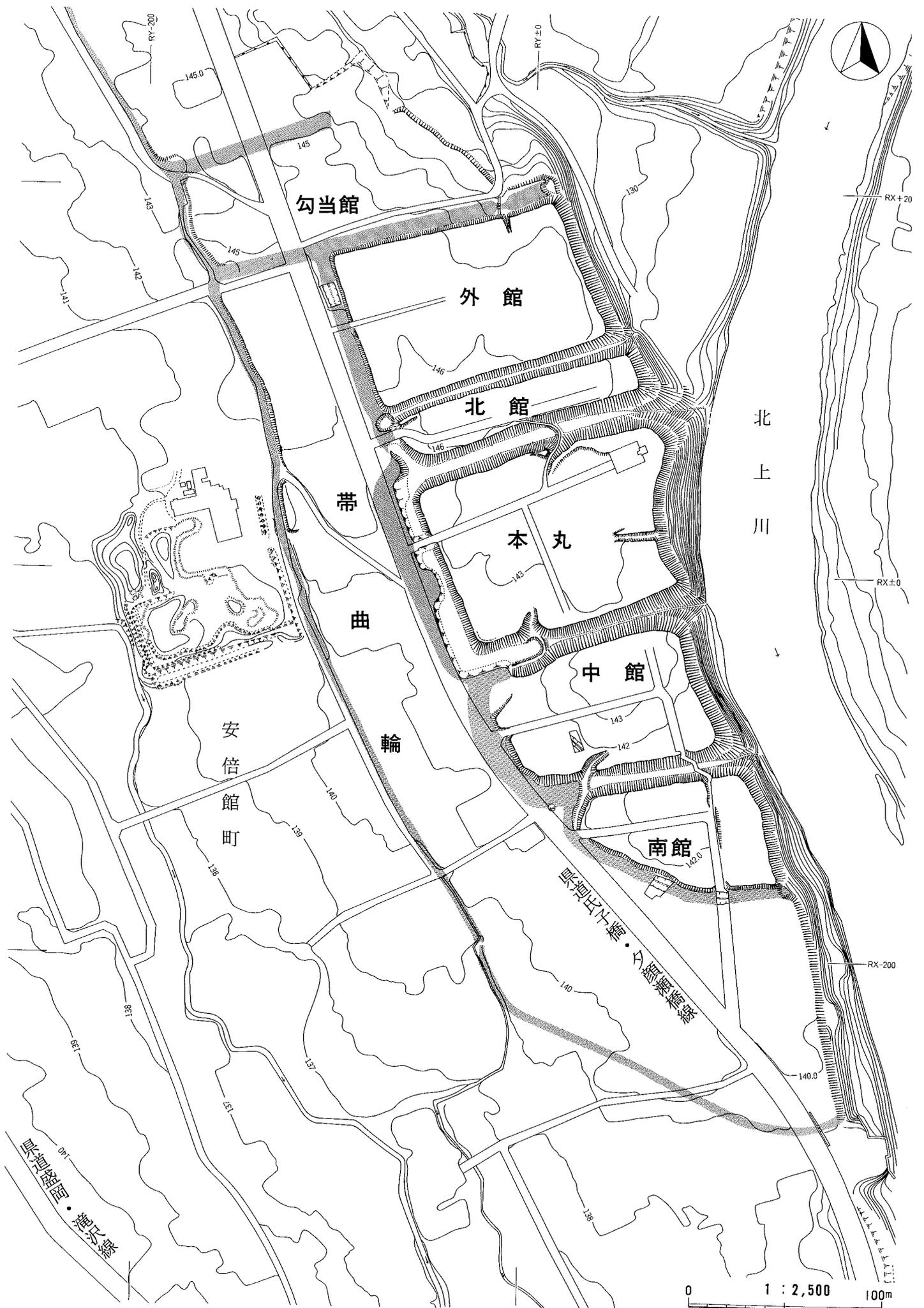
(2) 検出遺構・遺物からみた曲輪の性格

安倍館遺跡ではこれまでに 75 次に及ぶ発掘調査を実施しているが、個人住宅改築に伴う発掘調査がほとんどであり、掘立柱建物跡などは、建物の全体像を把握できないものがほとんどである。曲輪のなかで、最も遺構の重複が認められるのは本丸である。

本丸

本丸ではこれまでに西半部と南東部が調査されているが、北東部の厨川八幡宮境内から中心部のゲートボール場にかけては未調査である。遺構のうち掘立柱建物跡を構成する柱列や柱穴は、これまでの各調査区において多数確認されている。46 次・73 次調査区付近が最も密度が濃く、北西部の 49 次調査、西部の 60 次調査西端部あたりは柱穴密度は薄い傾向にある。このうち 46 次・73 次調査区には、他の調査区に比較して大形の柱穴が多く、出土陶磁器も比較的多い。竪穴建物は昭和 43 年度の南東部保育園用地での調査で 7 棟検出されたほか、以後の調査でこれまでに 5 棟確認されている。地籍図から判読される道路は本丸を斜めに縦断するが、建物・竪穴の多くは、道路や道路に規制された地割りに方向をそろえている。73 次調査区の辺りは中心道路の西側の建物群の中でも、中心的な部分であろう。本丸自体での最も中心となる居館は、地形の要害性や全体配置から、未調査部分の厨川八幡宮から、ゲートボール場の周辺であろう。現在八幡宮社叢の南に、北上川にむけて開口する幅 2～3 m、深さ 80 cm ほどの溝が存在するが、あるいはこれが居館部分の囲郭施設になるものかもしれない。

本丸ではこれまでの発掘調査で瀬戸の窖窯Ⅳ期の卸し皿・瀬戸・美濃大窯Ⅰ期の灰釉皿、大窯Ⅱ期の鉄釉椀皿・鉄釉天目茶碗、大窯Ⅲ期～Ⅴ期の灰釉襷皿、大窯Ⅱ期の鉄釉大皿、16 世紀末葉の中国染付皿 (E 群)・16 世紀の白磁皿、開元通寶・皇宗通寶・洪武通寶・永樂通寶が出土している。陶磁器は 15 世紀前半の可能性のある灰釉陷目皿も存在するが、主体となるのはおおむね 16 世紀中葉～後半の遺物である。本丸という名称が戦国期までさかのぼるか否か明確ではないが、曲輪の構造や検出遺構・遺物の内容を他の曲輪と比較しても、城館の主郭であること

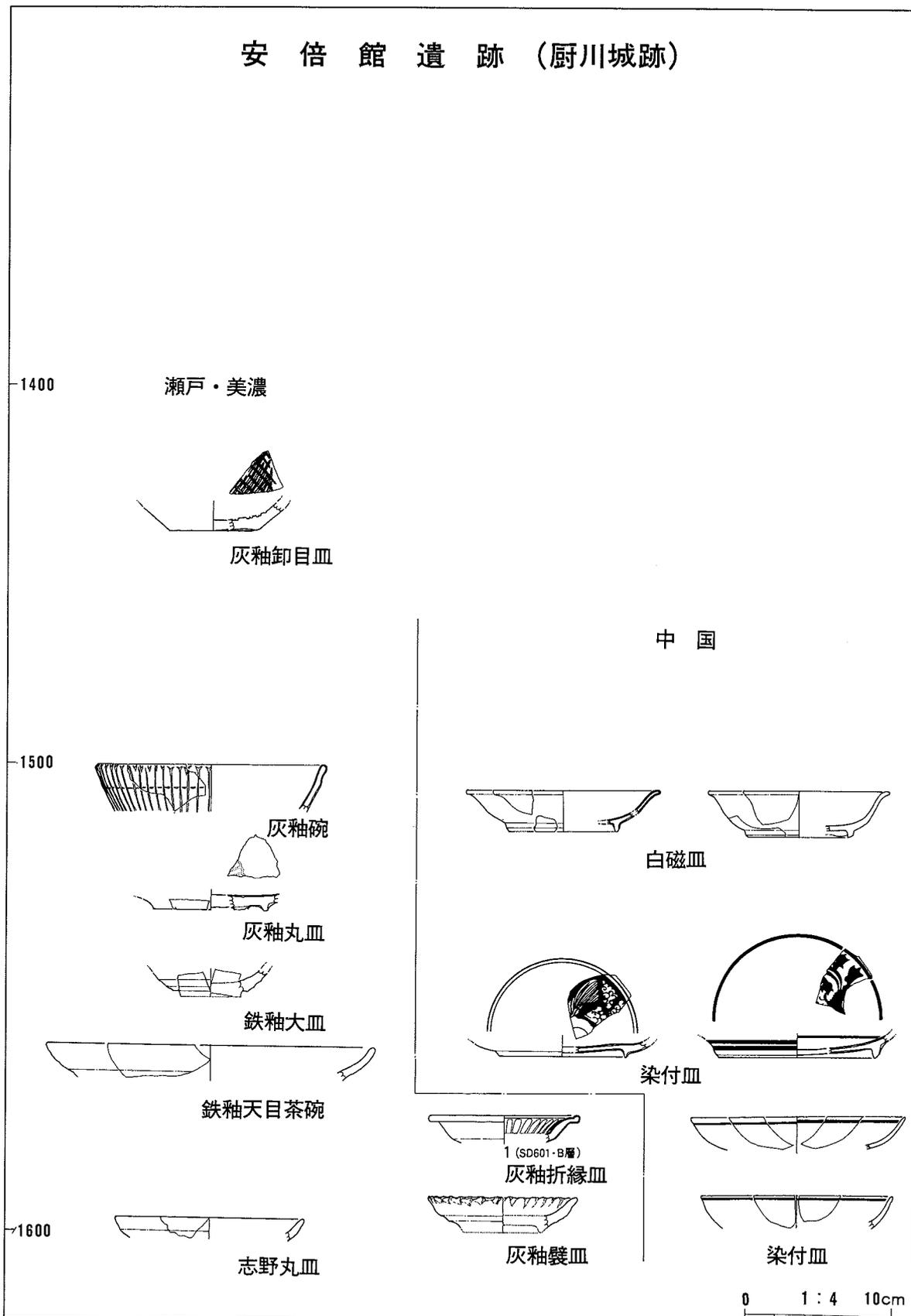


第53図 安倍館遺跡縄張図



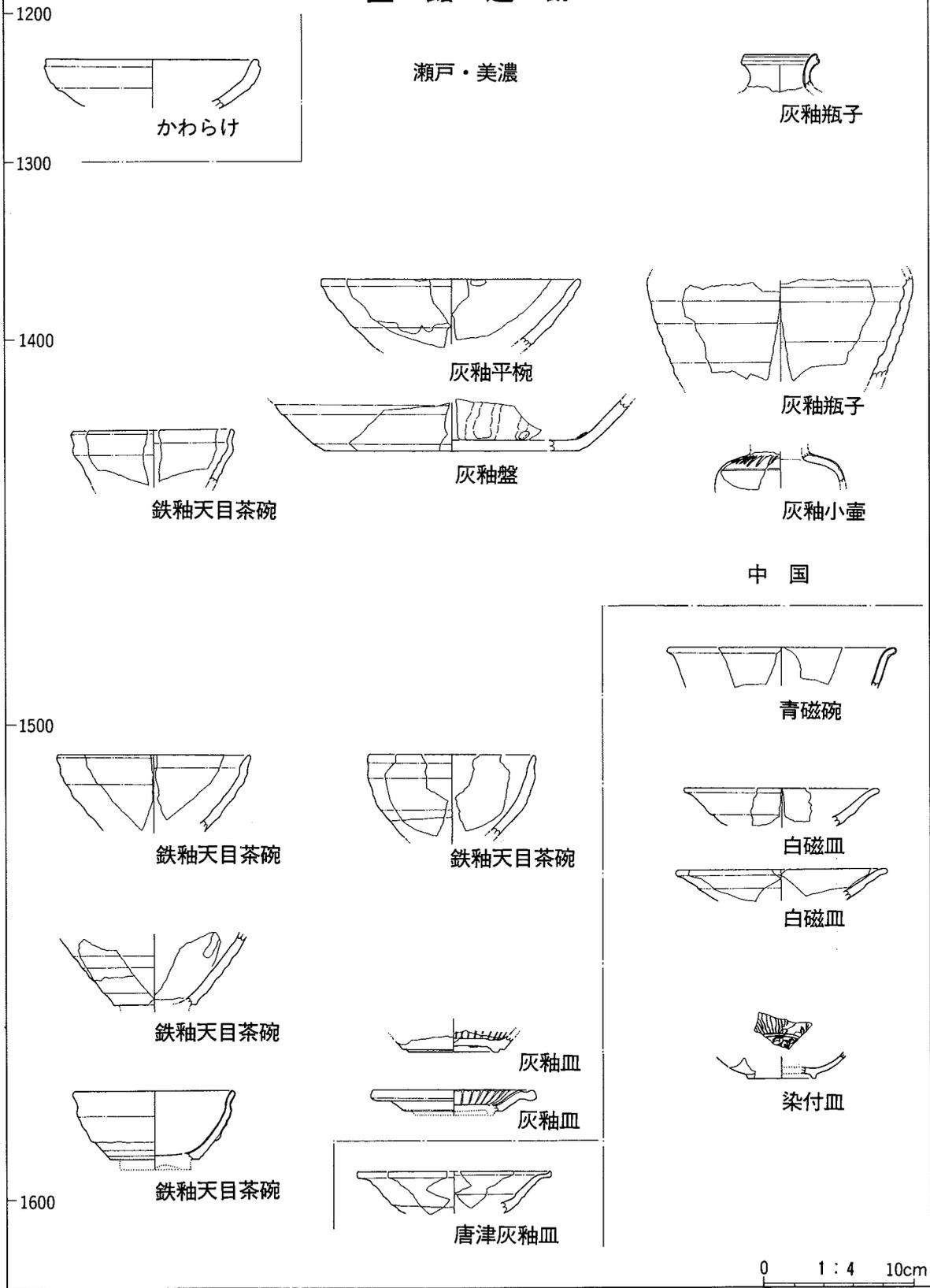
第54図 安倍館遺跡地籍図

安倍館遺跡 (厨川城跡)



第55図 安倍館・里館遺跡出土の陶磁器(1)

里館遺跡



第56図 安倍館・里館遺跡出土の陶磁器(2)

は疑いない。おそらく城主の居館を中心とした曲輪と考えられるが、城主の近親者や上級家臣の屋敷の存在も、今の段階では否定できない。中心道路の西側の竪穴からはフィゴの羽口破片が出土しており、小鍛冶などの生産活動も周辺でおこなわれていたと考えられる。

中館・南館

陶磁器

中館は本丸同様、掘立柱建物跡・竪穴建物跡が検出されているが、遺構密度、重複の状態は本丸よりも少ない。建物も本丸のものよりも小形のもが多く、柱穴の規模も本丸よりも小さい。城郭期の遺物には、第5次調査で出土した、瀬戸・美濃大窯III期～IV期の灰釉折縁皿と、同じころの鬘皿の小破片のみである。遺構内容はおおむね本丸に準じる内容であり、郭内にいくつかの屋敷が集合しているものと推定される。

南館は竪穴建物は明確なものは1棟も検出されていない。掘立柱建物も廂の付く建物と推定されるもの1棟、簡易な小屋のような建物1棟があり、ほかは明確なものは存在しない。南館も屋敷の存在は推定できるが、ほとんど重複がなく、遺物も出土しておらず、かなり短期間にいとなまれた曲輪であろう。

北館・外館

北館はこれまでのところ、城郭期の確実な建築遺構や遺物は全く検出されていない。おそらく本丸の北側がより高い土地になっているため、本丸を防御するためにもうけられた曲輪で、ふだん屋敷などはほとんど存在しなかったとおもわれる。

染付皿

外館は平面規模は本丸に匹敵し、城内で最も高い土地に立地する。しかし、これまでのところ目立った建物などは確認されていない。遺物も中国の染付皿の小破片が1点出土しているに過ぎない。馬つなぎ場か、郭内の区画施設とおもわれる柱列が存在する。囲郭する堀も小規模で重複がないことから、本丸や中館などよりも相当後になってから付加された曲輪であろう。この中に家臣団の屋敷などは考えにくい。

勾當館・帯曲輪

勾當館もいまのところほとんど遺構は検出されない。この外側（北側）は同一レベルで続く台地であり、外館以南の主郭部を防御するための曲輪であろう。

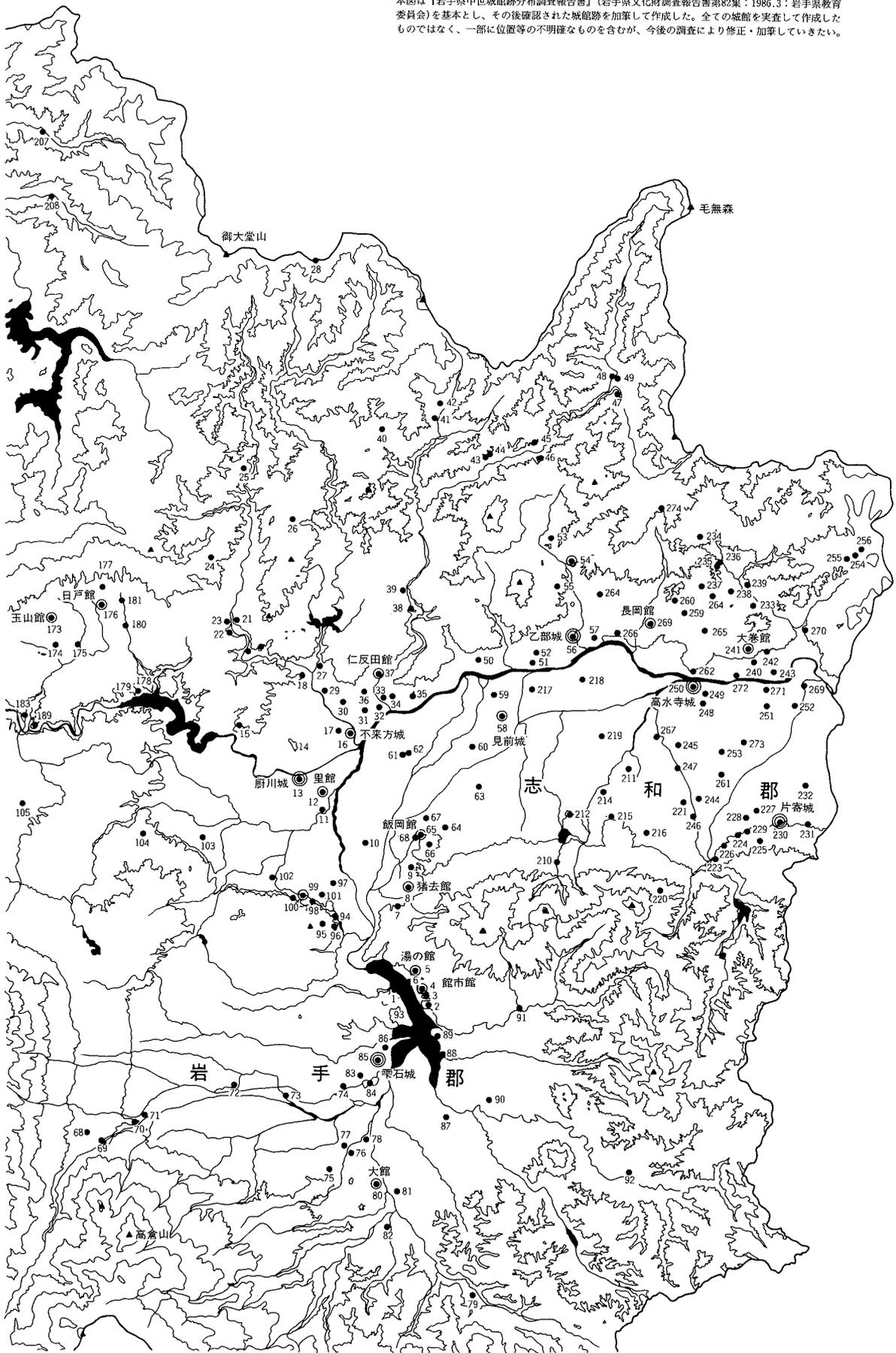
惣カハ

帯曲輪にはいままでも数箇所直行し横断する溝が確認されている。地籍図では短冊型の字境が見られ、これに平行するような柱列や溝もある。この中から城郭の時期の遺物はいまのところ確認されていないが、帯曲輪の中に簡易な町屋のような建物が立ち並んでいた可能性はある。遺構の密度も薄く、他の曲輪との位置関係からみても、勾當館などとともに、最終段階に縄張りされた曲輪であろう。寛文8年奥州之内岩手郡栗谷川古城図に「古ハ惣カハの堀の由只今者盛岡より鹿角への海道」とあるように、この曲輪は「惣カハ」すなわち、中心部の5郭を守る総構的曲輪であった。



第58図 岩手郡

本図は『岩手県中世城館跡分布調査報告書』（岩手県文化財調査報告書第82集：1986.3；岩手県教育委員会）を基本とし、その後確認された城館跡を加筆して作成した。全ての城館を実査して作成したのではなく、一部に位置等の不明確なものを含むが、今後の調査により修正・加筆していきたい。



志和郡の城館跡分布図

城館跡一覧表 盛岡市・岩手郡

No	城館・遺跡名(別称)	所在地	立地	比高	規模	主要郭	備考(城主・文献・年代等)
1	新城館	盛岡市繫字堂ヶ沢	段丘先端	60 m	80 m×40 m	1	綾織越前広信か？
2	上野館	繫字葦内沢	尾根先端	60 m	80×40	1	
3	葦内館	同上	尾根先端	90 m	50×20	1	
4	館市館(古館)	繫字館市	尾根	90 m	400×100	3	手塚伊織・館市氏(館市家文書)
5	湯の館	繫字湯の館	山頂～山腹	180 m	400×350	2	田口氏？
6	繫山遺跡	繫字湯の館	段丘縁辺	20 m	100×80	1	湯の館の居館か？ 15世紀～16世紀
7	猪去八幡館	猪去字田面木	尾根先端	50 m	200×80	1	
8	猪去館	猪去字釈迦堂	段丘先端	10 m	350×200	3以上	猪去(斯波)氏 ～天正16年(1588)？
9	小和田館	猪去字小和田	台地先端	7 m	130×40	2	
10	太田館	上太田字館	微高地	1 m	200×150	2	太田氏(奥南盛風記)天正ごろ
11	稲荷町(大館)	大館町・稲荷町	低位段丘	3 m	300×250	1	12世紀居館
12	里館	天昌寺町他	低位段丘	3 m	400×150	4～5	工藤氏 15世紀～16世紀
13	厨川城(安倍館遺跡)	安倍館町他	台地縁辺	20 m	650×200	7	工藤氏 16世紀 天正20年(1592)破却(破却書上)
14	上田城	上田？					所在地不明(遠野南部家文書：正平5年)
15	大森山遺跡	上田字黒石野	山頂	70 m	50×50	1	
16	淡路館(南館)	内丸	丘陵	18 m	450×250	3以上	不來方(福士)氏 近世盛岡城本丸～三の丸の位置(旧記)
17	慶善館(北館)	内丸	丘陵	？			福士氏 盛岡城外曲輪の位置(旧記)
18	佐々木館	下米内字寺並	丘陵	70 m	250×120	2	佐々木氏
19	大誘館	上米内字大誘	尾根先端	60 m	300×150	2	畝状堅堀群
20	野頭館	上米内字野頭	尾根	50 m	200×50	3	
21	米内館	上米内字畑井野	丘陵先端	25 m	150×150	2	
22	竹林遺跡	上米内字米内沢	丘陵先端	30 m	50×30	1	郭内に堅穴状の窪みが6カ所、古代末期環壕集落？
23	向館	上米内字米内沢	尾根先端	50 m	30×20	1	
24	矢沢館	上米内字畑	舌状台地	5 m	40×30	1	山間部の小規模な居館
25	大志田館	浅岸大志田(館沢)	尾根先端	160 m	400×100	1	
26	元信館	浅岸字元信	山頂	100 m	40×20	1	山間部の小規模城館、元信弥六
27	上村屋敷遺跡	浅岸字柿木平	段丘縁辺	3 m	60×40	1	浅岸氏？ 第19次・25次調査地点、16世紀、南に近世環壕屋敷
28	阿部館	浅岸字中津川	山頂	700 m			安倍氏
29	獅子ヶ鼻館(妙泉寺山)	加賀野字桜山	丘陵	60 m	250×100	2	丘陵頂部を環壕が周回、近世寺院で部分的に改変。
30	花垣館(三上館)	天神町・住吉町	丘陵	20 m	350×150	2以上	盛岡築城のとき三上氏居住。
31	中野館	茶畑	丘陵	8 m	200×150	2以上	中野康実 天正14年
32	新山館	茶畑	低位段丘	4 m	150×100	1？	
33	葛西館	見石	丘陵先端	20 m	150×100	1？	葛西氏 慶長年間
34	安庭館	東安庭字館	丘陵先端	20 m	150×100	1	
35	蝶ヶ森館(まったつ)	盛岡市東安庭蝶ヶ森・真立	山頂	110 m	250×120	1	山頂に経塚、経ヶ森とも、単郭多重周壕。
36	榎木館(小山遺跡)	東山一丁目	台地	20 m	200×150	1	
37	仁反田館	東山二丁目	丘陵	30 m	280×100	4	仁反田四郎忠常(岩手郡誌)
38	川目C遺跡	川目第6地割	丘陵	30 m	200×80	1	堀切等はないが、斜面に段築。開元通寶・天目茶碗出土。
39	戸中館	川目字戸中	尾根先端	60 m	300×150	2	吉田氏か？多重堀切
40	内沢館	築川字内沢	尾根先端	80 m	80×50	1	
41	下館	築川	尾根先端	160 m	250×50	2	
42	平清館	築川平清	尾根先端	120 m	100×20	1	
43	細野館A	根田茂字細野	尾根先端	50 m	50×10	1	
44	細野館B	根田茂字細野	尾根先端	50 m	50×40	1	
45	マダテ	根田茂字築場	尾根先端	120 m	200×30	1	
46	天狗岩館	根田茂字天狗岩	尾根先端	120 m	150×50	1	
47	笹川館	砂子沢	尾根先端	100 m	60×20	1	
48	若宮館	砂子沢字横石	尾根先端	40 m	60×20	1	
49	砂子沢館	砂子沢字御蔵	尾根先端	20 m	50×50	1	
50	手代森館	手代森字館	山麓台地	50 m	250×150	1	手代森秀親(紫波郡誌)
51	黒川館	黒川字沢田	丘陵先端	30 m	150×100	1	黒川某(紫波郡誌)
52	高陣	黒川字高陣山	丘陵頂部	90 m			
53	大ヶ生館(北館・南館)	大ヶ生字城内	丘陵先端	40 m	300×100	2	大ヶ生玄蕃(祐清私記)
54	上大ヶ生館	上大ヶ生	山頂	170 m	80×30	1	
55	江柄館	大ヶ生字江柄	山頂	170 m	200×150	1	
56	乙部館(乙部城)	乙部字館	舌状台地	10 m	400×150	5	乙部兵庫→福士右衛門、天正20年
57	乙部方八丁遺跡	乙部字新田	段丘縁辺	20 m	400×250	2	
58	見前館(見前城)	西見前字館	微高地	1 m	250×200	2	見前若狭→日戸内膳、天正20年存置
59	見前古館	東見前字古館	低位段丘	2 m	300×270	1	見前館以前の館？
60	永井館	永井字前田	平地				永井八郎延明 永井小学校の地
61	向中野北館	飯岡新田字才川	微高地	1 m	80×70	1	東野文七(志和軍戦記)
62	向中野南館	飯岡新田字才川	低位段丘	2 m	70×60	1	東野氏
63	大館	湯沢字館	段丘先端	5 m	200×90	1	杉山一学(志和軍戦記)、二重堀
64	羽場館(小館)	羽場字百目木	段丘先端	6 m	150×100	3	岩倉常太郎(志和軍戦記)
65	飯岡館	上飯岡字赤坂	山麓丘陵	70 m	200×200	3	飯岡平九郎・弥六郎祐實
66	寺館	上飯岡字館野前	微高地	1 m	250×80	2	飯岡氏？
67	月見山	上飯岡字山中	小丘陵	10 m	180×50	1	
68	湯ノ沢館	雫石町長山字有根	丘陵				
69	有根館	長山字有根	丘陵		70×50		

No	城館・遺跡名(別称)	所在地	立地	比高	規模	主要郭	備考(城主・文献・年代等)
70	篠盛館	鞆石町長山字館	丘陵				
71	的館	長山篠ヶ森	丘陵				
72	長山館(岩井花館)	長山字狼沢	丘陵		60×30		
73	土樋館	長山中上	山頂		30×25		
74	柿木館	長山字柿木	平地				
75	上和野館	上野字上和野	丘陵				
76	和野館(曾利館)	上野字曾利	平地				
77	天神館	上野字天神	平地				
78	新里館	上野字片子	平地				
79	中の館(中野館)	御明神字清水川	山麓		150×60		
80	大館	御明神字山津田	山頂		500×250	4以上	
81	高見館	御明神字滝沢	山麓				
82	小赤沢館	橋場字明神下	山麓		90×130		北浦五郎重任(岩手郡誌)
83	北浦館	万田渡	平地				
84	源太堂館	八卦麻見田	平地				
85	鞆石城(八幡館)	下町	段丘	10 m	600×200	5以上	戸沢氏→鞆石(斯波)氏→南部氏
86	古館	古館	段丘	10 m			
87	矢川館	西安庭字矢川野	山頂				
88	戸沢館	西安庭字戸沢	段丘				戸沢氏(鞆石町史)
89	田屋館	西安庭字下戸沢	段丘先端	20 m	100×90	2	
90	橋沢館(野曾木館)	西安庭字除	平地				
91	矢櫃館(安倍館)	西安庭字柝ヶ沢	尾根先端	30 m	150×50	1	多重堀切
92	大村館	南畑 字上台	山麓				
93	御所	元御所	平地				
94	八幡館	滝沢村大釜字白山	山頂	80 m	250×200	1	主郭は径 50 m程
95		大釜字白山	山頂	160 m	120×30	1	
96	千ヶ窪遺跡	大釜字千ヶ窪	山頂	110 m	150×60	1	竪穴状の窪みが約 30 箇所
97	大釜館	大釜字外館	微高地	1 m	200×100	2以上	
98	篠木館	篠木字上篠木	丘陵	20 m	150×100	1	
99	エゾ館	篠木字中村	台地	8 m	200×80	3	先端より一の台・二の台・三の台(消滅)と呼称
100	大沢館	大沢字館	丘陵先端	30 m	100×60		
101	参郷森	篠木字参郷森	独立丘陵	20 m	150×70		明確な遺構なし
102	御飯屋館(鶺鴒館)	鶺鴒字御庭田	独立丘陵	30 m			明確な遺構なし。江戸時代東の麓に御飯屋が存在。鶺鴒(福土)氏
103	勘助館	滝沢	舌状台地	10 m			
104	館	湯舟沢	丘陵	10 m		1	
105	一本木館	一本木	台地縁辺	10 m	90×90	1	
106	稲荷山館	西根町平館字蟹沢	山頂		170×170		
107	平館城	平館	丘陵先端		400×200m	1	平館氏
108	平館城(館山)	平館字館山	山頂		80×80	1	
109	堀切城	平館字堀切	丘陵		140×100	1	堀切氏
110	寺田城	寺田字八幡	丘陵		200×140	1	北氏・工藤氏・帷子氏
111	下斗内館	寺田字斗内	丘陵先端		90×60	1	
112	田頭城	田頭字館越	独立丘陵	30 m	300×130	2	工藤直祐
113	新井館	田頭字平笠	段丘				
114	赤間館	帷子字川原目	丘陵		160×90		
115	荒木田城	荒木田	丘陵	20 m	230×120		
116	間館	間館	丘陵				
117	暮坪遺跡(蝦夷森)	寺田暮坪	山頂	80 m	1		平安時代開郭集落
118	子飼沢山遺跡	子飼沢山	山頂	100 m	1		〃 開郭集落
119	山の神遺跡	山の神	山頂				〃 開郭集落
120	蝦夷館	渋川	台地先端	20 m	40×15	1	高地性集落
121	三森山遺跡		山頂				
122	小屋の沢遺跡	松尾村松尾小屋の沢	山頂				
123	北館(下河館)	松尾中松尾	丘陵				
124	佐々木館(左京館・柵館)	野駄谷地中	山頂			佐々木左京	
125	野駄館	野駄字館	山頂				
126	田中館	野駄野駄	丘陵				
127	寄木館	野駄字大沼	山頂				
128	蝦夷館	寄木畑	独立丘陵				
129	沼崎館	岩手町川口幅の上	段丘先端	10 m	150×70	1	11世紀の土器群
130	川口城	川口幅の上	段丘先端	20 m	150×80		
131	一方井城(新館)	一方井 13 地割輪	丘陵先端	20 m	350×100	3	一方井氏
132	一方井城(古館)	一方井 15 地割	丘陵先端	30 m	170×100	2	一方井氏
133	黒内館	黒内 4 地割	丘陵	20 m	100×60	2	
134	沼宮内城(青山城・民部館)	沼宮内 11 地割城山	丘陵先端	m	300×180	3	
135	尾呂部館	沼宮内 23 地割	台地縁辺		50×50	1	
136	子抱館	子抱 6 地割	山頂				
137	落合館	子抱 9 地割	台地縁辺		180×110	2	
138	横田館(エゾ館)	久保字横田	丘陵先端		200×120	2	
139	江刈内館	江刈内 15 地割	丘陵		100×60		
140	大坊館	江刈内 19 地割	丘陵		140×140		
141	太布蝦夷森遺跡	南山形太布	山頂		40×20	1	
142	泥這館(エゾ館)	葛巻町江刈字泥這	尾根先端			1	
143	本木館	江刈字本木	段丘		70×50	1	

No.	城館・遺跡名(別称)	所在地	立地	比高	規模	主要郭	備考(城主・文献・年代等)
144	西里館	江刈字西里	丘陵		50×100		
145	車門館	江刈字車門	山城		150×150		
146	山王館	江刈字滝沢	段丘		40×40	1	建武元年南朝方によって落城
147	栗山向館	江刈字栗山	山頂				
148	泉田向館	江刈字泉田	山頂				
149	暮坪館	葛巻町江刈字小苗代	丘陵先端		500		横溝氏
150	宗光館(江刈城)	江刈字寺田	丘陵先端		60×40	1	建武元年横溝頼重に安堵(伝)
151	戸花館	江刈字大沢真下	丘陵		160×95		
152	真下館(大沢館)	江刈字大沢真下	丘陵		180×90	2	
153	鳩岡館	江刈字打田内	丘陵		150×80		斜面に堅穴
154	高家領館(エゾモリ)	江刈字高家領	山頂		60×55	1?	
155	上平館	茶屋場字元町	山麓				
156	元町館	茶屋場字元町	丘陵		200×100	1	工藤将監(北朝)建武元年に没落(伝)
157	葛巻城	城内小路	山頂	60	200×200	3	葛巻氏
158	上野沢館(和野沢館)	田代字赤石野	丘陵		330×260		
159	猿方館	古川戸字猿方	山頂				
160	小田館	小田字後	山麓		200×150	2	
161	扇ノ沢館	小田字後	山頂		20×70		
162	昼沢館	小屋瀬字昼沢	尾根先端	30	50×100	1	放射状の竪堀群
163	大石館	小屋瀬字大石	丘陵		70×30		
164	小屋瀬館	小屋瀬字大石	山頂		100×50	1	鈴木氏
165	荒谷館	小屋瀬字荒谷	尾根先端		30×40		
166	星野館	星野字サドア沢口	山麓		190×160		
167	寺畑館	田部字寺畑	丘陵		120×90		建武元年落城、横溝祐定(南朝)に安堵(伝)
168	冬部館	市部内	山頂		150×100	1	堅穴、建武元年南朝方によって落城(伝)、天正年間冬部氏居住。
169	田屋館	田屋	丘陵先端		120×80		
170	宇別東館	宇別	丘陵				
171	桃木館	桃木	丘陵		100×50		
172	中沢館	中沢	丘陵		100×100		
173	玉山館	玉山村玉山城内字館	丘陵先端		200×150	2	玉山(川村)氏
174	二子沢館	玉山二子沢	丘陵先端		200×120	2	玉山大和
175	館花館	玉山館花	台地先端	10 m	160×40	2	
176	日戸館	日戸字古屋敷	丘陵先端	30 m	250×100	3	日戸氏
177	祝の沢館	日戸字祝沢	平地		100×200		
178	川口平館(もぐら館)	川又字赤坂	丘陵先端	20 m	100×80	1	
179	町川又館	川又字赤坂	尾根先端	50 m	150×60	2	
180	館	川又字中館	丘陵				
181	堀館	川又字中館	山麓		100×100	1	山際に堀
182	平田野館(下くらの館)	渋民字大前田	段丘先端	8 m	60×40	1	
183	御供山館	渋民字岩鼻	丘陵先端	20 m	80×50	2	
184	渋民館	渋民	段丘縁辺	20 m	80×80	1	
185	愛宕山館(城山)	渋民字愛宕	丘陵先端	50 m	50×30		
186	山屋館	渋民字岩の沢	山麓		100×300		
187	屋敷森	川崎字川崎	丘陵	20 m	100×36		
188	八幡館(判官堂)	芋田字上武道	段丘先端	20 m	60×30	1	
189	門前寺館	門前寺字館	丘陵先端	20 m	80×80	1	
190	下田城	下田字生出袋	段丘先端	30 m	200×100	2	下田氏
191	ふん館(八幡館)	下田字牡丹野	段丘先端	30 m	200×100	3	
192	矢城館	川崎字向川原	段丘		130×300		
193	松内館	松内字松内	尾根先端		70×50		
194	館	松内字館					
195	中塚館	好摩字中塚				3 ?	
196	折沢山館	馬場字状小屋	丘陵頂部	30 m	50×25	1	
197	葛巻館	馬場字田茂内	丘陵		40×15		
198	小館	馬場字滝の沢	尾根			2	
199	前田蝦夷館	馬場字赤坂	山麓				
200	二子館	馬場字太子堂		50 m	1		
201	熊堂蝦夷館	巻堀字中道	段丘縁辺	8 m	50×50	1	
202	西郡館	巻堀字西郡	丘陵		90×90		
203	桑畑館	巻堀字桑畑	丘陵		100×100	1	
204	段の平館	永井	丘陵先端				
205	小谷崎館	永井字永井沢	丘陵先端	30 m	90×60	1	
206	肝入屋敷	藪川字肝入屋敷	丘陵	40 m	20×10		
207	向井沢堀米館	藪川字向井沢	山麓		60×50	1	
208	軽米沢堀米館	藪川字軽井沢	山麓		30×30	1	
209	蒲田館	藪川字堀米頭	山頂	200 m	140×90	2	

城館跡一覧表 紫波郡

No	城館・遺跡名(別称)	所在地	立地	比高	規模	主要郭	備考(城主・文献・年代等)
210	座頭館	矢巾町広宮沢	台地縁辺	20 m	20 m×10 m	1	
211	谷地館(太田館)	太田字谷地館	平地				太田氏
212	煙山館	煙山	尾根先端	60 m	100×80		煙山氏
213	いたこ館	煙山字蕪ヶ平					
214	室岡館(久保屋敷)	室岡字久保	平地		80×60	2	
215	伝法寺館	北伝法寺字館前	丘陵先端	30 m	100×80	2	
216	岩清水館	岩清水字城内	尾根先端	50 m	150×80		岩清水右京
217	高田館(吉兵衛館)	高田字北田	平地				高田吉兵衛
218	徳田館	西徳田字五百刈田					
219	白沢館	白沢	独立丘陵	20 m	180×60	1	白沢氏
220	山館	紫波町上松本字内分	尾根頂部	510	80×100	1	単郭を基調、郭内は自然地形を残す。
221	松本館	下松本字下二合	平地	1	100×100		松本清兵衛
222	山王海館	土館字小清	山麓台地	30	180×180	2	山王海太郎(天正～慶長)
223	弥勒地館	土館字弥勒	丘陵先端	100	100×80	1	
224	寺館(源勝寺館)	土館字閑沢	丘陵	70	200×250		享徳3年(1454)～
225	笹森館	土館字笹森	尾根先端	50	250×250		
226	笹木館	土館字田面	山麓丘陵	40	150×150	1	
227	金田館	土館字金田	山麓台地	10	110×150	1	
228	浦田館	土館字浦田	台地	20	120×100	1	
229	愛宕山館	土館字和山	山麓丘陵	30	120×80	1	
230	片寄城(吉兵衛館・今崎城)	片寄字中平	山麓丘陵	60	400×250	3	
231	墳館(古館・漆館)	片寄字漆立	山麓丘陵	40	200×150	1	
232	上久保館	片寄字上久保	台地	2	120×100		
233	的場館	赤沢字的場	丘陵				
234	船久保館	赤沢字船久保	丘陵	40	180×100	1	
235	白山館 I	赤沢	山頂			1	
236	白山館 II	赤沢	尾根			1	
237	田村館	赤沢字清水袋	丘陵	25	150×150		
238	加賀館	赤沢字加賀館	丘陵	27	250×300		
239	赤沢館	赤沢字赤沢	山頂	90	200×150	1	
240	古館	大巻字上山	山麓台地				
241	大巻館(河村館)	大巻字花館	山頂	60	350×250	3	大巻氏
242	梅ノ木館	大巻字梅ノ木	平地				
243	赤川館	大巻字長沢尻	平地				葛原伯耆(文亀2年堂宇建立)・葛原義敬(斯波御所次男)
244	谷地館	宮手字谷地館	平地		100×120	1	
245	陣ヶ丘	宮手字陣ヶ丘	丘陵	13	300×280		
246	泉館	宮手字泉屋敷	平地	2	120×90	1	
247	久々館	紫波町宮手字久々館	台地	1 m	80 m×80 m	1	
248	戸部御所(西御所)	二日町字南七久保	丘陵	10	150×100	1	斯波家政(～天正16年)
249	吉兵衛館	二日町字向山	丘陵	25	500×200	2	高田吉兵衛
250	高水寺城(郡山城)	二日町字古館	丘陵	90	700×500	4	以上斯波氏
251	比爪館	南日詰字箱清水	微高地	2	300×300	1	麴爪氏
252	善知鳥館(坂本館)	南日詰字滝名川	段丘陵辺	6	150×100	1	
253	平沢館	平沢字館	平地	0	200×150		築田大学
254	太郎館	平沢字的場	平地				
255	古館	佐比内字古館	丘陵			1	
256	佐比内館	佐比内字神田	丘陵	45	250×200	1	河村秀清
257	牛の頭館	佐比内字牛の頭	丘陵				
258	平栗館	佐比内字平栗	丘陵				
259	星川館	北田字星川	丘陵				
260	北田館	北田	丘陵		30×30	2	円形の単郭
261	梅ノ木館(畑沢館)	北田字畑沢	山頂				
262	稲藤館(フクベ館)	稲藤字田屋	微高地	2	210×120	1	稲藤大炊
263	犬吠森館(東館)	犬吠森字沼端	丘陵	35	200×180	2	東民部
264	江柄館	江柄字大志田	丘陵	25	100×50	1	江柄式部(天正年間)
265	高間館(西野館)	遠山字西野々	山頂				
266	遠山館	遠山字新田	山頂				遠山氏(慶長年間)
267	栃内館	栃内字栃内	段丘陵辺	10	100×120	1	栃内源蔵(天正年間)
268	中島城	中島字上長根	微高地	2			中島安将(天正年間)
269	長岡館	東長岡字館	丘陵	33	350×200	2	長岡八右衛門・南部直重(～慶長5年)
270	西田館	犬測字西田	丘陵先端	12	150×100	1	
271	機織館(彦部館)	彦部字機織	丘陵	35	250×200	1	彦部氏(天正年間)
272	北条館	北日詰字城内	段丘陵辺	6	180×250	1	北条氏・日詰氏(天正年間)
273	星山館	星山字間野村	平地	3	100×100		星山左馬丞
274	山屋館	山屋	山頂	40	60×80	1	

(3) 城館の年代と性格

安倍館遺跡から出土した陶磁器類は、非常に少量ながら概ね 16 世紀代におさまる時期の製品が主体である。文治 5 年（1189）に岩手郡を拝領し、鎌倉時代より当地にあった工藤氏の厨川館とするには、城館の実年代はかなり新しい。

里館遺跡

安倍館遺跡から南西方向約 1 km に存在する里館遺跡は、これまでの調査で、城館としての年代が 15 世紀前半にさかのぼることが明らかである。そしてその終末は安倍館遺跡と同じ 16 世紀の末葉ごろである。安倍館遺跡の瀬戸・美濃の窖窯期の製品は IV 期の灰釉卸目皿 1 点のみで、ほとんどが大窯期の製品に限られる。これに対し、里館遺跡では窖窯 II 期の灰釉瓶子のほか、12～13 世紀の手づくねかわらけや、窖窯 IV 期の灰釉平碗・盤・小壺、常滑・越前の甕、東北地方産の焼締めの摺鉢、中国の青磁碗など、14～15 世紀の遺物が遺構から出土している。この遺跡の西よりの地点では、12 世紀後半から 13 世紀の常滑の壺やかわらけを出土した屋敷の遺構がある（第 34 次調査）。この 12 世紀後半から 13 世紀の遺構については、まだ全体像が不明確で、鎌倉時代の工藤氏の厨川館に比定するには、いましばらくの間慎重でなくてはならない。しかし、遅くとも 15 世紀段階では、遺跡の東部に堀や掘立柱建物群が存在しており、安倍館遺跡よりも先行して構築された城館であることが明確である。里館遺跡は 15 世紀前半には成立していた工藤氏の厨川館であり、16 世紀には厨川城（安倍館遺跡）と併存していた。そして双方の城館は、それぞれかなり近い時期に終末を迎えたと考えられる。

厨川館

では、安倍館遺跡はどのような性格の城館なのだろうか。この城館は当初は本丸部分だけであったものが順次規模を上げ、最終的に 7 郭を擁する岩手郡最大級の城館となった。寛文 8 年（1668）段階でも「栗谷川古城」と伝えられ、城館の主要な活動期が 16 世紀代と考えられることから、天正 20 年の城割で破却された工藤兵部少輔の持城厨川城に最もふさわしい城館である。厨川城はそれ以前からの厨川館とは別に、15 世紀の末か 16 世紀初めごろ以後、何らかの政治的あるいは軍事的要請のもとに築城された新城と考えられる。城内には主要な 4 郭を貫通する南北道路が存在し、のちに鹿角街道が城域の西辺や帯曲輪を通過している。こうした陸上交通路のほか、北上川を眼下にする立地は、川の舟運をも扼す構えである。厨川城（安倍館遺跡）は北上川沿いの水陸の交通を掌握し、岩手郡中央部の拠点として機能した城館であった。

厨川城

(4) 拠点城館の整備

岩手郡のなかでは、雫石盆地の中央部にある雫石城が、規模・構造的に厨川城と比肩する存在である。郡域の厨川以北では、日戸館・玉山館・下田城（玉山村）・川口城・沼宮内城・一方井城（岩手町）・田頭城（西根町）・葛巻城（葛巻町）など、主要郭が 2～3 郭程度で構成される中規模の城館（準拠点城館）が、概ね地域毎にバランス良く分布している。そしてその周囲には、単郭構造の縄張の中小の城館（一般城館）や、小規模城館が多く存在する。こうした城館の分布状況から、戦国期の岩手郡は、各村落や集落の土豪たちが地域を代表する村落領主のもとに統括される社会が想定され、さらに各地域をまとめるように、郡中央部（現在の盛岡周辺）の厨川城、郡西部（雫石盆地）の雫石城が、ある時期に大幅に拡大整備され、岩手郡の 2 大拠

点城館となったと推定される。安倍館遺跡の北館・外館・勾當館や南館・帯曲輪等の遺構密度は非常に希薄であり、城域の拡大から廃城に至るまでの期間が極めて短かったことを示す。城館の最終的な縄張りの成立が、天正20年(1591)の破却からさほど遡らないとすれば、その整備は天正14年～16年(1586～1588)の、三戸南部氏の岩手郡雫石と志和郡への進攻のころであろうか。あるいは天文9年の南部晴政の雫石進攻とまもなく起こった斯波氏の岩手郡進攻のころの可能性もある。しかし天文期の場合は廃城までに約半世紀の期間があり、遺構密度や重複状況の観点から肯定しがたい。やはり天正14～16年の南部信直の雫石・志和郡進攻の時期かそれ以後の可能性が高いと考えられる。雫石城は天正14年以前までは雫石斯波氏の居城であったが、天正14年の三戸南部氏の攻略後は、南部信直の直轄域となっていたらしく、天正20年の破却の前は、信直の代官八日町太郎兵衛が在城した。²⁾雫石城も段丘上に5郭以上並列する広大な縄張りで規模・構造とも厨川城と類似する。厨川城と雫石城の拡大整備が同じ頃の実施とすれば、それは南部信直による志和郡進攻や、岩手郡支配の再編との関連で捉えるべき問題であろう。

2. 縄文時代早期の遺物包含層

第6次外館の調査の東側平坦部で縄文時代早期の遺物包含層を検出した。安倍館遺跡でのこれまでの調査で早期の遺構と遺物を検出した例は、第6次調査中館で早期中葉の遺物包含層を確認し、第8次調査帯曲輪南部で無文の深鉢1点が出土したのに続き3例目である。なお、第7次調査外館西辺で草創期の爪形文土器片1点が出土している。³⁾

過去の検出例

第6次調査で検出した遺物包含層から出土した遺物は早期の土器のほか、前期初頭と中期及び弥生時代終末期の土器がある。その中で多量に出土した早期の土器群についてみる。破片のみで器形は不明ではあるが、文様観察では次の特徴が認められる。

早期の土器

- ①沈線あるいは先端が尖った工具による押引文に貝殻腹縁文を沿わせている。
- ②沈線あるいは先端が尖った工具による押引文で構成された区画帯を貝殻腹縁文で充填している。
- ③沈線による文様の屈曲点に刺突が施されるものがある。

以上の諸特徴から出土した土器は早期中葉にあたる貝殻沈線文系の物見台式土器の様相に類似する。また、物見台式土器は中館の第6次調査でも出土している。

このほか無文土器の体部が1点出土しているが、内外面に指頭圧痕が認められる点などが早期中葉の土器の特徴を備えており、過去の第8次帯曲輪の調査で出土した深鉢と同様のものである。

安倍館遺跡から出土した早期の土器群の分布範囲については今後の調査による資料の追加に期待したい。

3. 続縄文時代～古墳時代の遺構と遺物

第 66 次外館の調査で続縄文時代の土坑を検出している。安倍館遺跡で続縄文時代の遺構や遺物を確認したのは第 66 次調査が初めてで、出土した土器はすべて遺構内からの出土している。安倍館遺跡がのる段丘の中で外館が他の曲輪に比べて最も標高が高く、当該期の土坑を検出した地点は外館の中でもやや小高い地域である。

続縄文時代の土坑 続縄文土器が出土した土坑は R D 022・029・030 の 3 基である。3 基とも平面形は円形を呈し、径は約 0.7 m、深さは 0.21～0.26 m である。埋土は R D 022 が人為堆積で礫が多く混入し、R D 029・030 の埋土は全て自然堆積という相違があるものの規模や形態が類似する。このほか続縄文土器は出土していないが、同時期の可能性をもつものとして R D 024・025・026・031 が挙げられる。埋土は主に粒状の褐色土を少量含む黒褐色土の自然堆積であるが、続縄文土器を出土している土坑群と平面形や規模が類似している。なお、R D 025 からは時期不明の土師器の細片が出土している。以上の土坑群の配置に規則性は認められない。

R D 030 この土坑群の中で比較的遺物が多い R D 030 土坑の遺物について述べる。出土遺物は続縄文土器のほか古代の土師器と弥生時代の土器である。土坑底面からは続縄文時代の深鉢の体部破片 5 点と土師器の小形甕 1 点、別個体の土師器甕の体部下半 1 点などに加え弥生終末期の土器 1 点が出土した。A 層下部からは続縄文土器の破片 11 点が出土している。これらの遺物の出土状況と埋土の堆積状況からみて異系統の土師器と続縄文土器は共伴関係にあるといえる。

続縄文土器 続縄文土器についてはすべてが破片のため器形は不明である。文様要素を当該期の代表的な遺跡である永福寺山遺跡の編年観⁴⁾に照らし合わせると、平行な微隆起線文に挟まれた帯縄文・鋭利な三角形刺突文など後北 C 2-D 式土器の隆盛期である特徴が施されている点、また口縁部の 2 条のキザミを施した隆線や、体部上半に古段階の特徴である円環状のモチーフが認められない点からも永福寺山と同様、後北 C 2-D 式期中段階に位置づけられると思われる。

土師器 底面から出土した土師器の小形甕は底部を欠いているが、口縁部は屈曲した頸部から短く外傾して立ち上がり、口唇部を平滑に作り出している。体部の上半に最大径をもち、膨らみを保ちながら底部にかけてすぼまり、底部が台状を呈する器形である。器面調整は内外面とも丁寧なヘラミガキを施している。これらの特徴は東北部にその系統が求められ、4 世紀～6 世紀までの年代幅で捉えられると考えられる。しかし、後北 C 2-D 式期中段階に相当する土器との共伴関係からみて塩釜式期に併行する可能性もある。

今回の調査で検出した遺構からの遺物量が少なく、土器編年上の位置づけを検討するまでには至らないが、続縄文時代と古墳時代の遺物が共伴した一例である。

註

- 1) 盛岡市教育委員会 1998 『盛岡市埋蔵文化財調査年報－平成 5・6 年度－』
- 2) 『南部大膳大夫分国之内諸城破却共書立之事』(天正二十年六月十一日)
- 3) 盛岡市教育委員会 1987 『安倍館・里館遺跡－昭和 61 年度発掘調査概報－』
- 4) 盛岡市教育委員会 1997 『永福寺山遺跡－昭和 40・41 年発掘調査報告書－』

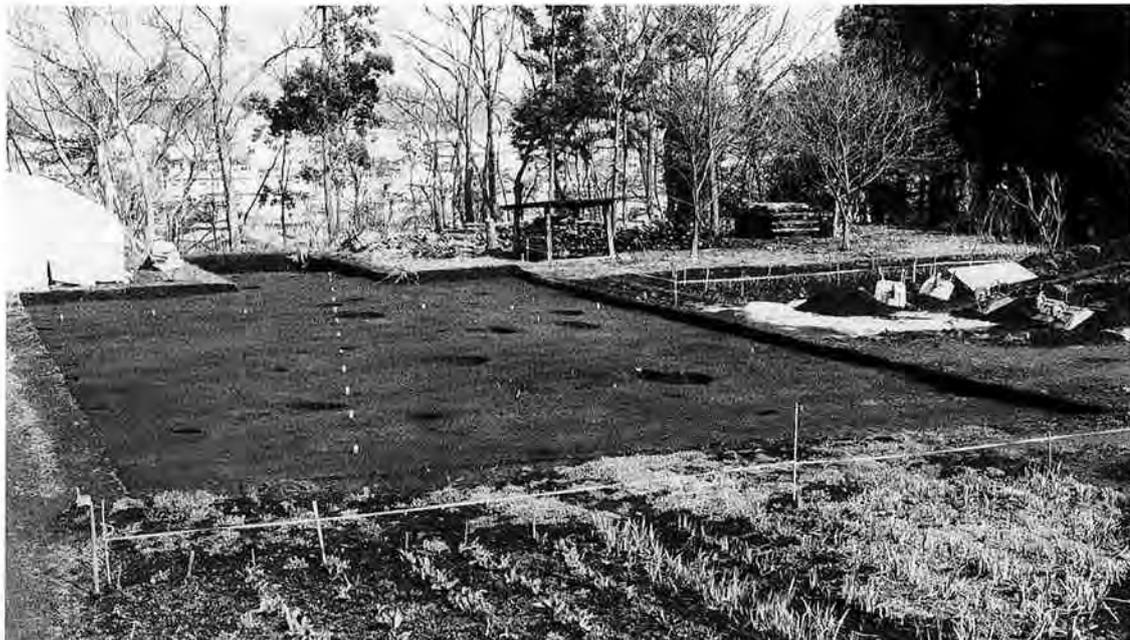
安倍館遺跡
全景



全景
(南上空から)



全景
(西上空から)



外館
第66次調査

全 景
(西から)



RD030土坑
(東から)

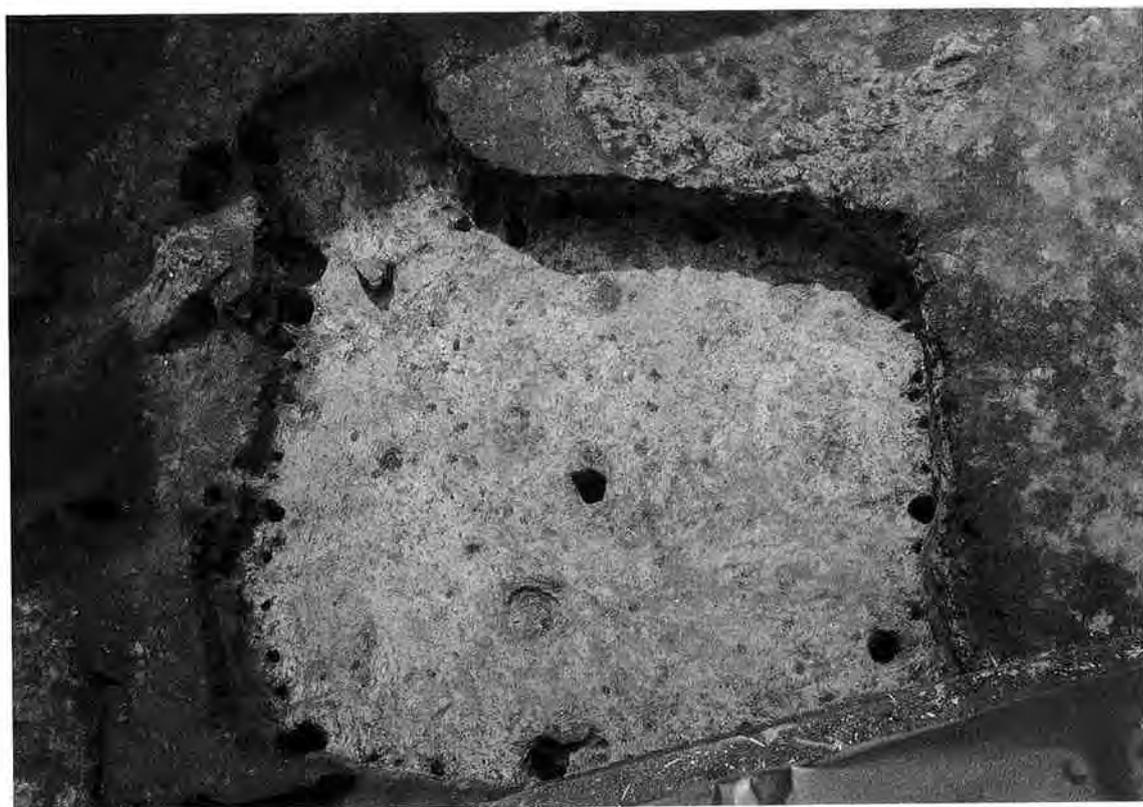


SD200堀跡
(東から)

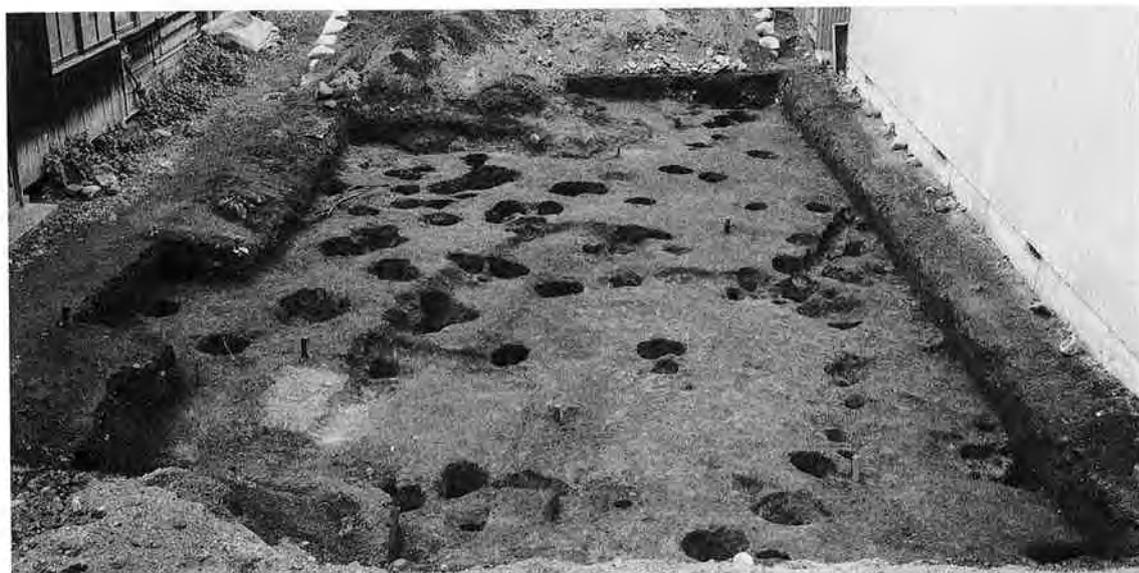
本丸
第45・46次調査



第45次
全景
(南から)



第45次
SI508
竪穴建物跡
(東から)



第46次
北半部全景
(北から)

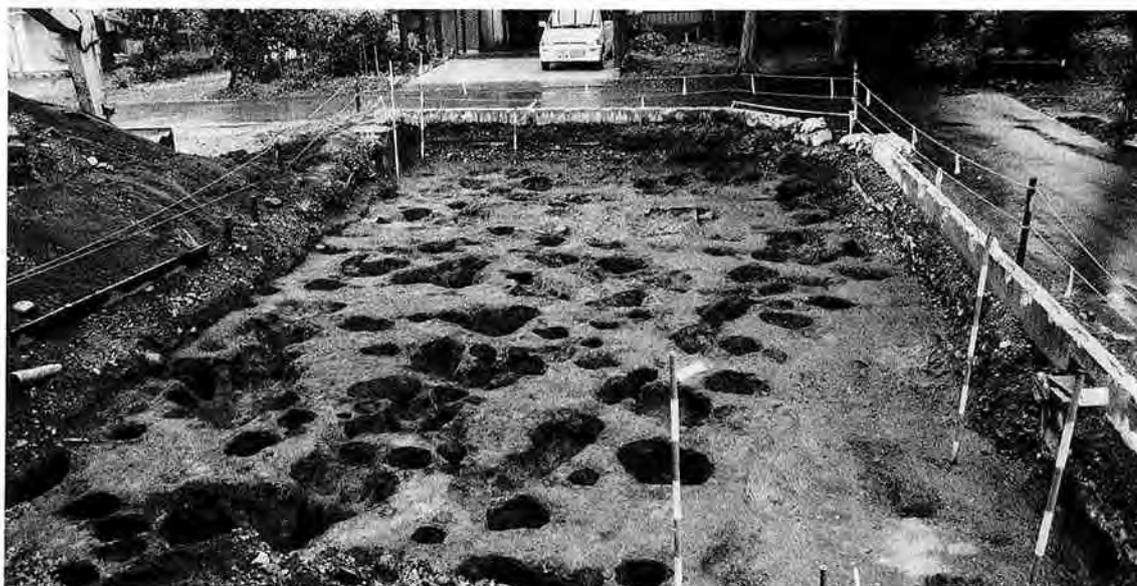


本丸

第49次調査
全 景
(北から)



第49次調査
SI 511
竪穴建物跡
(東から)



第73次調査
全 景
(南から)

中館
第29・30次調査



第 29 次
南半部全景
(北から)



第 30 次
SI 602
竪穴建物跡
(北から)



第 30 次
SI 602
竪穴建物跡
(西から)



中館・
帯曲輪
第52・71次調査

第52次
全景
(南から)



第52次
SI 604
竪穴建物跡
(南から)

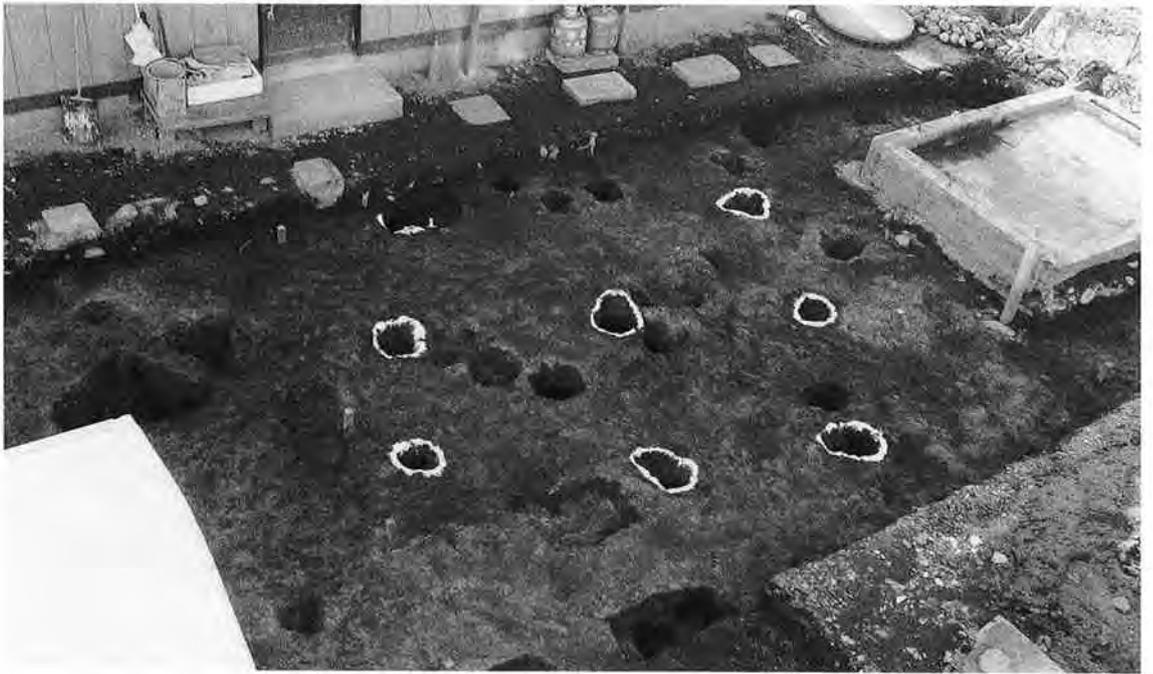


第71次
全景
(北から)

南 館
第44・70次調査



第 44 次
全 景
(南から)



第 44 次
SB 7 0 2
掘立柱建物跡
(南東から)



第 70 次
全 景
(北から)



郭外
第26次調査

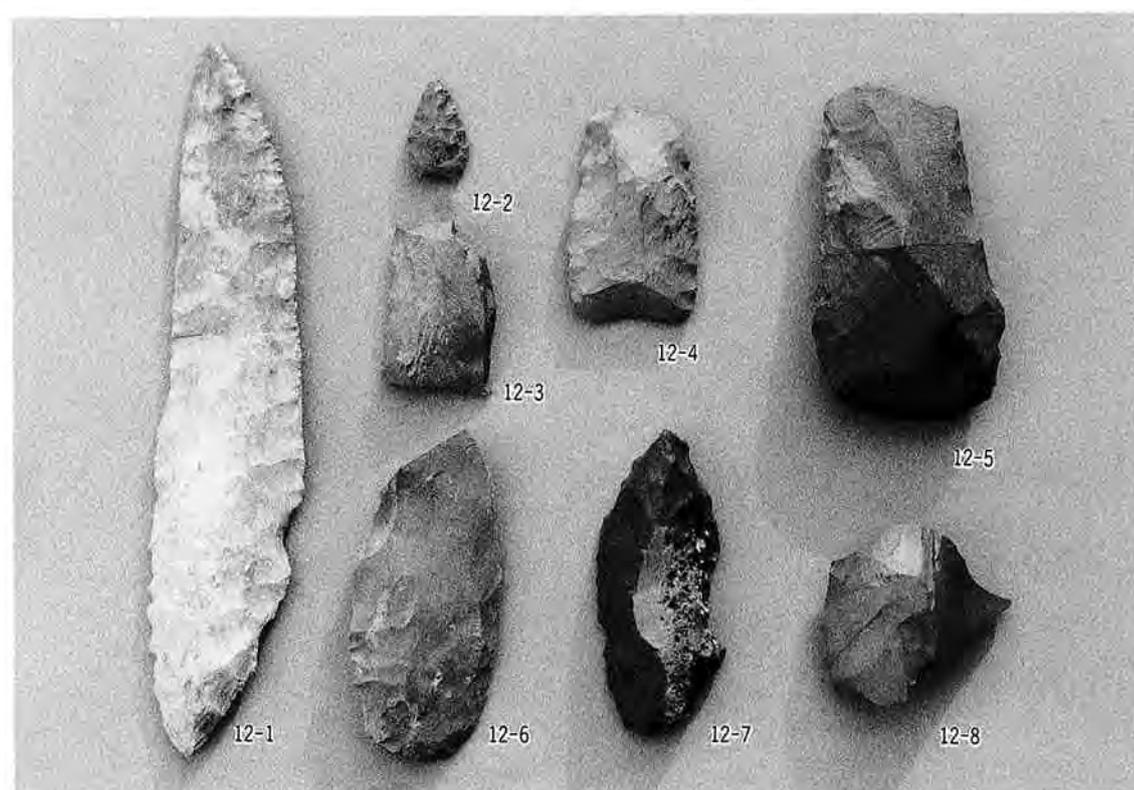
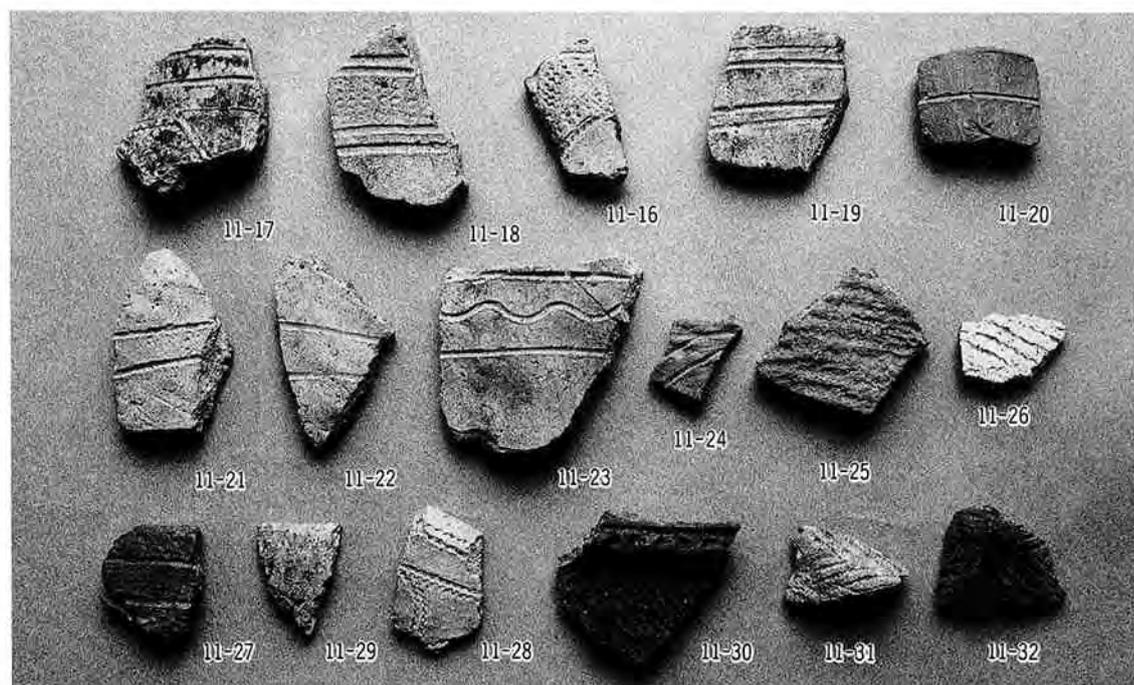
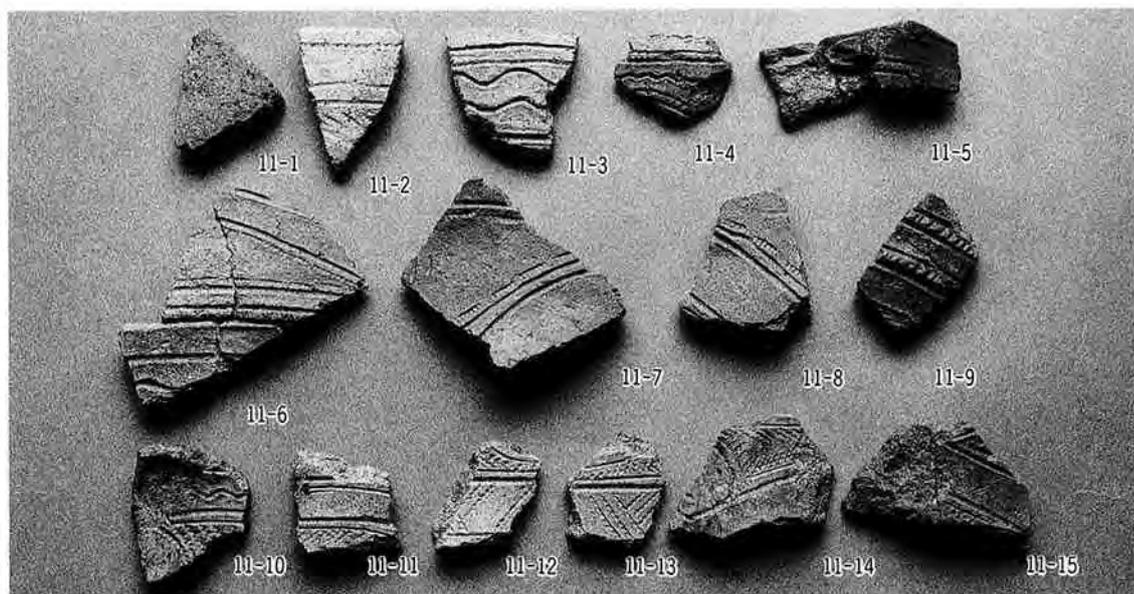
第26次
北東部全景
(南から)

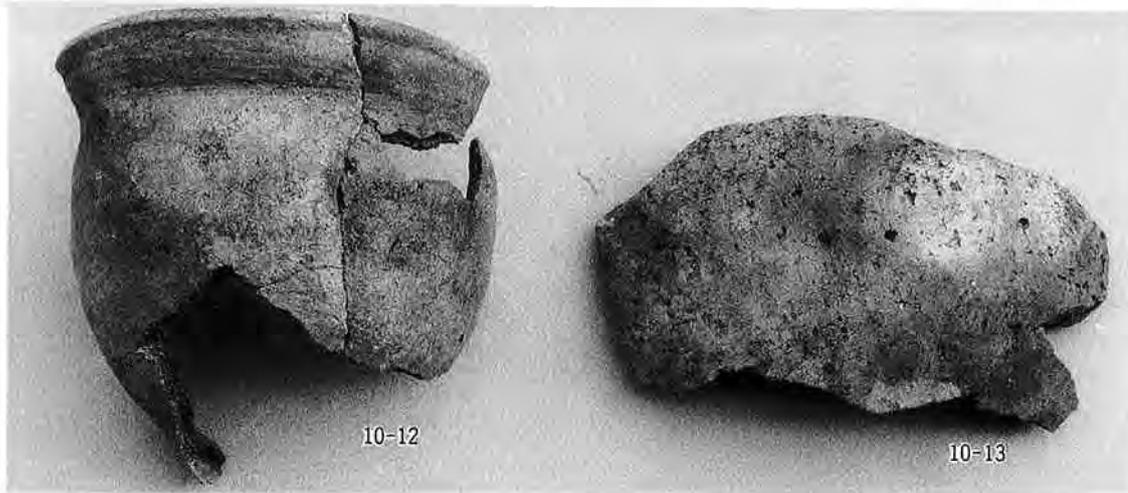
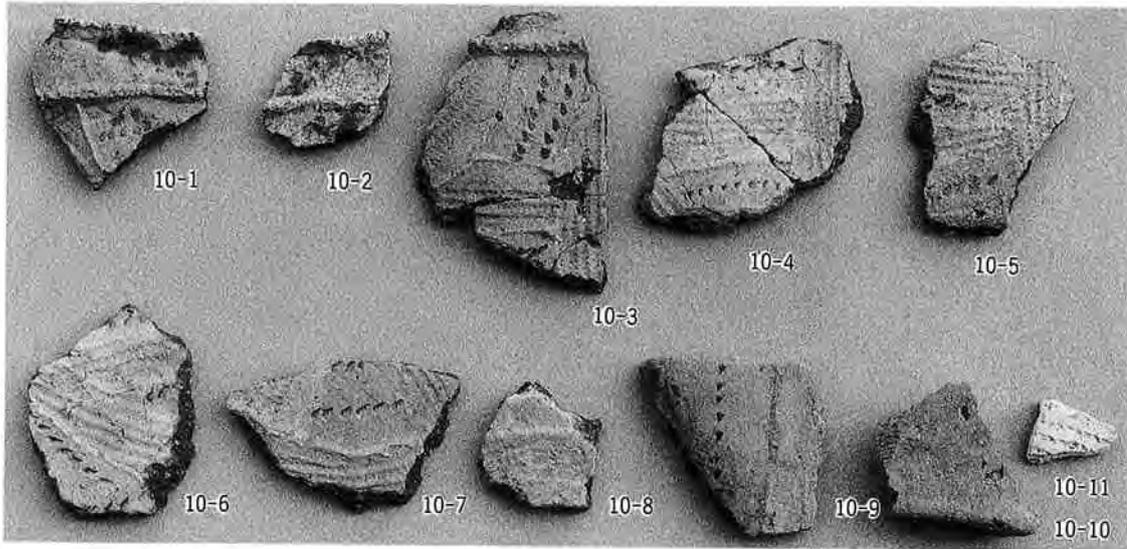


第26次
SB101・102
掘立柱建物跡
(北西から)



第26次
SK112土坑
(東蔵から)





第66次調査
RD033土坑
出土遺物



本丸出土遺物

報告書抄録

ふりがな	あべたていせき							
書名	安倍館遺跡							
副書名	一厨川城跡の調査一							
編著者名	平澤祐子・室野秀文 他							
編集機関	盛岡市教育委員会							
所在地	〒020-0855 岩手県盛岡市津志田14-37-2 TEL 019-651-4111							
発行年月日	1999年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あべたていせき 安倍館遺跡 第26～75次	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 あべたてちやう 安倍館町	03201	LE06- 1123	39° 43' 4"	141° 7' 45"	1988.4.20 ～199811.27	7650.6㎡	住宅建築 宅地造成 上下水道敷 設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
あべたていせき 安倍館遺跡	集落	縄文・続縄文	土坑 27基		縄文土器・石器・弥生土器 続縄文土器・土師器			
	城館集落	中世	竪穴建物跡9棟 堀跡6条 土塁跡2 柱穴群		陶磁器・古銭			
		中近世	竪穴建物跡2棟 掘立柱建物跡13棟 掘立柱列跡3条 溝跡21条 土坑33基		陶磁器・古銭・鉄製品・石器			

安倍館遺跡

—厨川城跡の調査—

1999年3月31日

発行 盛岡市教育委員会

〒020-0835

盛岡市津志田14地割37番地2

電話 019-651-4111(内)7352・7353

印刷 山口北州印刷株式会社

〒020-0133

盛岡市青山4丁目10-5

電話 019-641-0585